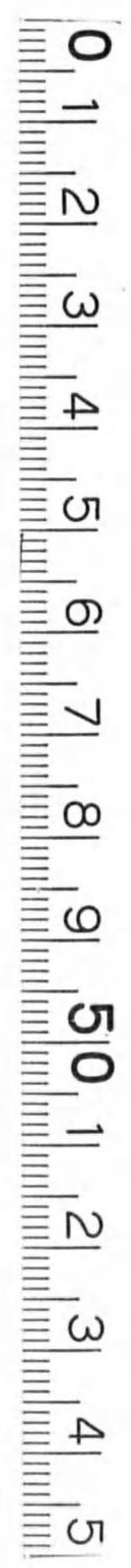


818
23

田 國 男 編
倉 市 郎 著

喜界島方言集

一・集言方國全



始



818
23



柳田國男編・岩倉市郎著

島方言集

中央公論社版



一・集言方國全

全國方言記錄計畫

一、言語が我々の祖先から相續した最も大切な文化財であることは、その恩澤が老弱男女、いかなる階級にも行き渡つて居るのを見てもわかります。古來この財寶を最も有効に、又適切に利用し得た國が、文化の榮えを認められて居ります。將來も亦必ず同じことであらうと信じます。

一、言語の利用を完うする爲には、何よりも先づ今ある形を詳かにしなければなりません。改良選擇は必要ですが、それも是も知つてから後の話であります。國に如何なる言葉がなほ傳はり如何なる言葉使ひが行はれて居るかを先づ知らなければなりません。それが現在はまだ地域で謂つて見ても、三分の一しか知られて居らないのです。さうして土地毎の慣例は極めて區々であります。行く／＼全國がほゞ一通りの物言ひで、安らかに交通するやうになる爲には、やはり又互ひに相手の言葉の意味を會得することが條件で、さうなれば強制も口眞似も無く、置き換へは當然に行はれると思ひますが、今はその参考資料が歎かはしく貧弱なのであります。

一、そこで私たちは、新たにこの全國方言記錄を思ひ立ちました。是まで方言調査の行はれた土地、

及びその方法と成績とは、大よそは明かになつて居ります。其中にも完全とは言へぬものが多いのですが、それは我々の事業の進みにつれて、別に増補修正を企てる人が出て來ることと思ひます。最初に力を盡したのは、今まで一つの方言集も出ず、外からも注意をせられて居なかつた地方の記録を、出來るだけ多く公けに紹介することで、是には幸ひにして各地にもう幾人かの協力者を見つけて居ります。

一、調査の單位としては一つの島、一つの郡を區域とするのが適當かと思つて居ります。同じ島同じ郡内でも、環境の差や土着の歴史の古さ新らしさに因つて、可なり著しい言葉のちがひを見ることがありますが、それを究めて行くと同じ土地の二つの部落、二つの家筋の間にも全く同じといふものは無く、しかも他の多くの共通した部分を、何度も重複して掲げなければならぬ結果になります。それで原則としてはこの區域を一つのものとして記述することにしました。地形その他の特別の事情があつて、二つ以上に分けた方がよい場合も必ず有ると思ひますが、大體に一島一郡内では二つの方言集は出さぬことにします。第二第三の調査が出たときは前のものと比べて見て、異なつて居る點のみを追加として出すことにします。無論その卷頭には調査地と集録者とを明記して、それが必ずしも全區域を代表するもので無く、或はやゝ一部に偏して居るかも知れぬといふことを、斷つて置かなければならぬと思つて居ります。

一、今までの採集の普通の弱點は、折角集まつたのだから先づ残して置かうと、材料の精撰を怠り、

たゞ分量の多いのを喜んだことであります。遠い離れ島などには反對の例もありますが、今日の交通状態では方言の數は日に月に減少して、都市の周圍は申すに及ばず、田舎も人の出入の多い平地部では、幾らも保存せられて居ないのが常の状態で、又それ故にこそ我々は採録を急いで居るのであります。之を顧慮せずにとゞ互ひに競争して、かさを高くすることはかりに骨折つたのは、損なものを並べ立てるといふことは、むだといふ以上に弊害があります。折角或土地のみに生育し、又は大事に守られて居た好言葉、知れば利用したくなるやうな適切な物言ひが、そんな雜然たるものゝ中に紛れ込んで、印象を失つてしまふのは惜しいことであります。更に今一つの弊としては、氣をつけて捜せばまだ色々土地の言葉はあるのに、もうこの位集めたからよからうと、早く安心して休息する人の多いことで、山へ菌を採りに行き、濱へ蛤を拾ひに行く者が、斯んなことをして還つて來たら大評判ですが、方言集だけは今まで是が笑はれもせず居たのであります。

一、地方の資料が蓄積して來ると共に、一層この雜糅といふことが有害なものになります。我々もつい過ちを犯さぬとは限りませんが、ともかくも分量の少ないのを氣にかけず、最初から嚴選の方針を以て進むつもりであります。地方の言葉の存録する價值があるか否かをきめるのは、さうむづかしい仕事ではありません。たとへば一つの單語でも土地によつて、發音のし方が色々變つて居ます。是は「なまり」と稱して可なり御互ひに耳につき、一度はきゝそこなひ又は誤解もすることが

有りますが、もと／＼双方の知つて居る言葉ですから、通譯の必要などはありません。又言語學の上からは是も注意すべき現象に相違ありませんが、もと／＼一般の傾向であつて、個々の單語の問題ではないのです。其上に是を確實に世に傳へるには、假字書き以上のもつと込入つた方法に據らなければなりません。斯ういふ音韻變化の大體の特徴を、三四の例によつて附記して置くまでは、親切だと思ひますが、それを一つ／＼アイウエオ順などにして、語彙の中にまぜて並べるとは、誤りでもあり損でもあると思ひます。同じ一つの都會地の中でも、我々のよく知つて居る單語や句を、人によつて色々に發音して居るのを聴きます。是には又別に考へなければならぬ理由があるので、異なる單語又は言ひ方の存在とは、混淆すべきものではなかつたのです。方言を輕蔑し又は粗末にした人々の考へ方には、半ば以上この誤れる混淆から來て居るものがあると思ひます。

一、反對の意見もありますが、私ただけは訛語を方言から分離して、二通りの取扱ひをする方針であります。たゞ一つ問題になるのは、よく見れば訛りに過ぎぬ言葉を、久しく用ゐて居る爲に當人たちは別の語と思つて居るもの、又は別の語か只の訛りかを、簡單に見分けられぬものはどうするかといふ點であります。さういふ言葉のまちがつて方言の中に入つて來るものは、さう嚴重に排除するには及びません。やゝ疑はしいものは存して置いてよからうと思ひます。多くの訛りは既に中央の風に統一せられて、ほんの一つ二つ何かわけが有つて残り留まつて居るのもあれば、更に他の土地から訛りを帶びたまゝで、是だけ入つて來て居るといふ例もあります。人が同じ語か否かを

疑ふ頃になると、自然に内容にも少しづゝのちがひを生じて、終には二つの語に分れて行くこともよくあるのです。たとへ其爲に原則は一貫せぬことにならうとも、特殊な訛語といふものは存録して置いた方が、利益だといふ場合が多からうと思ひます。

一、とにかくに斯ういふどつちに附けるかの定めにくい言葉を、棄てずに置く場合が稀にある爲に、わかり切つた訛りを片端から並べるといふことは愚かであります。開けた土地から出て居る方言集には是ばかりが多く、まこと我々の謂ふ方言に入れてよいものは、三粒か四粒しか無いといふものが多いのです。もつとひどいものになると自分が知らぬといふのみで、誰でも知つて居り中央の都市でも使ふものを、土地で聴いたといふだけの理由で採り入れて居ります。斯ういふのはどんな事があつても厳選しなければなりません。それで無いと、日本に現在どれほどの言葉の數があり、又どういふ風に用ゐられて居るかを知らうとする人々が、無益な煩累を受けることになるからであります。しかし或一つの語が方言であるか否かを決するには、折々は水掛論が起ります。といふのは既に知つて居る、聴いたことがあると謂つても、其證據を擧げることがむづかしいからであります。それで私たちは便宜の爲、大小どれかの辭典に出て居る單語は、もう方言で無いと見て居ります。辭典の數は日本には多いが、地方の言葉は掲げて居りません。たま／＼それを出して居るものは皆方言と斷つて居ります。つまり是だけは既に公有物となり、捜せば見つかる状態になつて居るのです。我々は新らしい知識を世に供する爲に方言を記録して居るのですから、字引にそつくりとある

語は棄て、内容なり地域なりがちがつて居るものだけを出すことにします。しかし大きな辭典に一々は當つて居られないといふなら、實際は大槻氏の小言海を参照しても、大よそ目的は達するといふことを申して置きます。それも面倒だといふ人がもし有れば、是は何でも無いことだからこちらでしつと刪定します。

一、在來の方言集の今一つの飽き足らぬ點は、言葉の説明が屢々精確でないことでありました。この原因の主たるものは、方言には必ず標準語の對譯があるものといふ誤信であります。さういふことは斷じてありません。全國到る處に行き渡つて居る事物の名、是は何と謂ふかと指さして問へるものならば、一物數名といふことも確かめられますが、それですらトウナスとナンキンは少しちがふと謂ひ、又は何々の一種とか似たものとか、説明を添へなければならぬ場合があるのです。まして無形名詞や形容詞動詞等の、田舎で保存せられ又は出來たものには、寧ろ標準語にそれに當る言葉が無いと思つてこちらを使つて居る人が多いのです。果して無いと思ふのが正しいかどうか、比べて見た上で無いと決しられませぬが、それを明かにする爲にもつと丁寧な解説が入用なのです。上手に精密にそれを言ひ現すことは容易ではありませんが、出來るだけ近いことは多く重ねて見てもよく、又現實にどんな風に使つて居るかを、例示して置くのも大に結構だと思ひます。但し用例は耳で聞いたものがよく、自分で作文したのはどうしても無理なものが多いやうです。

一、記録の排列には相當の苦心を要しますが、目標は之を利用するであらう人々の便利、出來るだ

け印象を強く、成るべく退屈をせずに興味を以て讀み続け、又は比較的手輕に知りたいたいと思ふ語が搜し出せるやうに、しなければならぬと思ひます。從來の五十音順は、たゞ雜然と並べて置くよりもよいといふのみで、本を讀む字引のやうに、是で搜すといふことは先づ有りません。たゞ同じ語が名詞にも形容詞副詞にもなる場合に、隣どうしにあると便利だといふ位なものです。語數の少ない場合などは、寧ろ品詞別に又似寄つた言葉を近くに置いて、是だけの言葉が今行はれて居るといふことを、一目でわかるやうにした方がよいかと思ひます。最初は試みに色々ちがつた方式を採用して見ます。經驗を積んで行くうちに、どの方式が最も効果が多いかといふことが、自然にわかつて來てそれにきまることゝ信じて居ります。喜界島の方言集は、少し考へる所があつて特に五十音順に見えました。南の島の採集事業は、今はまだ甚だしく不振であります。斯ういふ形で一つの島の記録を公けにして置くことが、或は幾分か他の島々の學徒に興味を抱かせ、且つ採録を容易にするだらうかと思つたからであります。

一、今まではといふ方言集の出で居らぬ土地で、どうしても無くてはならぬと思ふ方面へは、既に勧誘を始め、又知友に依頼して篤志の人たちを物色し、事によつてはこちらからも調査者を出さうかと考へて居ります。小學校その他で既に採集をして居て、出版の機會を得ずに居られるものにも、事情の許す限り協力したいと思ひます。たゞこの記録が全國に及ぶには、相應永い年月を要します故に、最初から用意をして成るべく一方面に偏せず、程よく東西南北に配られるやうにしたいの

で、自然に後まはしになるものも出来るかも知れません。それから又我々の嚴選主義や排列の方式に異存があつて、御相談を進められぬ場合も起るかも知れません。我々の希望をいふならば、一つの言葉をカードに取つて、再調査の照會に便利にし、同時に取捨と排列との決定だけは、編輯者に委ねられることあります。

一、最後になほ申し添へたいことは、是は出版者にも又編輯者にも、絶対に利益事業ではないといふ一事であります。事業界の自然の傾向に任せて置くと、いつの世になつても『全國方言記録』はまゝとまりません。それが又我々の新たに之を企てる理由であります。

柳田國男

喜界島方言集を第一編とした理由

全國方言記録を出したくなつた動機の有力な一つは、この本の原稿がいつまでも原稿のまゝで、私の身近くに轉がつて居ることだつた。前年我々の畏敬する伊波普猷君が、沖繩語の古い姿、それが推移して現在の形態にまで、變遷して來た事情を詳かにする爲に、久しく外境視せられて居た宮古八重山の列島、殊には三世紀以上も手を別ち、交通を遮斷せられて居た大島郡の島々を廻つて、島毎に持ち傳へて居た言葉とその改まり方を調べて見ようとせられた際に、最も大なる影響を最初に受けて、奮起した青年がこの集の採録者、岩倉市郎君であつた。それが又幸ひなことには良い耳良い手、且つ非常にはつきりとした理解力をもつて居たのである。岩倉君は生れた土地とその四周の言葉を集め整理して、當然に之を先づ伊波氏に見せた。同氏は其頃すでに東京に寄寓し、遙かに故國の文物歴史に向つて、無限の感懷を寄せて居たので、この大きな方言集に對して一つ、沖繩本島の單語の相同じく、又は根原は同じと思はれるものを書き込むといふらしい仕事を、寧ろ樂みの心を以て爲し遂げられた。前後數十年に亘つた伊波君の學究生活にも、斯ういふ意義の深い遭遇

は、なほ希有な事であらうと私は思つて居る。

この大きな原稿はまはりまはつて、今私の手元に保管せられて居る。是を容易に世の中に送り出すことのできなかつた理由を、私は色々の側面から改めて考へて見たのである。文書は前代の言語事實を確實に存録するが故に、近世の國語學者は悉く之に依據して、所謂國語學を打立て得べしと信じたのであるが、筆に文字に傳はり得たものは、實はその一小部分に過ぎなかつたと思はれる。第一に文學は都府のしかも上流のみに行はれ、語辭の上品下品を選別することは、昔は殊に峻酷であつた。單に内容の文學生活と交渉なきが爲に、其選別の外に置かれたものも亦多い。南の島々は既に記録が乏しく、しかも久しく交通を制限せられて居た。社會の構成にも互ひに異なる條件が來り加はつて居る。それが三百有餘年の隔離を乗り越えて、今も過半の共通點を保持して居たといふことは、何よりも顯著な又重要な現象であつて、従つて是と他の一方の、考證に由つて始めて根原の同一を認め得べき親近語とは、資料として本來二つに分けなければならぬものである。伊波君が「おもろ草紙」以外、殆ど中世の記録を傳へぬやうな島々の言葉の有りかたちを、或時は老人の忘れ残した古風な知識から、又或時は變り果てたる當世風の言葉使ひの中から、見つけ拾ひ上げようとせられた勞力は尊いが、それはもう研究であつて事實より一つ奥のものである。もしも我々の方言集が、眼前現存の何人にも争へない資料を提供する役目を持つとすれば、この研究に屬する部分は別にするのが、たとへ出版頒布の容易である場合にも、やはり至當なのでは無いかと私は考へ

た。雜誌「方言」の前の號には、壹岐島方言集と沖繩喜界の言葉と、三つを比較した研究も既に公表せられて居る。日本方言學會の研究報告書なども、たゞの方言集までは出して居られぬだらうが、斯ういふ比較の考證は悦んで載せることと思ふ。だから今回はまづ此中から、喜界島の現在の事實だけを、抜き出して本にすることにし、次には沖繩中央の今日の方言集を出し、それから追々と兩方の地方語のどれだけ近く、どれだけ三百年の間にちがつて來て居るかを、端から段々と明かにして行きますと、強ひて御兩人の共同事業を、引分けるやうな方針を決したのである。伊波君がその折角の仕事を後まはしにしても、いやな顔もせずこの案に同心せられた、雅量ある態度には感謝する。その代りには將來同君の比較研究を、少しでも早く又精確に、世上に紹介しなければならぬ義務も私が負うたのである。一人で集録した今までの方言集にも、語源の穿鑿や正訛の辯、少しばかりの文獻比照、乃至は他の地方との類似變化などを、物の序を以て書き添へたものがあるが、學問上さういふ權能をもつた人は實は少ない筈である。伊波氏の研究を別置した以上は、是からの我々の方言集にも、當然にそんな斷片的な解説は、他の方法を以て發表してもらふやうにしなければならぬと思つて居る。

方言を五十音別に並べて置くことは、多くの場合には必要の無いことだと我々は信じて居る。單にどういふ言葉があるかを知る爲には、寧ろ同種のものに近い所に置く方がよいので、聽いて如何なる意味かを探るべく、之を辭典として索引する者などは有らうと思はれない。それ故に第二集

以下は原則として類別法を採り、なほ利用者の注文に應じて、追々にその並べ方を改良して行くつもりである。たゞこの南の島々の方言だけは、今まで餘りにも互ひに相知らず、しかも一たび知り得たならば、古い因縁の久しく続くものであることに心付き、新たに啓發する所がきつと多いと思つたので、私はわざと舊式の五十音排列法を、其まゝ採用することにしたのである。今一つの理由は島々の知識人が、採集の爲にさして多くの勞苦を費さずとも、心閑かにこの岩倉君の方言集を見に行くことによつて、自然に自分たちの母の語のどんなものであつたかを思ひ出し、もし又興味があつて此語彙の頭の上に、ぼつ／＼と異同を書き込んで行つたならば、いつと無く我土地我島の方言集になつてしまふやうに、言はゞ一つの臺帳の役目に、この最初の辛苦の結晶を、利用して見ようと思つて居るのである。澤山の離れ島をもつた日本のやうな國は、世界を探しても恐らくは他には無い。國語が永い歲月の隔離によつて、どれだけの獨立した變化を受け、又どれだけの固有の發育を續けたかといふ、活きた實驗も我々ならば出来る。それが當代の學問に在つて、今もまだ空想とこじつけとの遊歩場になつて居るのは、全くこの實着なる觀察法の考案せられなかつた爲かと考へると、是は誠に心の勇む鹿島立ちである。私は自分の力の續く限り、先づこの一冊を遠い島々の方言の悩みをもつ人たちに頒つて見るつもりである。一部の指導者が思つて居るやうに、方言はそんなに改めにくいものではない。現に沖繩などの若い男女の言葉は、もうよほどませこぜになつて居る。唯之を普通にする爲には、若干の歲月を要するだけである。英語佛語といふやうな二つの國

語で無いから、今日より甲を止めて乙にするといふことが出来ないだけである。さうしようと思つた所で、まだ代りのものが興へてないのである。青森でも鹿兒島でも、言葉は話す者自身が段々に覺えて片端から取替へて行き、何の強制は無くともよほど判りやすく、又不自由をしなくなつて居る。島々の人が持つ昔からの感覺と考へ方、智能術藝にはそれ／＼の言葉があつた。それを顯はす新らしい言葉を授けなければ、移りたくても移ることは出來ず、口で使はずとも腹の中で、依然として古い言葉で考へたり感じたりすることを罷めないであらう。古い言葉の有るだけを一應は出させて見て、それに標準語の正しい言ひ改めが可能であるかどうか、誰か考へて遣ることが國語統一政策の、實は大切な準備作業であつたのである。順序は逆になつたが今からでも、それを試みた方が効果は擧げ易いと思ふ。私はこの喜界島方言集が縁となつて、島々の言葉の良い對譯が見つけれ、大きな勞苦と壓迫感と無しに、互ひの交通のもつと簡易になつて行くことを期待して居る。伊波岩倉二君のやうなまじめな調査もせず、方言のたゞ滅び消えて行くことをこそ、多くの人々は惜み悲んで居るのである。それが残りなく新しい世代の、全國一致の言葉に引繼がれて行くことを、拒み妨げんとする者などは有らう筈が無い。だから統一の必要を感じる土地では、特にこの新舊の繋がりを探ね究めなければならぬので、それを全然怠つて居た者が、強ひて昔の言葉を使はせまいとしたことは、島々の大きな不幸であつたと私などは信じて居る。この方言集が世に弘まつた曉、先づ現れて来るものは反省であらう。其次には過ぎ行く老人たちの心持を理解しつゝ、之を若

い世代に紹介する志となつて、國の協同を愈々奥深いものとする事が出来るであらう。それを考へたゞけでもう世の中は少し明るくなる。方言集をたゞ誤つた物言ひの目録のやうに思つて居た人々は、ともかくも一通りこの本に目を通して、靜かに今一ぺん考へて見るべきだと思ふ。

昭和十六年一月

柳田國男識

喜界島語の音韻

母音

喜界島語の母音は[a][i][u]の三音が基本で、國語の[e]は[i]に、[o]は[u]に發音されるのが普通である。これを國語五十音圖に比較してみると、國語の「イ」列「エ」列の兩音列は「イ」列「ウ」列に「ウ」列「オ」列の兩音列は「イ」列「ウ」列に悉く合併して發音されるのである。尤も「エ」「オ」の音及びその音列は、感動詞の中や助詞「の」に相當する「ン」の前等にあらはれる事があり、又二重母音の變化してなかつた長母音[ei][ou]がある。尙小野津、荒木等の部落には右の五母音の外に特殊の母音が存在するが、本方言集にはそれらの音を伴ふ語形は採録しなかつた。

子音

[e][o]母音の[i][u]への合併による音混同は、その結果起つたと見られる多様の子音變化に依つて或程度語意の混亂を防止してをり、しかして此の子音變化現象は喜界島語の最も顯著な音韻的特徴をあらはしてゐる。以下國語の[e][o]から轉じた[i][u]を轉來の[i][u]と稱し、本來の[i][u]と區別する。有氣音と無氣音 假に有氣音無氣音の語を用ひるが、喜界島語を理解する上に、此の兩音質の區別は極め

て重要である。

有氣音[k] [p]は國語の「カ」「タ」「バ」の子音に同じいが、或場合には特に破裂の度を弱め然も息の出方を非常に強く發音する事がある。

無氣音[t] [p]は一種の喉頭破裂を伴ふ音と言はれ、有氣音の場合に比べ破裂度は強いが、息の出方は極めて微弱である。

「カ」行音 [e]から轉來の[i] [u]を伴ふ[k]即ち國語の「ケ」「ク」から轉じた「キ」「ク」の子音は有氣音に發音されるが、本來の[i] [u]を伴ふ「キ」「ク」の子音[k]は無氣音化して「キ」「ク」となり、兩者はつきり區別される。例へば「コチ」(東風)は「クチ」、「ケン」(劍)は「キン」と發音されるが、「クチ」(口)は「クチ」、「キン」(金)は「キン」と發音される等である。

本來の[i]を伴ふ無氣音の「キ」、例へば右の例に於ける「キン」(金)の「キ」は、更に轉じて「チ」になる場合が多い。「菊」が「チク」に、「鋤」が「スチ」になる等である。

「ハ」行音 前項の[e] [o]から轉來の[i] [u]並に[a]を伴ふ[k]即ち「ケ」「ク」から轉じた「キ」「ク」並に「カ」の子音は、[h]に變化した例が多い。喜界島語に於ける[h]を子音とする「ハ」行音は、實に此の「カ」行音の一部の變化で、國語の「ハ」行音とは全くその系統を異にするものである。例へば「桁」が「ヒタ」、「米」が「フミ」(humi)「肩」が「ハタ」となつた等である。

「パ」行音 國語の「ハ」行音の子音[h]は、喜界島語では總て[p] (有氣音) 又は[b]に發音されてゐる。喜界島語では此の[p] [b]と、前記[k]から轉じた[h]との區別は明確で、二三の例外を除いて決して混同され

ない。例へば「パタ」(旗)と「ハタ」(肩)、「プシ」(星)と「フシ」(腰)の如きである。

「タ」行音 タ行音の子音[t]も轉來の子音[i] [u]を伴ふ場合は有氣音に「テイ」「トゥ」で發音されるが、本來の母音[i] [u]を伴ふもの即ち「チ」「ツ」の子音は無氣音化して「チ」「ツ」となる。

喜界島で「ツ」及びその濁音「ヅ」を發音する部落は小野津其他二三の部落のみで、他の大多數の部落には此の兩音が無く、「トゥ」「ドゥ」で發音する。

「ナ」行音 轉來の母音[i]を伴ふ[n]即ち國語の「ネ」は「ネイ」に發音され、本來の[i]を伴ふ「ニ」はそのまゝに發音される。「根」を「ネー」、「荷」を「ニー」とする如きである。

尙喜界島語では「根」「荷」の外「名」「手」等の如き一音節語は、母音を長めて「ナー」「ティー」と發音するのが通則である。

喜界島語の音韻上の特徴は此の外にも種々認められるが、今は以上の最も顯著なる例を擧げるに止める。

凡例

一、本集に收められた語彙は、編者の出生地たる鹿兒島縣下喜界島早町村大字阿傳部落を中心とする花良治、嘉鈍、早町等の隣接部落の言葉を中心とする。

右の地域に行はれる言葉は大體に共通するものが多いが、發音や語意の上に差異あるものも尠くはない。それらの言葉は必要と認められる程度に、部落略號を附して併せ掲げる事にした。

又右地域の言葉と著しい差異を持つ小野津、伊實久、浦原、上嘉鐵等の言葉も若干を加へた。各部落の略號は左の通りである。

- 阿傳 (阿) 花良治 (花)
- 嘉鈍 (嘉) 早町 (早)
- 小野津 (小野) 伊實久 (伊)
- 浦原 (浦) 上嘉鐵 (上嘉)

二、老若男女等の各階級にのみ用ひられる言葉及び殊殊の言葉をあらはす爲には、左の略號を用ひた。

(老) 老人の用ひる言葉

- (若) 若年者の用ひる言葉
- (兒) 幼兒の用ひる言葉、或は大人が幼兒に對し用ひる言葉
- (女) 婦女子の用ひる言葉
- (諺) 俚諺

(歌言) 歌謠に用ひられてゐる言葉

三、熟合語、用語例等は基本になる語の次に一段下げて併置し、事物の種類、部分名稱等も同様の形式でそれを包括する言葉の下に一括した。例へば「ハヂイ」(風)の下に各風位名稱を、「バタ」(機)の下にその附屬品名稱を列記した等である。

四、語音の表現には表音假名遣法を用ひたが假名であらなし難い音は、左の符號を用ひた。

〔△〕「カ」行「タ」行の文字の右側に此の符號を附したものは、その子音〔カ〕が無氣音なる事を示す。しかして「カ」行「タ」行の音は語間にあつては悉く無氣音化するが、煩を避ける爲それには符號を用ひない事にした。

例へば「アカ」(赤)、「ウトウ」(音)は實際は「アカ」「ウトウ」と發音されるのである。

〔▽〕左の場合に此の符號を用ひる。

「フ」は [m] をあらはし、「フ」即ち [m] と區別する。

「イ」は [i]、「ヒ」は [e] をあらはす。

「ウ」は [u]、「ウイ」は [wi] をあらはす。

〔ガ〕行音 「カ」行の文字の右肩に小圓を附したものは、その子音が〔g〕鼻音なるを示す。

〔タイ〕〔トウ〕 「タイ」は [tɕ] を「トウ」は [m] をあらはす。

しかして「タイ」「トウ」はその子音〔tɕ〕が無氣音なるをあらはし、「タイ」「トウ」は [m] なるをあらはす。

〔ネイ〕 「ネイ」は [nɕ] で荷物等の「ニ」と區別がある。

〔フア〕行音 「フア」「フイ」「フ」「フエ」「フオ」は

尙喜界島語に於ける語頭の「バ」行音は總て右の「フア」行音にも發音されるが、本集では「バ」行音のみに一定した。例へば「バナ」(花)は「フアナ」、「フシ」(星)は「フシ」とも發音されてゐるのである。但し語間にあつては、「バ」行音は鼻音の後にのみあらはれ、

他は悉く「フア」行又は「バ」行の音に發音される。〔・〕語頭の文字の右肩に小黒點を附したものは、その音が促音なる事を示す。即ち「タ」は [tɕ]、「サ」は [sɕ] と發音される等である。

〔 〕 「ト」「ヤ」「イ」「ワ」の文字に此の傍線を附したものは、それらの音が鼻音化するを示す。

五、語意解説中に「古語——」とあるのは日本古語の意で、語意を理解する一助にもならんかと、單なる參考までに附記したものである。同様の意味で、類語と見られる他地方の方言も若干附記した。

六、喜界島語動詞の終止形は二種ある。例へば「押す」打つは普通には「ウシユイ」「ウチュイ」であるが、「ウシユン」「ウチュン」といふ形にも用ひられる。この二形式は用ひ方によつて語感を異にするが、本集では國語の終止形に近い感じの「ウシユイ」「ウチュイ」の形で採録する事にした。

形容詞の終止形は更に多様で、例へば「赤い」は「アサ」「アサイ」「アサル」「アサン」の四様の用法があり、それら異つた調子を帯びて用ひられるが、これも本集では最も普通に行はれる「アサイ」の形を

取る事にした。
尙右「ウシユン」「ウチユン」「アーサン」は、いづれも連
體形と同形なる事は、左の活用例に見る通りである。

動詞形容詞の活用例

喜界島語の動詞形容詞の大體の活用を知る爲に、左に簡
單に例を示す。

〔動詞〕

喜界島語の動詞は終止形の同形のもは、特殊の例を除
いて總て同形式に活用する。これを國語の口語に比較し
て示すと左の通りになる。

く「キユイ」「書く」「行く」は「カキユイ」「イキユイ」で、
國語の「く」語尾は喜界島語では悉く「キユイ」とな
つてゐる。但し「キユイ」は小野津語で、他では「チ
ユイ」に轉ずる。

「キユイ」終止形動詞の活用は左の通りである。

「カ」「キ」「キユイ」「キユン」「キ」「キ」 [小野]
「カ」「チ」「チユイ」「チユン」「キ」「キ」 [一般]
即ち「書かない」は「カカン」、「書き度い」は「カ
キフシヤイ」、「書く」は「カキユイ」、「書く人」は「カ

キユンチユ、「書けば」は「カキバ」、「書け」は「カ
キ」となるのである。

ぐ「ギユイ」「繋ぐ」「死ぬ」は「ナギユイ」「シギユイ」で
「ぐ」「ぬ」は「ギユイ」となる。これも小野津語で、
他では「ニユイ」となる。活用は、

「ガ」「ギ」「ギユイ」「ギユン」「ギ」「ギ」 [小野]
「ガ」「イ」「ニユイ」「ニユン」「ギ」「ギ」 [一般]
す「シユイ」「押す」「合はす」は「ウシユイ」「オーワシユ
イ」で、「す」は「シユイ」となる。活用は、

「サ」「シ」「シユイ」「シユン」「シ」「シ」
つ「チユイ」「打つ」「持つ」は「ウチユイ」「ムチユイ」
で、「つ」は「チユイ」となる。活用は、

「タ」「チ」「チユイ」「チユン」「テイ」「テイ」
ふ「ユイ」「買ふ」「拭ふ」は「ホーユイ」「ノーユイ」で
「ふ」は「ユイ」となる。この「ユイ」は阿傳語では
「ウイ」となつてゐる。活用は、

「ワ」「イ」「ユイ」「ユン」「イ」「イ」 [一般]
「ワ」「イ」「ウイ」「ウン」「イ」「イ」 [阿]
ぶ「ビユイ」「飛ぶ」「伸ぶ」は「トゥビユイ」「ヌビユイ」
で、「ぶ」は「ビユイ」となる。「ビユイ」は小野津語で

嘉鈍語では「ブイ」、阿傳語では「チユイ」となる。活
用は、

「ム」「ビ」「ビユイ」「ビユン」「ビ」「ビ」 [小野]
「ム」「ビ」「ブイ」「ブン」「ビ」「ビ」 [嘉]
「ム」「チ」「チユイ」「チユン」「ビ」「ビ」 [阿]

む「ミユイ」「讀む」「恨む」は「ユミユイ」「ウラムユイ」
で、「む」は「ミユイ」となる。これも小野津語で、嘉
鈍では「ムイ」、阿傳では「ニユイ」となる。活用は、

「マ」「ミ」「ミユイ」「ミユン」「ミ」「ミ」 [小野]
「マ」「ミ」「ムイ」「ムン」「ミ」「ミ」 [嘉]
「マ」「ニ」「ニユイ」「ニユン」「ミ」「ミ」 [阿]

る「ルイ」「見る」「教へる」「起きる」「投げる」「消える」
「植ゑる」は「ミルイ」「ウセルルイ」「ウイールイ」「ナ
ギルイ」「チールイ」「ウイールイ」で、末尾音が「る」に
なつてゐるものは「ルイ」となるのが通例である。此
の「ルイ」は嘉鈍、手久津久等の例で、一般には「ユ
イ」に發音される。活用は、

「ラ」「リ」「ルイ」「ルン」「リ」「リ」 [嘉]
「ラ」「イ」「ユイ」「ユン」「リ」「リ」 [一般]

以上が一般動詞の活用形式で、特殊僅少の例として左の

やうなものがある。

爲る「シユイ」「シラ」「シー」「シユイ」「シユン」「シ
リ」

有る「アイ」「アラ」「アイ」「アイ」「アン」「アリ」「ア
リ」

来る「キユイ」「クラ」「キー」「キユイ」「キユ
ン」「クリ」「ク」 [小野]

シユイ「クラ」「シー」「シユイ」「シユン」「ク
リ」「ク」 [早]

スーイ「クラ」「シー」「スーイ」「スーン」「クリ」「ク
リ」 [阿]

〔形容詞〕

天氣良くは行かん テインキ ユタサラバ イコ
天氣悪くとも行かん テインキ ヤサタイム イコ
この花は白くない フンバナー シルサ ネーラン

早く歩け フェーサ アッキ

フェーク アッキ

フアヨー アッキ (特殊)

大きくなる ウビーサ ナユイ

喜界島方言集

ウビク ナユイ

この花は赤い

フン バナー アーサ

フン バナー アーサイ

フン バナー アーサル

フン バナー アーサン

家の中は暖い

ヤーンナーヤ ヌクサ

ヤーンナーヤ ヌクサイ

ヤーンナーヤ ヌクサル

ヤーンナーヤ ヌクサン

高山

ターサン ヤマ

ターカ ヤマ

廣い海

ビルサン ウミ

ビルカ ウミ

重い石

ウブツサン イシ

ウブツカ イシ

ウツサカ イシ

なつかしい歌

ナツカサン ウタ

ナツカシカ ウタ

ナツカシー ウタ

近ければ行きませう
チカサリバ イチエーロ

遠ければ止めませう
トウーサリバ ヤミエーロ

安ければ賣れる
ヤツサリバ ウリユイ

高ければ賣れない
ターサリバ ウリラン

〔ア〕

ア、アカ 赤、朱、紅。老人は茶、褐、黄色等にもいふ事がある。アカは、中年以下の者に多く用ひられる。

アカー 右の如き色彩の物。

アー・イルー 赤色。



マツカ 眞赤。

アー・ベールトウ 赤ら／＼と

ほんのりと赤味を帯びた形容。

アイ、アイガイ(小野)

明るみ 明るい場所。又はあかり 燈火等。

アイイ いや

否、自己と同等以下の者に對する軽い否定。アラン参照。

アー・ガー、アーワー(阿)

赤子 生れて間もない子。

アト・ボー 男の赤子。

家に依つては五六歳になる迄此の語で男兒を呼ぶ事がある。又女兒ばかり生れる家で、未女を斯く呼ぶことがあり、さうすると其次に男の子が生れるといふ信仰がある。但し近

頃あまり聞かない。ボー参照。

アー・マイー(小野) 女の赤子。マイー参照。

アー・ガヤー 赤萱。カル及びトゥマに同じ。

アーケー 明るいうち 暮れぬ間に 早々。

アーケー シャー ミシヨーンニャ ウモーリ 明るいうちに、茶(を)、召し上りに、お出で下さる。

晚餐に人を迎へる言葉である。

アーサー 海苔の類。干潮線附近の岩に生ずる浅緑色の苔。食用とされる。あをさの訛であらう。

アーサイ 赤い。朱、紅にもいふ。

アームイ(嘉)、アーミユイ(小野)、アーニユイ(阿) 赤らむ。稲麥の穂等の熟して黄ばむにもいふ。

アーシ 昔松の木を細かく刻んで照明に用いたもの。

アーダヤ 海水に棲む小蝦。魚の餌にする。

アーチョワ(阿) 小鳥の雛。

アーティダ 夕陽。赤陽の義。アヤティダに同じ。

アトウチ、アツキ(小野) 曉。

アトウチ・ハター 曉方。

アトウト 巫女。ユタに同じ。

アードウヤ、アードア(阿) 薊——あざみ。古くは其若葉を食用にした。

アーデー・ファー 亂れ歯。あぜ歯の義。

アーニー、アーイー(阿) 蟻。イは鼻音化する。

アーバユイ、アーバウイ(阿) 廣く大きく開く。パユイにアーを接頭して大きくの意を添へたものである。パユイ参照。

クチ アーバリ 口(を)、開け——大きく。

アーブ(兒) 薯。パンシユー参照。

アーベ(兒)、アベ(兒) 飯。ウバニの幼児語である。

アー・マフィンマ、アー・マシマ(阿) 眞晝間——白晝。例「アーマフィンマから酒を飲むのは體裁の

悪い事だ」。ピンマー参照。

アーミ 魚名。目が大きく、鱗細かく、色は赤く鯛に似てゐる。夜釣る。赤目の義か。

アーヤマ 麥の熟する頃の一週間程の氣候をいふ。此の氣候の特徴は、降ると見えて降らず又はつきり晴れることもなく、山にさ霧が掛つて鬱陶しい。此頃山々の蕨が赤い芽を出すので、赤山といふと。

尙田植とアーヤマが合ふと田の水が不足して困る事が多い。

アーユイ、アーウイ(阿)、アーガユイ 明る——光線がはつきりする。例「電燈は晝の様にアーユン(連用)ちゆう事だ」。

アーラシユイ、アーガラシユイ その他動詞。明るくする——火などを向けて。

アーユイ、アーウイ(阿) 闘ふ。人間同志の闘争には云はない。古語あふ。

ウシ・アーシ 闘牛。

アーヤー・トウイ 軍鶏。

アーラフティラ 燦然として——、輝くばかり美しい形容。

アーラフティラ カマイヌ シュラサ ミブリ ドウ ナユル 燦然として、よそほひ、の、美しき、

恍惚とこそ、なる。

アーリユイ 別れる、多く離婚するにいふ。

アイ、アリ(上蓋) 有る——存在の意のみを表はす。然々である(文語のなり)のあるとは別である。敬語
アエーの條参照。

イシヌ、アイ 石、が、在る。

アイ、アイヤ 感動詞。おやといつた程の軽い驚きに發する語。アギ参照。

アイガテ 有難き——、形容詞連體形。

アイガテ 有難き——、形容詞連體形。有難う御座います。有難い、ことですの義。最敬の謝辭。ウフクイ参照。

アイク、アイキン 拳——けん。石、鉄、紙の三形に擬へて行ふ。

アイサトウ、エーサトウ 挨拶。

アイダ、エーダ 間。マドウ参照。

アイトウム、アイケーナ 全部——總て。アルシカに同じ。

アカ 舟中に溜つてゐる水や海水。

アカ、アイト 感動詞。あ痛。アカヨ、アイトヨとすれば意が強くなる。

アカー(見) 痛々——お出来又は病氣等。アカといふ感動詞の名詞化せるもの。例「これはアカーだから
觸るなよ(危険な物を警告する語)。

アカガネイ 銅。

アガユイ、アガウイ(阿) 上がる。仕事が仕舞ふ。又物が古くなり用に耐へなくなる。アギユイ参照。

アガイ・ユエー、アイー・ユエー 農事の仕舞祝。

アガリ、アガレ 東。太陽の上る方の義。轉じて地名となつた處がある。

アギ、アキ 感動詞。驚いたとき又は感心したときに發する語で、アイよりはいくらか強くハギよりは
弱い。アラ参照。

アギ 着物の上げ。タテイに同じ。

アキチャミヨ(老) 感動詞。アギとよく似てゐるが、古老の外は用ひなくなつてゐる。

アキユイ、エーユイ 開ける。

フタ アキユイ 蓋(を)、開ける。

ユイ ヌ アキユイ 夜、が、明ける。

アギユイ 上げる、高くする。物を高所へ上げる、手を舉げる等。

アギ・サギ 上げ下げ。

アクミ 蜜柑などの皮と袋の中間にある白い筋。

アサ・カギ 朝太陽の熱の弱い時分。朝蔭の義。例、「夏の遠方歩きは、アサカギに出立して、日が傾いて
から歸るやうにするが良い」。

アサダ 浅田。カタに對す。

アサッカマ 早朝——朝つばらといふに似てゐる。カンマ参照。

アサツチャイ 朝太陽の上る頃に、空が變態に晴れ渡つて明るいのにいふ。こんな日は後雨になるといはれる。朝光りの義。

アササー 蟬。ナチャーに同じ。

ピンマー・アササー ピンマー即ち午後二三時頃に鳴く蟬の音。

ヨーネー・アササー 夕方に鳴く蟬の音。これ等の鳴聲で大體の時刻を知る。

アササイ 浅い。又貞操觀念の薄いのにもいふ。

アサテイ 明後日。

アサファナー 物に厭きつばいこと、又はその性分の人。例「仕事をアサファナーしてはいけない」、「彼は

アサファナーだ」等。

アサマシー、アサマシカ、アサマシサン あさましき——心や行の醜き。

アサマシカ ニギン ヤー 浅ましき、人、よ。——何と浅ましい人だらう。

アサユイ、アサウイ(阿) 物をかき探す。單に探すことはサガシユイ又はトウメーユイといふが、アサユイは狭い範囲をかき廻して探すといふ様な場合に用ひる。例へば棚の中をかき探す等。古語あさる。

アサヤーシユイ 同じくかき廻して探すの意であるが、語尾のヤーシユイは荒々しく又は盛んにといふ

意を添へる。

アサイ 物をかき探すこと。多く棚などの食物探しにいふ。

アサウ 麻絲。麻苧の義か。ウーに同じ。

アシ 汗。

アシ ファユイ 汗(を)、かく。パユイ参照。

アシ 網の下部に付ける錘——いわ。

アシ、アッシ、アセン(上蓋) 容態を表はす指示代名詞。あのやうに又はそのやうに。例、「お前はアシ(その様に)考へるか」。ハシ及びその條参照。

アッサ、アッサン あのやうな——あんな。

アシカラ、アシカネー(阿) さうしてから——それから。

アシム 斯くも。ハシムともいふ。例「アシム美しい模様は見た事がない」。

アシー 晝食——午後二時から三時頃の間。

アシフ あせも。

アスピ 歌舞をして遊興すること。新築、婚禮、出産等の祝には必ずアスピが伴ふ。

アスブイ(嘉)、アッピーユイ(小野)、アッスイ(阿) 遊ぶ又は歌舞遊宴する。

アスバン ナ(兒)、アッパン ナ(阿・兒) 遊びませう。小供が友達を誘ふ時にいふ語。

アセー ねえさん又はおかみさん。この語は大島語の姉さんが輸入されたもので、大島の女に對してのみ用ひてゐる。

アセー 朝焼。

アセー シユイ 朝焼けする。近くに雨の降る兆とされる。

アタ 接頭語。俄か——急等の意を表はす。アターダ・ニ参照。

アタ・フイー 俄か降り。鹿兒島語ではアタダアメは俄雨。

アタ・アッチー 急ぎ歩き——急ぎ足。急に歩き出す事にもいふ。

アダ 痣——ほくろ。

アターダ・ニ 俄かに——急に。例「アターダニ雨に降られて閉口した」、「アターダには思ひ出せない」。

アタイ、アタリ(上蓋) 屋敷——宅地、又は屋敷内にある菜園。

アタイ・ギ 屋敷の周圍に植ゑてある防風樹。

アタイ、アタリ(上蓋) 分け前——配當された物。例「此の子は自分のアタイは食つてから、人のアタイ

迄欲しさうにしてゐる」。アタユイ参照。

アタイフシ 例へば大勢に物を手當り次第に分配して平等を缺く場合に「アタイフシだから仕方がない」

等と言ひ、又狙ひを定めず雀の群に石を投げて、「アタイフシ投げたら當つた」等と用ひる。

アタツサワイ 當り障り。悪靈の障りなどにもいふ。例「他人にアタツサワイのない様に話を決める」。

アダナシ 阿互の氣根。これを裂いて繩を作る。此の繩は強く保ちがよい。

アダネイ 阿互——たこの木。

アタユイ、アタウイ(阿) 分配に與る。代償を拂ふ場合でも特に分けて貰ふやうな時には斯くいふ。

アテイユイ その他動詞。分配する。呉れる。其外、家具を調度する——箆笥を調へる等、又嫁を貰ふ

を「ユミ アテイユイ」といふ事がある。

アタユイ、アタウイ(阿) 當る。突當る。命中する。觸れる。又心に當る——恥づべき事などをした場合。

ドウアタイ 何か缺點を持つ者が、人の話などを聞いて自分の事を言つてゐるものと誤解し、いやな顔

をする事。自らあたるの義。

アテイユイ 當てる。命中させる。

アダユイ、アザユイ(小野) ねぢける、食違ふ。又つむじを曲げる——すねる。すねる事にはアダクユイ

とも言ふ。

アダクイ・ムン、アザクイ・ムン(小野) つむじ曲り——ひねくれ者。

アデイユイ 捻ね合はせる。又は木などを×形に組む。

アタラサイ 惜しい。又は大切である。

アタラサ シュイ 大事に、する。又惜しむ——惜しがる。

アタラシカ、アタラシー、アタラサン 惜しき——大事な。

アタル(阿) 昔話の冒頭などに用ひられる語で、一般には用ひない。

ムカシ アタル クトウ ヌ 昔、あつた、事には。昔あつたさうなに相當する。

アヂ 味。食物の味、物の趣き。

アヂ シュイ 食物の味はつて見る。味するの義。

アヂ ネーラン ユミタ 味のない言葉、面白くもない話。

アヂー 祖父。又は老爺。

アチサイ、アツチャイ 厚い。又肉附の豊かなるにもいふ。

アチ・ブツデー 肥満せる人にいふ。ブツデー参照。

アチネー 買物。又は物々交換。アチネーサーは買物をする人。

マ・アチネー 馬の交換。馬の交換にはバクともいふ。

アチャ 明日。

アチャツ・カマー 明朝。

アチャン・ヨーネー 明夕。

アチャン・ユルー 明晩。

アチャサテイ 明日か明後日——近々のうちといふ程の意。

アチャー 父。又家庭に依つては若い祖父をかく呼ぶことがある。

アチャーイー 安坐——あぐら。

アヂンカー 祖父母の兄弟。又老爺と言ふやうな場合にも斯く言ふ。カーは指小辭。

アテイ 目宛——豫定。

アテイ ウツカシユイ 目宛(を)、狂はず。——當がはづれるといふ場合。ウツカシユイ参照。

アテイ ネーン 知らない——見當がつかない——解らない。

アデイ、アヂ(小野) 機にかけてある縦糸の、上下二組が交叉してゐる處。

アデイ フブリユイ 右の交叉が亂れる事。又話の辻褄の合はぬ事にも斯く言ふ。フブリユイはこぼれ

る。

アデイ、アヂ(小野) 田畑山林等の境界。

アテイナサー 子供——一人前に物を知らない者としての。又足りない者、無常識な者にも言ふ事がある。

アデイバヌー 昔の女の手甲のパドッチ(入墨)の模様。七歳乃至九歳頃から十三歳乃至十五歳頃に彫るも

ので、文様が美しいのでアヤフアドッチとも言つたといふ。ティンチャンカー参照。

アデイマー 顎の付け根。カンガネーに同じ。

アツカユイ、アツカウイ(阿) 取扱ふ。又は拵へをなす——魚や鳥獸などを料理する場合。

トゥイアツケー、トゥアスケー 取扱ひ。

イニ アツカユイ 稲を扱く。

トゥイ アツカユイ 鶏を殺して料理をする爲の大體の拵へをなす。

アツカユイ、アツカウイ(阿) 預る。又鶏が巢に籠つて、卵を暖めようと狂奔する時の状態にもいふ。ス

ズミ参照。

アツカヤー 右の状態にある鶏。アツカヤー・ドゥイーともいふ。

アッキー 三度の食事としての主食物。島では甘藷が主食物で、甘藷を掘りに行く事をアッキー掘りに行

くと言ひ、又赤ん坊に取つては母乳がアッキーと言はれる。

アッキー・カマシユイ 赤ん坊に湯を使はせる。カマシユイは食はせる。

アッサ、アッシヤー(小野) 下駄。足駄の義。

アッセー 程度を過ぎて厭な氣持になること。又懲々する事。

アッセル シルッカ カダ 厭になる程、食つた。

ニャー アッセル ドー もう、懲々、だ。

アッタ 芥。グミに同じ。

アッタ・シッタ 塵芥。

アッタラ あたら。

アッタラ クトウヌ ニドウチ アンニャ そんな良い事が、二度と、あるものか。

アッタラ カラダ ヌクリー クトウ アタ あたら身體、惜しい事、であつた。——若くして死んだ

者などを悼んで。

アッチユイ 歩く。

アッチェー(兒) 歩行——あんよ。

アットウー 残し物の意を表す接尾語。

カイ・アットウー 使ひ古し。

カニ・アットウー 食ひ残し。

アッテー 股——もも。ムム参照。

アッテー・ブネイ 大腿骨。

アトウ 後方。又は後刻。マイ参照。

アトウ・カラ、アトーラ 後から——暫くしてから。マイカラとすれば後方からの意になる。

アドウ 踵。

アトウサイ、アツチャイ(小野) 暑い。プーミチュイ参照。

アドウツチャー あしなか——草履の一種。踵の切れたるものゝ義。アドウツチャー・サバーともいふ。

アトウドウイ 後下方——立つてゐる人から言へばその踵の邊。

アドウナー のろま。罵詈雑言。アドウスイとも言ふ。

アドウナサイ のろい、のろみである——じれつたい程に。

アドウナサー アンガ シグトー シュラサル のろくは、あるが、仕事は、綺麗である。

アドウナ・アドウナ のろく——まごく。

アトウマイ 集會——村の協議。ヂンミ参照。

アトウマユイ、アトウマウイ(阿) 集る。

アトウミユイ その他動詞。集める。

アトウミ 釣り上げた魚を差し集める紐。集めの義か。

アドウム 杵。

テイ・アドウム 棒の形をして中括りの中部を握つて搗く杵。

ヤマトウ・アドウム 丁字形の杵。大和杵の義。

アドウン・ドウエー 二人搗き。杵取合の義か。

アトウ・ユエー 祝宴に招待されなかつた者——遠い親族や交友等、が本祝の終つた後にその家へ祝ひに行く其の祝ひ。後祝ひの義。

アドウユイ もとの元氣、健康が衰へる。例へば病氣をしてもとの快活さを失ふ、又は馬が老齡になつて働きがのちくなる等に言ふ。

アナ 穴。普通掘つた穴に言ひ、自然の穴にはガマといふ事が多い。ガマ、ミー参照。

アニ・ヨ(小野) さうだとも——強い肯定。

アネイ 祖母。又は女の老人——老婆。

アネインカー 祖父母の姉妹。又は年老いたる婆さん。カーは指小辭。

アヌユ あの世——後生。グシュ参照。

アバカン 溢れるばかり澤山——といふ様な意をあらはす。例「家の中にアバカン程の客」、「原には百合の花はアバカン」。

アフアティ・トゥチユイ あわてふためく。あわてつこの義か。

ワンニ ウドウッカサツテイ アフアティ・トゥチ ニギーカタ 私に、驚かされて、あわてふためいて、逃げをつた。

アバラ 脇腹——胸の兩脇の邊。

アバラ・ブネイ 肋骨。

アビユイ 叫ぶ。又は呼ぶ——誘ふ。

アビヤーシユイ 大聲で叫ぶ。又は叫び合ふ。

アビクダシユイ 耳を聳せんばかりに叫ぶ。叫び崩すの義。

アビラサバ クー ヨー 呼ばせるから(遣ひをよこさば)、來い、よ。

アピンナ だまれ——文句を言ふな。

アブ 大なる立穴。轉じて大酒呑。

アブシ 畦——田畑の縁。

アブシ・マクラ 稲が豊作で、穂が重く垂れて畦を枕にしてゐると形容した言葉。例「今年の稲はアブシ枕ぢや」。

アマ あちら——彼處。ウマ、フマ、チャー参照。

アマクマ あちらこちら。

アマファイ・フマファイ あつち行つたり、こつち行つたり。——方々歩き廻るに言ふ。

アマグイ 雨乞。

アマサイ 水つぼい——鹽氣の尠いの言ふ。又酒のアルコール分の弱いにも言ふ。砂糖の味などにはヌルサイといふ。

アママー やどかり——寄居蟲。又は足の蹠。

アギ・アママー 陸に棲むやどかり。

アマミー 油蟲。鹿兒島アマメ。

アマムン 飲水。漁夫が海上でいふ忌言葉で、甘物の義。

アマユイ、アマウイ(阿) 餘る——残る。ヌクユイに同じ。

アマイ 残り物。

アマユイ、アマウイ(阿) 暴れる。

アマヤルシユイ 暴れ廻る。ヤルシユイには盛んに荒々しく等の意がある。

アミ 雨。ナミ参照。

アミ・ティンチ、アミフイ 雨天——雨降。

アミ・ムヨ 雨模様。

アミンカー 小雨。

ナマ・アミンカー 微雨。

アミンカー ハダ シユイ 細雨が微かに降る。小雨の臭ひがするの義。

アミガサ 月の周囲に現れる圓い虹で、近く雨の降る兆とされる。ティダガサ参照。

アミダ 百足蟲に似て夜光るみゝずの如き蟲。

アミユイ 浴びる。

アミシユイ 浴びせる。

アムイ(煮)、アミユイ(小野)、アニユイ(阿) 編む。クムイ参照。

アヤ 紋様——織物の模様など。又は陶器などのひび——罅。

アヤ・マダラー まだら。

アヤイチュイ 陶器などに罅がいく。

アヤ(兒) 舞踊。

アヤ 踊りを踊れ。マチュイ参照。

アヤティダ 夕陽。綾陽の義。アティダに同じ。古歌に「荒木手久津やあやてだぬ照ゆり、吾島果報

島や眞てだ照ゆり」とある。荒木、手久津久は西向の部落で、歌者は東向の部落の者なりし事が知られる。眞てだは朝日をいふものであらう。

アイ(阿)、アギ(小野) 陸地——海に對していふ語。阿傳語のイは鼻音に發音する。

アイ(阿)、アギ(小野) 鰓。あぎの義。阿傳語のイは鼻音。

アイナムン(阿)、アニヤナムン、アンニヤランナムン(花) あんな奴、第三者を卑しめて言ふ語。

アイナムン トウ アイテイ シルナ あんな奴、と、相手(を)、するな——相手になるな。

アエー、アレー(上蓋) 御座います。存在の意をあらはすアイの敬語。デー参照。

アヤビー(老女) 右に同じ。

アエーラン ございませぬ。存在せず、又は然らずの敬語。ネーン及びアラン参照。

アヤビラン(老女) 右に同じ。

アラ(小野) 感動詞。あら——おや。ハギ参照。

アラ 接頭語。初——あら。アラホース、アラハー参照。

アラ―(花) 何の障害もなくあらはなる場所。マト―に同じ。

アラク ひどく―非常に―あまりに。

アラク プテイラッテイ ひどく、叱られて―。

アラク ナグルサニ あまりの悲しさに―。

アラサイ 荒い。粗い。粒などが大きい。

アラシユイ 荒す。

アリユイ 荒れる。

アラ・ハー 元日の朝まだ一度も汲まない井戸。例「アラハーで若水を汲む」。

アラファンミ 最初―一番はじめ。

アラ・ペー 梅雨の上つた頃吹く強い南風。

アラ・ホース 新盆、前年の盆以後に死んだ人を初めて迎へる盆。

アラマタ・サリユイ 足指の裏の關節の肉が輝裂するに言ふ。サリユイは腐る。

アラムサー 悪霊や亡者を見る素質を有つてゐる人。子供の時に多いといふ。

アラムサイ 手荒い―物の取扱ひや動作が荒つ、ぼい。又身體が頑強にして偉大なるものにもいふ。

アラン、アラ― 不然―さうでない。アエーラン参照。

アラドゥ 不然―強い否定。

アリ あれ―あの物。彼。

アレト ヌーヨ あれは、何だ。

アレー タルヨ 彼は、誰だ。

アリクリ 種々―色々。

アリヌミ 荒海。

アルシカ ある丈―全部。

アワ 粟。

アワ・バニ、アワ・バイ 粟の飯。阿傳語のイは鼻音。

アワン・クファー 粟の殻。

アワ・フチャギ 粟と米とを混じた粥。

ムチアワ 糯粟。

アワシ 稔。

アワムイ 泡盛。焼酎の一種で、醸造の際最初に出る泡立の良い酒にいふ。泡立のよいこと従つて酒の質

の良いことを「アワムユイ」―泡を盛るといふ。デングラ及びウトウデー参照。

アワリ あはれ―悲しみ―歎き。

アワリ・シ ウイ 歎いてゐる、悲歎にくれてゐる。あはれしてゐるの義。

アワリ・ナチ 哀泣―悲しげに泣くこと。又悲しいことがあつて泣くこと。

アワリサヨ、アワリサ ヤー 何と憐れなことよ。

アワリナ、アワリカ、アワラシー　　かはいさうな——憐れな。普通ムイナ又はチムチエーカの二語を用ひる。チムチエーカ参照。

アラ(阿)、アヨ、アリオ(上嘉)　　海中に沈めて魚を捕へる籠——笈。

アン、アヌ(歌言)、アンネイ(阿)　　あの。アンは他語と複合して指示形容詞を作ること多く、稀に斯くの

意に用ひられることもある。シャの條参照。

アントウサン、アトウヌ　　あんなに遠き。

アンチカサン、アツチャケヌ　　あんなに近き。斯くも近き。

アンターサン　　あんなに高き。

アンナガサン、アナガヌ(小野)　　あんなに長き——物の長さ。

アナデー(小野)、アネナー(阿)　　あんなに永く——時の長さ。

アフィダン、アツプエヌ(小野)　　あんなに大きな。そんなに大きな。

アンイナサン、アンチヌマヌ(小野)　　あんなに小さな。そんなに小さな。

アンシユラサン　　あんなに美しき。斯くも美しき。

アンサ　　あれ丈。アンサンとすれば、あんなに澤山となる。

アンナツカ　　あんなにまで、又はそんなにまで。

アンサリー　　昔の祝女の高位の者の尊稱。

アンダ　　畦際——田畑の縁の邊。

アンダ・チンダ　　畦々といふに似てゐる。

ターナンダ　　田の畦のほとり。

アンダ　　シユイ　　田畑の畦をかく。シユイはする。

アンダ・フナヤ　　鶴鴿。

アンドゥン、アンディル(上嘉)　　行燈。

アンニユイ(阿)　　攀ぢる。

アンバ、アツバ(伊)、アブラ　　油。

アンバイ、アツバニ(伊)　　揚げ物——油で揚げたもの。

アンビクンビ　　物の溢れる程一杯になつてゐる形容。あふれこぼれの義。例「幾日も降り續いて、田の水

はアンビクンビぢや」。

アンブイ(嘉)、アンビユイ(小野)　　アンヂユイ(阿)　　炙る。

アンベ　　味——アヂに同じ。具合——鹽梅。

アンベ　　シユイ　　味をみる——どんな味か味はつてみる。「アヂ　シユイ」に同じ。

アンベ　　ワルー　　病氣を圓滑に言ふ語。例「お爺さんはアンベ　ワルーと聞きましたが、その後如

何です」。

アンマー　　母。家に依つては若い母をイナンマーと呼び、祖母をアンマーと呼ぶ。

アンマー・ワイ　　異母兄弟姉妹——腹違ひ。母別れの義。

アンマサイ だるい。又は、むづかしい——ムッカサイに同じ。厭き倦ましの義。

ハゲ アンマサ ああ、疲れた。——やれく。

アンマシカ シグトウ チャ 困難な、仕事、だ。又はつらい仕事だ。

アンマサ・シユイ 病勢が非常に悪くなつた時婉曲に「何某はアンマサしてゐる」などといふ。

[イ]

イ、イー、イシ(老女) 珍らしいとか美しいといふやうな場合に發する感動詞。

イー 胃袋、又は膽汁。

イー ファチュイ 船酔などで苦汁を吐瀉する。

イーケー 言ひ合ひ、口論。ユデーに同じ。

イー 家柄、又は位高き家。

イー ダーサッカ ユカ ターサ(謔) 家格高きより、床高き。地位名譽より財産の意。

イーヌー、イールー 龍卷、古くはこれを一の動物と考へてゐた。今でも海水が巻き上げられることをイ

ーヌーが水を引くと言つてゐる。

イーファー 小兒の遊戯の一種。長さ五寸程の小さい木の一端を斜めに切つたものを地に伏せ、他の長さ

一尺程のブニと する棒でその切口を叩き、撥ねた距離を計つて勝負を決する。

イーファン・クチー 右の語から轉じて、木をはすに切つたその切口をいふ。

イーヤファティラ 言ふや否や——言ひも果てぬうちへの意。

ニヤマドウ ダー サタッサン ムンヂャー イーヤファティラ ヤラチ チャソーヨ ほんの今(今ぞ)、

お前の、沙汰(を)、したものだ、言ひも終らぬうちに、やつて、來た事だよ。

イーラ、イラ 海上を浮游するくらげの一種。楕圓形の氣囊を有し、紫色の絲様のものがあつて人を刺す。

イカ、イキヤ(小野) 烏賊。

イカナ いかに——いかなる。

イカナ、クトウ、アティム どんな、こと(が)、あつても。——たとひどんな事があらうと。

イキ 行け。イチュイ参照。

イチ・ファライ 行けの罵詈語。クラムイの條参照。

イキヨ、イキヤ、イキヤ(阿) 左様なら。同輩間の別れるときの挨拶。行けよの義。ウモーユイの

條参照。

イギリス 昔島へ漂着したといふ紅毛人。

イク 接頭辭。幾——。シャの條参照。

イク・フイ 幾度。イクムドゥン即ち幾戻しともいふ。

イク・タイ 幾人——いくたり。

イクトウ、イクツ(小野)

いくつ——物の数及び年齢などの。年齢を算へる歳に相當する接尾語はないので幾歳といふ場合にもこの語を用ひる。

イサ、イシヤ、イサドゥン 醫者。イサドゥンは醫者殿の義。

イサーサイ、イソーサイ 尠い。

イサーサーネーン、イチラサーネーン 尠くは、ない。——非常に多いの意。

イサートウ 螻蛄。

イサーラー(小野) 高慢な者。

イサーラ・フー 高慢な風。——コーデーに似てゐる。

イサニユイ 魚が勢込んで盛んに餌を喰ふ事。勇むの義。

イシ 石。

イシンカー、イッスッカー、イッスッカマー(阿) 小石。

ウルイシ 海中に生える樹枝状の石。

カドゥ 燧石。

ガルシ、ガルサー 輕石。

クチャイシ 白土が硬くなつて出来た石、クチャ参照。

シラフェーイシ 石灰石。

ハブイシ 白色の硬い石、但し風化すると灰黒色となる。此島を包圍してゐる珊瑚礁は凡てハブ石とい

はれる。

メーシ 黒色にして滑らかな極めて硬い石。

ムトウイシ 地の底まで達してゐるといはれる石——抜きとれない石。

イシディ 踏み石。

イシプミ 蛇骨を踏むと、足の裏に出来るといふ悪性の腫物。

イス、イシュ 魚介を漁ること——いさり。

イス・サー、イユ・トゥヤー 漁をする人。

プナス 船漁。プナイスの約。

カチ・イス 陸から釣る漁。プナスに對しいふ。徒漁の義。

トウングイ・イス 水中眼鏡をかけ泳ぎながら釣る漁。トウングイ参照。

ポー・イス 沖合へ漕ぎ出して釣ること。ポー参照。

イスガサイ、イチユナサイ 忙しい。

イタ 板。

イタンビヤ、イタンチャ(阿) 板片。

イターシー 越中ふんどし。サナギに同じ。

イダ、イザイ(小野) 夜漁、炬火を用ひて魚介を漁ること。

イダユイ 夜漁する。古語いさる。

イタヌキ 板付船——板張の漁船。

イタダチユイ 戴く——頂戴する。

イタダチエーラ 頂戴いたします。ムラエーラともいふ。

イタムイ(嘉)、イタミユイ(小野)、イタニユイ(阿) 物が損傷する。又は食物が腐敗する。

イタラムン 腥い食物、生魚や動物の肉など。ショーチン・ヂューイに對す。

イタリユイ 遊びほうける——遊蕩する意味での。

イタリ・ムン 遊蕩兒。女にも言ふ事がある。

イチ、イキ(小野) 息。

イチ ウチツチユイ 氣絶する。息をうち切るの義。

イチツチャサイ 息苦し。

イチ、イキ(小野) 勇氣——膽力。意氣の義。チローの條参照。

イチ・ナサー 臆病者。意氣なしの義。チローナサーともいふ。

イチー(兒) 汚いもの。イチューと同語根か。

イチウシ 生き失せ——神かくし。又人が何處へ行つたのか探しても分らない場合にもいふ。轉じて物品

がなくなつたときにもいふ。

イチガトウ、イチグワツ(小野) 一月の月。ショイガトウと同じ。

イチツチエーユイ 行き違ふ——互に知らずに行き過ぎる。

イチデー、イトウム、イツー いつも——毎日。

イチデー・マンデー 毎日々々。又はいつも〜。

イチミ 生き姿。生目の義か。

ウヤ ヌ イチミ ミラン 親、の、生き姿(を)、見ない。——親の死目に會はないの意。

イチムン、イチムシ 生き物——凡ゆる動物。イチムシは其の鄙語。

イチヤサイ 熱い。

イチヤサ ワッシテイ ユタ ワッシユイ(諺) 熱さ、忘れて、巫女、忘れる。——喉元過ぐれば熱さを

忘れるの意に同じ。

イチヤユイ、イチヤウイ(阿)、イキヤユイ(小野) 出合ふ。口約する。婚約する。

ムドゥラシー ヤタル ニム イチャランテイ 戻りしな、には、誰、にも、行逢はなかつた。

チュサチ イチャテイ ウカンバ アタラン ドー 人先に、口約して、置かねば、手に入らん、よ。

イチヤン・トウチ 先月。行つた月の義。

イチユー 木材の名。赤味を帯びて質が硬く、家屋の材に適すといふ。その皮は削つて海岸の水溜に入れ、

小魚を毒死させて捕へるに用ひたといふ。此の島には産しない。

イチユー(兒) 大便。

イチユーゴー おしめ。便布の義。マイコーに同じ。

イチユイ 出る。

イチャシユイ 出す。

イチユイ、イキユイ(小野)、イキユリ(歌言)

行く。パユイともいふ。敬語ウモユイ参照。

イデ クー 行つて来い。

イチ・ムドウイ 行戻り——往復。

イチユイ、イチユイ(阿) 魚を突く小さいやす、トウニヤの小なるもの。トウニヤ参照。

イチユイ 勢——元氣。

イチユイ・ダーサ、イチユイツチュサ 勢が高い、勢が強い。——いづれも同意。

イチユチャー(阿)、イチユビヤ(小野) 苺。大體二種あるが、實の大きいものにはヤマトウ・イチユビヤ即

ち大和苺といふ。

イッキユイ 言ひつける——言ひ聞かせる。教訓する。

イッシトウ 決して——どんなことがあつても。一切の義。例「これからはイッシトウそんな事は致しま

せん」。

イッシュー 一升。ワシ参照。

イッシューチ、イチネインチ 一週忌。

イッシューナチ 聲を限りに泣くこと。云ひ傳へに、昔葬式の時死者を慰めるために、泣女を雇ひ報酬

として糶一升を與へて泣かせたので、その名があるといふ。

イツソー 舊曆八九月の頃に行はれる氏神祭の踊り、一種の群舞で老幼男女廣場に集り圓陣を作つて踊る。

その間婦女子は布で面部を覆ふ慣ひである。パチガトウ・ウドウイともいふ。

イツチ、イツキ(小野) 鱗。又は雲脂。

イツチャ、イツキヤ(小野) 屋根の頂上の一段高くなつた部分で、薄のすだれを被せてある。いらかの義。

イツチャ マチュイ 屋根の頂上にすだれを被せて細で締めるにいふ。マチュイは巻く。

イツチャサイ 短い——物の長さにのみいふ。

イツチャ・ナガサー、イツチャサ・ナガサー 短長不揃。

イツチャーユイ 届く、及ぶ。——縄や手などの。

サンガーター シム イツチャーラン 爪先立、しても、届かない(手が)。

イツチュ 副詞。一番。イチバンとも云ふ。鹿兒島イツチ。

タンガ イツチュ ターサイ ヨ 誰が、一番、高い、か。

イツチュイ 言ひ當てる。

イツチ ミリ 言ひ當てゝ見よ——當てゝ御覽。

イツチヨ 片眼。ミツチヨに同じ。

イツトウガヨ 小兒の遊戯の一種。おはじき。

イツトウミ 織物の模様の名稱。大なる格子型で、昔はよく此の模様の風呂敷を用ひたといふ。

イツパイ 澤山又は非常に。例「蜜柑がイツパイ生つた」、「イツパイ面白かつた」。

イッピーユイ 甘える——甘つたれる。多く小兒にいふ。インビユイともいふ。

イッピー 甘つたれ小僧。インビーともいふ。

イッペー あちらこちら——到る處。イッペークッペーともいふ。

イトウ、イチュー 糸。古い人は絹糸をイトウといひ、普通の糸をイチューと云つて區別した。

タテイ・イトウ、タテイ 縦糸。

ユク・イトウ、ヌチ、ユク 横糸。古語ぬき。

糸をかぞへる語(機織の場合)

カタシ 糸一筋。

チュ・ムトウ その二倍即ち二筋。一本の義。

チュ・テイ その二倍即ち四筋。

チュ・ケー(阿)、チュ・タリ 一組、最も小さい一括。

チュ・ゴ 一の五つ。一かせ。

イトウ 仕事歌。多人数が作業のリズムに合はせて歌ふもの。

ブナ・イトウ 古く船人の歌ひしもので、甲の組が「ハイヨーホーヘーハイヤー」と唱へると、乙の

組は「ハーレーコーハーレイヤー」と交互に美しい調子で歌つたといふ。

イトウ、イツ(小野) いつ——何日——何時。

イトウク いとこ——従兄弟姉妹。

イトウツサー(老) 糸で造つた飾の房。糸房の義。

イナ 接頭辭。小さいといふ意を表はす。別にカーといふ接尾語があつて同じ意を表はしてゐるが、慣用

上區別がある。

イナ・ヤー 小さい家。これをヤーン・カーとすれば小屋といつた程の相違がある。

イナサイ 小さい。幼い。グマサイ参照。

イナサイ ニ 子供の頃に——幼少の頃。

イナサイン・ヌ・フアナジ 幼年時代の話。

イナサ・ウビサ 小も大も、又は幼きも老いたるも——子供も大人も。

イナツキー 次兄。ヤッキンカーに同じ。但し家庭によつて慣用があり、兩者の孰れか一つを用ひる。

イナマンカー(阿) 次姉。イナンマーにカーといふ指小辭を附した。バーの條バンカー参照。

イナムイ(嘉)、イナミュイ(小野)、イナニユイ(阿) 選ぶ。

イナムヌー 小さな物。又はお子さん——敬意を含めて小兒をいふ。

イナンマー、インマー(浦) 姉。又齡下の者が中年迄の女を呼ぶ場合にも用ひる。家庭によつては若い母

を其子達が斯く呼ぶ。バー参照。

イニ・イイ(阿) 稲。阿傳語のイは鼻音。

イニ・アツカユイ 稲(を)、扱く。稲を扱ふの義。

イイ・ハラダー(阿) 刈田。稲刈田の義。

イニ(小野)、ニ とげ—刺。魚の細骨にもいふ。ノギの訛か。

イニヤサイ(小野)、ニヤサイ(阿)、ニツチャイ(小野) にかい。

イニヤネイ、イヤネイ(阿) 遺言。言ひ遣りの義か。

イニヤネイ・シユイ 懲々する—二度とすまじと思ふ程に。ウミीडに同じ。

ブユ・ヌ タベー イニヤネイ ドー 冬の、旅は、懲々、だ。—海が荒れる故に。

イニヤムニ、イヤムイ(阿) 小麦。イナムギ即ち小さき麥の訛。

イヌチ、イニユチ、イユチ(阿) 命。

イニユチ・ファンナギムン 亂暴者。命捨て者の義。

イユチ・シチファミテイ(阿) 身命(を)、賭して—。

イニユチ チリユイ 命が切れる。

イバイ 狭い處—せばみ。

イバサイ 狭い。

イビ 蝦。

イビラ へら。飯を盛る物にはミシゲーといふ。

イフィン 約束の撤回。例「決めた事をさうだしぬけにイフィンされては困る」。

イフ 粉末になつた黄褐色の土。

イフェー 位牌。

ウトウシ・イフェー 移し位牌。—分家などをした時、本家の位牌を書き移して祀るその位牌。

イフェーメー 正月又は旅行から歸つて来て、親族の位牌に禮拜して廻ること。位牌詣りの義。

イヤ、エ(阿) 疑問の意を強める助詞で、國語のねに相當する。

ワカテイナ イヤ 分つたか、ね。—分つたか、どうだ。

イヤギ 天命、運命。例「天からのイヤギだから諦めるより仕方がない」。

イヤギ 子供が生れた時、直ちに薄の幹を二本短かく切り、家の北戸口の桁に挿す。斯くする事をイヤギをさすと言ふ。薄の間短ければ次子が早く、遠ければ遅く生れるといふ俗信がある。

イヤイ(阿) 稲麥ののぎ。イは鼻音。

イヤラン 無理はない、言つても仕方はない。

ワラビ ヌ・サン クトウ イヤリンニヤ 子供、が、した、事、無理があるか。—鬼や角言はれるか。

イヤンティム 言ふまでもなく—。

イヤンティム ワカテー ウローガ 言はなくても、分つては、居ようが—。

イユ、ユ(花) 魚。

イユン・カー 小魚。

イユイ、ユイ(花) 言ふ。敬語ウモイユイ参照。

イーッサラシユイ 言ひくさす。

イーフンデー イユイ さんくくに言ひこなす、言ひ放題に言ふの義。

イーパッチユイ 言ひのがれる。あつた事をない様に言ふ。又債務を否定する。言ひはじくの義か。

イーバ ドウ イユル 言ふさへもいま〜しい事だ、と言ふやうな時冒頭に用ひる語。

イー・マンゲーシユイ 言ひ負かす——言ひふせる。

イーヨー シラバ チチヨー シリ 言ひやう、するから、聞きやう、せよ。言ひはゞかる事を遠廻しに語つて、それを相手がさとらない時などに言ふ語。

イユンナツシ 單獨に用ひる時はなるほど、(いかにもと言ふ合槌語)の意となり、副詞として用ひる時は果して——案の通りとなる。後者はインナガラに同じ。

イヨ 感動詞。よ。

シュラサー ヌカ イヨ 何と美しい事よ。

イライラ 双物等の鋭い形容、——鎌をイライラ研ぐ等。又元氣の旺盛してゐる人にもイライラしてゐる人等といふ。

イラミチユイ いらめく——あせもなどの刺す如き痒さにいふ。

イラユイ、イラウイ(阿) 同種類の物を返す約束で、暫時借りる。金錢の場合は、無利息で一時立替へるにいふ。ハユイ参照。

イラーシユイ 右の内容で貸す。古語いらす。

イレームン 右の内容の返済物。

イリ 錐。鹿兒島イ。

イリガネイ(老) 指輪。入金の義。ユビワに同じ。

イリガミ、イリガン かもじ——髻。入髪の義。

イリス 容器——種々の物品を容れるうつは。

イリテイ 襲ひかゝつて——武者振りついて。

ファゴーカー インガー チャ チュ ミリバー イリテイッチ 嫌な、犬、だ、人(を)、見れば、飛びついて、来て。

イリユイ、インヂユイ 入れる。

イルチル・メラビ(老) 美人を形容する語。色白乙女の義。マユグルの同義語。

イレー 人の呼ぶに對する答へ。例「先刻から呼んでゐるのに、なぜイレーしないのだ」。

イン、イー(阿) うん——然り。又はよろしいの意。自己と同等以下の者にいふ語。オー参照。

イーピー うん、何だの二語を重ねたのであるが、「ぞんざいな言葉使ひ」の意に用ひる。オーホー参照。

イン、インガー 犬。

インガンカー 小犬。

イン ヌ シン バン(謔) 犬、の、獅子の、番。——役に立たない番人の意。

イン ヌ ファ ヌ ヌミアタイ(謔) 犬齒、の、蚤當り。——まぐれ當りの意。

インガシユイ 消費を惜しんで軽減する。單に節約するには「ケーダイ シュイ」。例「好きな酒煙草までインガチ(減らし、惜しんで)溜めた金だ」。

インガシ・カニー(阿) 大事な食物をさも惜しさうに少しづつ食ふこと。

インガラミー ひどい目——因果な目の義。例「他村の茅山で秣を取つて、インガラミー合はされた」。

インギラー 蟻蛄——けら。

インゴ— 生後三四ヶ月の子供に練習させる言葉。又この語を練習させる事。インゴ—の出来ない(言へない)子供は啞になるといふ俗信がある。

インチュイ 動く。

インチャーシユイ 動き動く——頻りに動く。

インチン タグチン シラン どうしても動かない——貧乏揺ぎもしないといふ程の意。

インチューナ、インチューマ、インチャーナ 少し——ほんの僅か。例「インチューナの事から大喧嘩になつた」。ナイ参照。

インチューナナ— 少しづつ。

インチヨ— 毛蟲。

インドウ— 印籠。

インナガラ(阿)、ユンナガラ(花) なる程。言つた通り——果して。例「父が明日は雨だと言はれたが、インナガラ雨になつた」。イユンナッシに同じ。

インニヤーネイ— ぶらんこ。

インニヤーネイ— パーユイ ぶらんこに乗る。

インニユミ、インヌク こうせん、むぎこがし。麥粉に黒砂糖を混じて造る。

インニユミ カニヤー ヤートラー(謔) こうせん食ひの家倒し。茶請に麥こがしばかりを食ふ様な贅澤な者は、家を倒す者だの意。

インニユミ・カヤー 鮑貝。殻の小穴が麥粉の篩に似てゐる故斯く言ふか。

インバイ、インバイ 犬歩き、——犬のやうに諸處歩き廻るの意。例「朝から晩迄何處をインバイして来たか」。

[ウ]

ウ 接頭語。お——御。此の語を用ひる言葉は略々定つてゐて、どの言葉にも冠して敬意をあらはすといふ事はない。例へば吸物にはウシムンといふが、料理にはウシユキといふ使ひ方はない。

ウ 右、——馬及び牛に方向を命ずる語。チュディ参照。

ウ、ウ、ウ、ウ(阿) 緒。

バナ・グ— 下駄の鼻緒。

ウ、ウ、ウ、ウ(阿) 麻又はその繊維。

ウーカタ 大方——大部分。

ウーカン 往還——大道路。

ウーシューイ 馬に荷を負はす。

ニー・ウーシンマ 荷物を負つてゐる馬。空馬(ハランマ)に對し道中優待される。

ウーシューイ、ウーシューイ 起す。——倒れてゐるもの、眠つてゐるもの等を。

ウーシラン 尠からずある、或は限りもないといふ様な意に用ひる。

ウメー イスサ ヤ ウーシラン(阿) 海は、漁する人、は(が)、非常に多い。大變な人だといふ程の意。

チエー ヤ ウーシラン 面白い事、は、限りもない。面白くてたまらぬの意。

ウーヂユイ 怖ける——公衆の前で人怖えする。

ウーヂテイ ユミタ スーシラン 怖けて、言葉(話し)、する事が出来ない。

ウートー・アエーラン 人に食物をすゝめられた場合、何も欲しくはありません、といふ意に用ひる語。

ウーニ(小野)、ウニ、ゲイ(阿) 甘蔗。阿傳語のイは鼻音。荻の義か。

ウーネイ 波の大うねり。

ウーユイ、ウーウイ(阿) 追ふ。又は追ひ拂ふ。

マイ ウーユイ 後(を)、追ふ。但し従いて行くにいふ。

ウーイ・フアラユイ 追ひ拂ふ。

ウーイ・トゥリユイ 追ひ連れる——後れないやうにと急いでついで行く。

ウーエー 鬼ごっこ。追ひまはし合ひの義。

ウーリユイ 湧き起る。

フエー ヌ ウーリユイ 蠅、が、湧き出る。

ムン ヌ ウーリユイ 悪霊亡者などが盛んに出現する。

ウーリユイ めくれる——固着してゐるものなどがはがれる。

トゥミ ウーリユイ 爪(が)、はがれる——取れる。

ウイ、ウイ、ゲイ(阿) 居る。

チュ ヌ ウイ 人、が、居る。

ミドゥ ヌ ナーリテイ ウイ 水、が、流れて、ゐる。

ウカ 陸地。

ウカギ、ウカギサマ お蔭——お蔭様。カギ参照。

ウカギ トウキテイ タボーリ 乞食が門口に立つて物を乞ふ言葉。直譯すると、お蔭をつけて下さいとなる。「ムン クリテイ タボーリ」ともいふ。

ウカサイ 可笑しい。恥かしい。パッカシャイ参照

ウカサ・サー はづかしがり、恥かしくする人の義。

ウカサ ム シラー 恥かしくもせず——圖々しくも。

ウカシー ムン チャ 可笑しい、こと、だ。——實に可笑しいの意。

ウガムイ、ウガニユイ(阿) ウワニユイ(阿老) 禮拜する。祀る。拜見する——ミユイの敬語。

ティールウツチ ウガミ 柏手を鳴らして、禮拜せよ。

ニヂューサンヤサマ ウガムイ 二十三夜様(を)、祀る。

ウガン ドウサエール お久しぶりですの挨拶語。拜み遠いことでの義。

ウカリ、ウチャガイー お轉婆、又は浮氣女。

ウガン 御願、——神様に對しての。ガンともいふ。

ウガン タティユイ 願かけする——お願を立てる。ガン・ブドウチ参照。

ウキ 沖。

ウキ 浮標——網の上部に附ける板。

ウキユイ 耕作の目的で田畑を借りる——小作する。

ウキノー 小作料。小作料は黒砂糖で決める、即ち一畝二十五斤、乃至三十斤といふ具合に。

ウキユイ 手に受ける——投げたボール等を。又は承諾する。

シヨー ウキユイ 眞に受ける——嘘を眞實と思ひ込む。シヨーシユイともいふ。

ウグイス、ウグリス(歌言) 鶯。チツチャー参照。

ウクリユイ 遅れる。

ウクリユイ 病氣が再發する。

ウサーシユイ 物を一つに寄せ合せる。又は縁組させる——近親間の場合。

ウシャーユイ、ウシャーリユイ 物と物が一緒になる。又は夫婦になる——近親結婚の場合にいふ。

例「いとこ同志ウシャーリタン(結婚した)ちゆう事だ。」

ウシャーマシャー 手當り次第に、ごちやんぐに。例「竹も薄も焚物にするのだから揃へずにウシャーマシャー小屋に入れて置け」。

ウサーウサー(阿) 思慮分別を缺く形容。例「人中でウサーウサー物を言ふと馬鹿に見られるぞ」。

ウサイ おもかぢ——おさへ。舟を右へ廻す事、又右舷の事にもいふ。ピカイ参照。

ウサイ 天の命令の意か。巫女は天のウサイに依つて神人になるもので、自分勝手にはなれない等といふ。

ウサギユイ 物を尻押しする——押上げる。例「一人では背負へないからウサギティ呉れ」。

ウシ 牛。ブティ参照。

アー・ウシ 飴牛。

ウシガー(小野)、ウスワ(阿) 仔牛。

ウシー 良い氣持——満足感。安心。

パマ デ スダデイ ウシー・サ 濱、で、涼んで、良い氣持がした。

ハデイ トウリテイ ウシー チャ 風(が)、風いで、安心、だ。

ウシー 婦人の髪の結び方で、簡単に圓めて髪差で止めたもの。近時若い女の間には、廢れてあまり見受け

けない。

ウシー 添物。——物の賣買又は交換の場合、劣つてゐる方の品に足し添へる金又は物。

ウシー ウチユイ 右の添物を附ける。ウチユイは打つ。

ウシガーマンキー(小野)、マンカー(阿) すみれ—葦。ウシガ―は小牛、マンカーは小馬の義。

ウシタテユイ 準備を調べて出發させる。例「次の便船で息子をウシタイテユン(連體)事にした」。

ウシチ 日常食事に用ひる膳。チンに同じ。

ウシチー 少しも物恐れしない人—むしろ無感覺な人といふに近い。

ウシユ 海水。

ウシユバナ、ウスバナ(阿) 昔祝女が襦みそに用ひたり、又汲取つて来て神前を淨めたといふ神聖な汐水。こ

の水は海邊の一定の溜りから汲むもので、一般人は汲む事が出来なかつた。今でも諸處に此の跡がある。ミドバナ参照。九州方言及び十島方言中にも、汐花しほなが見出される。

ウシバン 野番。牛番の義。

ウシムン お露、—シルの敬語。吸物にも言ふ事がある。

ウス 曰。

ウスー、ウスー、グスー(阿) 嘘。

ウスーイヤー 嘘つき。

ウスミター 嘘言。

ウスノーユイ 遅くなる。

ウスノーティ ブリー シェータ 遅くなつて、無禮(失禮)、しました。

ウスマサ(小野) 身の毛もよだつ程怖しい。

ウスマシャン パナシ ぞつとする様な、話。

ウスユイ、ウスウイ(阿) 被ふ—かぶせる—ハッシュユイとも言ふ。又牝鶏が巢につくを「子をウステイ

(連用)居る」といふ。

ウセーユイ 食物を挟んで、掌に配る。斯くされる時は掌に頂いてオーオと言ふが禮である。

ウタ 歌。

ウタシャー 歌の名人、又は歌ふ人。

ウタナシ・ウドウイ 歌を伴はない踊。

△カヤンサミ・ウタ 子守歌、子をすかす歌の義。

ウタ・ヂェーノー 歌舞。ヂェーノー参照。

ウタ・ガキ 歌の名人が集つて互に即興の歌で應答すること。歌賭の意に用ひてゐる。

ウダ(小野) 早く—さあ—と急ぎ立てる語。ペークに同じ。

ウダ クン ソー 早く、来いよ。

ウタユイ、ウタウイ(阿) 歌ふ。又鶏が関をつくる—トウイの條参照。

ウダユイ 疲れてぐつたりなる。

ウダン お願ひ—お頼み。

ウダン セーラ お頼み致します。

ウチ、ウチ、グチ(阿) 伯叔父。

ウチー 伯叔父を呼ぶ語。中年の人にいふをぢさんぢさんの意にも用ひる。ウンミー参照。

ウチ 必ず然らんといふ意を表す語で、られたといふ受身の過去形に着く。但しられたをあらはす形は二種あるが(見られたはミラッタ又はミラッテイ)、その夕で終る形にのみ着く。

クナサッタ・ウチ 叱られるに決つてゐる——そんな事をするときつと叱られるぞ。

ウチー、ウキー(小野)、ウチリ(上喜) 火種——おき。

ウチーユイ 置く、但し物を置く場合にのみ言ふ。ウチユイ参照。

ウチツカヤー 居候。くつつき者の義。

ウチツカユイ くつ着く——びつたり着く。

ウチツキユイ くつつける、打ち着ける。

ウチフエー 釣針を付けた繩に錘を付け、海中に沈めて置く釣り方。多くめばる、鰻等に行ふ。

ウチマー 一統——血族としての。例「何某のウチマーは揃ひも揃つて正直だ」。

ウチャガユイ、ウチャーユイ、ウチャーウイ(阿) 首を上に向ける——仰ぐ。例「天井をウチャガテイ見てごらん」。

アー・ウチャーイ ぼんやり上を向き顎をつき出してゐる様。例「アーウチャーイして歩くと、人から

狂者マダカと言はれるぞ」。

ウチャテイユイ ぶつかる——突當る。

クラサ・チュ トウ ウチャテイユス ワカラン 暗くて、人と、ぶつかると、分らぬ。

ウチャテイ・シチャテイ あつち突當りこつち突當り。

ウチャラ 昔乙女達が用ひたといふ一種の香料。御伽羅の訛。古歌「誰が袖振てよウチャラ香ひ立ちゆり、吾愛人袖振てどウチャラ香ひ立ちゆり」。

ウチユイ 浮く。

ウチユイ 置く。

ウチマミー 置き場所を忘れること。置きまみれの義。

ウマニ ウチャン ブデイ 其處に、置いた、筆。

カンデーテイウコ、カンデートウコ 考へて、おかう。

ウチユイ 打つ。又は耕す。

ウツクユイ、ウツトーシユイ 打擲する。

パター ウチユイ 畑(を)、耕す。

ウチユッキー 風呂敷。ブルシキに同じ。

ウデイ 腕。グテーに同じ。

ウデイスブイ 腕まくり。

ウデイマイ 腕前——手腕。

ウデイー 燕。

ウデイモーソー 相撲の手の一種。相手の腕を取り腰車に乗せて投倒す手。

ウティユイ 落ちる。カンティユイに同じ。

ウトウシュイ 落す。

ウティラウティラ 今にも落ちようとする形容。

ウツカシユイ 此動詞は適當な譯がないが、琉球語ウツカシユン(負債する)の轉訛らしい。ウツキユイ参照。

ミアティ ウツカシユイ 豫定(を)、狂はせる。

ヂリ ウツカシユイ 義理を没却する——恥を恥と思はないことをする。

ウツカチヤ、ウツカチ しまつた——えらい事になつた。

ウツカミ 昔祝女に仕へた童女。

ウツキ(小野)、ウツキ(小野) けはひ——様子。例「久し振に島のウツキを見て来よう」——歸島しよう

の意。「此の子はウツキが親とをつくりだ」——顔の様子が似てゐるの意。古歌に「高さ端登てシ

マ・ウヅキ見れば、屋敷木ど見ゆる愛人や見やぬ」。

ウツキユイ 貧乏する。ウツカシユイと同語根か。

ウツキタ、ウツキテイ 損をした時に云ふ語。つまらない事になつたといふやうな意である。

ウツキー、ウツキ・ムン 貧乏人。ピンブーの條参照。

ウツサイ 多い。

ウツサイ、ウフツサイ 重い。

ウツス 蔭口。うしろ——後の義。

ウツス イユイ 蔭口(を)、云ふ。

ウツスツチユイ 後へ身を引く。例「馬が通るから道の傍へウツスツキ(命令形)」。スツチユイ参照。

ウツスツキユイ 物をその位置より後方へ退ける。

ウツタチー 嫁が初兒を産むには實家で産むが、二十日程経て健康を恢復すると、聲の親が迎へに行く。

其の儀式をいふ。打立の義。

ウツチャシ・ムン 世間から相手にされない者。ウツチャシユイは除去するの意がある。

ウツチャラカシユイ ほつちらかす。

ウツチユイ 他動詞。或る容れ物から他の容れ物へ物を移す。

フンバク カラ アンバク ニ ウツテイ 此の箱、から、あの箱、へ、移せ。

ウツチユイ 自動詞。感染する。病氣にのみいふ。

ウツチユイ かじかむ——手足等の凍えること。

クチ・ウツチー・ユミター 舌の硬ばつた様な言葉——口の凍えた言葉の義。

ウツチユミー 老年者を呼び掛ける語。アチーよりはいくらか若く、ウヂーに近い。又或る家庭では、老

いた伯叔父を呼ぶに用ひてゐる例もある。

ウツチユンカー 叔父を呼ぶ語。又祖父母の弟を呼ぶにも用ひることがある。

ウツチエーユイ 持たせかける。例「梯子を高倉にウツチエーティ置くと鼠が上るぞ」。ナンカーユイ参照。

ウツチエーイン ソーリ 腰をお掛けなさい。ケーインソーリといふのが更に上品である。

ウツチョーウツチョー(小野)

順々に。物を並べ或は積む時、一方からだんぐんといふ場合に用ひる。

△[△]チュフェーの條参照。

ウツチー、グツチー(阿)

をとゝひ——昨日。

ウツトウ

弟又は年下。イーイ参照。

ウツトウツカ

子弟。弟や子の義。

ウツトウ

ミユイ 弟を見るの義で、其の子の次が母の腹に身籠つた事にいふ。越後南蒲原見附近在で

オトミルといふ語がある。

ウツトリーユイ

卒倒する。

ウツトウ

音響、人の聲、又は評判。

ウツウダーサ

物音の高いこと。

ウツウナシ

寂として何の音もない事。又は人の消息不明になつた事。

ウツウン

サタン ネーン 音も沙汰もない。

ウツウ

イヂユイ 噂が立つ——評判になる。

ウツウ

空虚——うつろ。樽などの空なのを叩いた時の音響をウツウナイ即ちうつ鳴といふ。

ウツウ、ウツウ、グツウ(阿)

夫。トウチュトウ参照。

ウツウ

蒲團。ブトウンに同じ。

ウツウデー

醸造の時最後に出て来る悪い酒。ハナダレ参照。

ウツウシ

戸の突張棒又は門。

ウツウシ

カマシユイ 突張棒又は門を掛ける。カマシユイは食はせる。

ウツウシ

お厨子——先祖の位牌を納めるもの。

ウツウシル

もち黍、もち粟等に黒砂糖を混じ、粥の如くやはらかく炊いたもの。

ウツウチャ(老)

姉を敬つていふ語。

ウツウキユイ

茶碗などを伏せる。

ウツウツサイ

怖ろしい。

ウツウツサン

シク 怖ろしい程——澤山といふ事を形容した語。

ウツウツチャーユイ、ウツウツチャーウイ(阿)

俯向く——下を向く。

ウツウツチユイ

驚く。

ウツウツカシユイ

驚かす。

ウツウマラサイ

珍らしい。其の副詞形ウツウマラシーは、妙な——奇態なといふ意にも用ひる。

ウツウマラサー

シユイ 珍らしがる。

ウツウムイ、ウツウニユイ(阿)

お目覚めになる。キーユイの敬語。

ウツウミンソリー

お起きなさい。

ウツウユイ、グツウユイ(阿)

踊る。マチユイ参照。

ウツウイ

踊り。アヤー参照。

ウトウエー(阿) 頤。おとがひの訛音。エは鼻音。

ウトウラン、ウトウラン 言葉の意が通じない。

ヤマトウグチエー ヌーム ウトウラン 普通語は、少しも、通じない——解らない。

ウトウイ フェーサイ 悟り早い——了解が早い。

ウトウフネイ、ウツフネイ(小野) 傳説に、昔親に逆いたりした者を、海へ流す爲に造つたといふ船。

此島へも漂着したといふ傳説がある。内地諸地方でうつる船、又はうつぼ船。

ウドンバヤー、ウドンバヤー・ヤー 掘立小屋。埋み柱の義か。

ウデー 舊藩時代の公務の飛脚。百姓の賦役の一つであつた。

ウドー 大膽、又は亂暴。

ウドーモン 大膽者又は亂暴者。鹿兒島で横着者をオドモン。

ウドーラーサ 太々しく——人を人とも思はず。

ウナイ、グナイ(阿) 男からその姉妹をいふ。例「君はウナイ何人あるか。僕は姉一人妹二人ある」。イ

イ参照。

ウナグ、ウナグ、グナウ(阿) 女。

ウナーラビ 女兒又は小乙女。

ウナンカ 女の子。

ウナヤー、ウナギ 鰻。

ウナンガー 雌の小牛。

ウナンチュイ 頷く。

ウナンダチー 女世帯。女立ちの義。

ウニ、ウイ(阿) 鬼。又無慈悲な人にもいふ。阿傳語のイは鼻音。

ウネイ うね——隴。

ウヌイ(小野) その折、その當時——専ら過去の場合に。

ウバ、ウバ、グバ(阿) 伯母、叔母。

ウバキンカー 自分の父母の妹を呼ぶ語。小さいをばの義。カーに同じ。

ウバッキー 伯叔母を呼ぶ語。

ウバニ、ウバイ(阿) 米の飯。古語わうばん。阿傳語のイは鼻音。

ウビ 桶の箍——たが。

ウビ 婦人の帯。但し内地風の腹合せ、丸帯等にいふ。チチュビ参照。

ウビー・イユイ 酷い目にあつて懲りる。怖え入るの義か。例「此の馬はうんと懲らしたら、ウビー・イ

ツチ(懲りて)おとなしくなつた」。

ウビーユイ 覚える。記憶する。目覚める。

ウビーナシ 無意識。又は耄碌——ドーモーに同じ。覚えなしの義。子供や老人の事を、ウビーナシ

チュといふ事がある。チュは人の意。

ウビーラン 面白くてたまらない。味覺の上にいふ場合は、實に美味しいの意となる。

ウビサイ、ウフイサイ 大きい。マイサイに同じ。

ウフ 大なる——といふ意を表はす接頭辭。

ウフ・インガ 大男。

ウフ・ハマチ 大髻——女の髪束の大きなもの。

ウフ 大體——あらし。例「稻の穂もウフ出揃つた」。

ウフ・アヂー 曾祖父。大祖父の義。アヂー参照。

ウフ・アネー 曾祖母。大祖母の義。アネー参照。

ウフイ・ウバニ(小野) 出産と同時に炊く米の飯。これは産婦の乳が出るやうにとの意味で、家人の食ふものである。

ウフクイ 有難う。自己と同等以下の者にいふ。アイガテー参照。

ウフクン・デー 有難うございます。軽い謝辭。ウフクイの敬語。

ウフシ 相撲の手の一種。足絡め。

ウフシユ、ウフス 海嘯。又は大潮——舊曆一日十五日の満干の度の高い潮。

ウフスー 神樂の舞に用ひる面。

ウフッキユイ 溺れる。

ウフツチュ 大人。

ウフユイ、ゲブウイ(阿) 瓶の中の液體をゆさぶる。着物のほこりを振りはたく等。

ウベユイ うべる——酒に水を混する等。

ウマ、ウマー(嘉) 指示代名詞中稱。そこ。ウン参照。

ウマ ドウ シラリユル その通りでございます。——其處、ぞ、申し上げるの義。

ウマ、マ 馬。マー参照。

マンカー 仔馬。

ミーンマ 牝馬。

ウーンマ、グーンマ(阿) 牡馬。

タネインマ 種馬。

チョーンマ ヌ クンバツカシ(謔) 上馬、の、踏み損ひ(つまづき)。猿も木から落ちるの意に同じ。

ウマガ(小野) 馬銚。イダイに同じ。

ウマガ(小野) 孫を敬つていふ語。

ウマトウ 火又は火事。

ウマルムン 神佛に供へる小さい團子。米の粉で造る。お圓物の義。

ウミートウ 沙汰——サタに同じ。又心に掛けてゐる事。例「鑪掛屋が来るかも知れないから、ウミートウして居れ」。

ウミーチ 懲々、思ひ出してもぞつとすといふ氣持。イニヤネイ・シユイ参照。

プユヌ タベー ウミーチ ドー 冬、の、旅は、懲々、だ。
ウミチ 御神酒。

ウミツチ 思ひ切つて——うん、と、澤山の意。

ウミツチ カデイ ウミツチ ファタラキ うんと、食つて、うんと、働け。

ウミツチユイ 意を決する。断念する。又精出す。

ウミツチ ヤラチ ミロー 意を決し、やつて、みやう。

カンダグーイッカ シリバー ウミツカララン ドー 考へ過ぎ、すれば、思ひ切れない、よ。

ウミツチ ヌ タラン 精出し(はげみ)、が、足らん。

ウミヤスイ、ウミンニヤシュイ 馬鹿にする。

チュ ウミヤチ 人を馬鹿にして——。

ウミンヂユイ、ウミンヂヤシュイ 思ひ出す。

ウミンヂ フンヂ ワラユイ 思出し思出し、笑ふ。

ウム 水芋——田芋。古語うも。

ウムイ、ウムリ(歌言) なさけ——同情、又は愛情。ナサキ参照。

ウムイ バツカイ デンドー 心、許り、です。——人に物を贈る時などに、謙遜していふ。

ウムイ ウニユイ 熟する——果物や腫物などが。

ウムカギ・タチュイ 遠くに離れてゐる人の姿が俵ばれて、淋しく感じられるにいふ。俵が立つの義。歌

に「うむかぎぬ立たば、な沙汰しゆらちむい」とある。俵が立つたら、私があなたの事を案じてゐると思ひなさいの意。

ウムサマ うんと澤山——思ふ様。例「ウムサマ魚を獲つて来た」。

ウムテイ 表——裏に對す。母屋——トーグラに對す。母屋の座敷——おもての間。又は舟の舳。

ウムツサイ 面白い。

ウムシテイ、ウムシチー 面白き。普通はヂェーナといふ。鹿兒島オモシテ。

ウムユイ、ウムウイ(阿) 思ふ。戀ふ。

ウムエー 馬のおもがい——馬の口を挟むやうになつてゐる。

ウムリユイ 食物などが蒸されて腐敗しかける。

ウムリー・ハダー 右の場合の臭ひ。

ウモシ 馬牛、——家畜の意がある。ウシンマとすれば單に牛や馬の意。

ウモーユイ、ウモーウイ(阿) おいでになる。——行く又は來るの敬語。イチユイ及びシュイ参照。

フマ カイ ウモーリ こちらへおいでなさい。

イチ ウモーリ 行つて、いらつしやい。「ウモーチウモーリ」とすれば更に鄭重な意となる。

ウモーリ・ヨー 左様なら。目上に對し言ふ語。イキョーの敬語。

ウモーユイ 仰せになる——おつしやる。

ウモーユン トウーイ デー 仰せの、通りです。「ウモーユン ナッシ デー」ともいふ。

ウヤ、ウワ(阿) 親。

ウヤ・フアローヂ 親や親戚——近親の意。

ウヤ・フリムン 親馬鹿——子を思ふ親心を言つたものである。

ウヤヌ ヌビーツカ・カヌ ヌビーヤ ウフィク(謔) 親、の、喉より、子、の、喉、は、より太し。親は子を大事にして、美味な食物は子に多く與へるの意。

ウヤギンドー、ウヤギンノー 結婚後夫婦で嫁の里を見舞ふ儀。現在では此の語を用ひない。但し旅先から親を見舞に歸る事に言ふ事がある。親見參の義か。

ウヤッカ、ウワッカ(阿) 親子。

ウヤッカー、ウワッカー(阿) 仲良し——非常に親密な間柄にいふ。

ウヤファア、ウワファア(阿) 祖父母曾祖父母の總稱。

ウヤフヂ、ウワフヂ(阿) 祖先。

ウヤフヂ・ダナ 祖先を祭つてある棚、佛壇。シンスダナともいふ。

ウヤマユイ、ウワマユイ(阿) 敬ふ——尊敬する。

ウヤ・ワンダイ 嗣子——後取り。ワンダユイ参照。

ウヤンコー、ウワンコー(阿) パカマトウイに同じ。

ウヤンムトウ、ウワンムトウ(阿) 本家。又嫁がその里をいふ事もある。

ウユーリ、ゲーリ(阿) 其處にさうして居れ、待つて居れ。例「すぐ歸つて來るからウユーテイ呉れ」。

ウユイ 賣る。

ウユイ 織る。

ウユイ、ウヤギユイ 土を盛上げる。

アプシ ウユイ 畦を作る——土を盛りて。

ウラ、ウレ、ウワ(小野) そら——そら其處にといふやうな場合、又は相手に物を差出すとき等にいふ語。

コネ参照。

ウラ(早、嘉)、ウラー(早、嘉) 汝。ダに同じ。

ウランナー、ウラーチャ 汝等。

ウラー・ネーランムン ヌ 汝如き奴が——お前みたいな者が。

ウラツカサイ 歌や三味線などの音が、なつかしく妙なるにいふ。例「ウラツカサン(連體)三味線ぢや」。

ウラ・トウユイ 報復する——仕返しをする。トウユイは取る。

ウラ・ニシ 北風の裏——即ち島の南面の村々に吹く北風。

ウラバクー 竹籠。漁や農事に用ひる。ティンガーとも言ふ。

ウラミサイ 恨めしい。

ウラムイ、ウラニユイ(阿) 恨む。

ウララン、ガララン(阿) 氣持が悪い、身體の具合が悪い、じつとして居れない等。居られぬの義。

パナヌ サーテイ ウララン 鼻が、つまつて、氣持悪い。

ハマチ ヤデイ ウララン 頭が、痛んで、苦痛である。

ウトウツサ ウララン 怖はくて、ゐたゝまらん。

ウリ 指示代名詞。それ——その物。

ウリー(兒) おんり。ウリユイ参照。

ウリテイバ(女)、ウリヨ さうだとも——強く肯定する語。シラテイバに同じ。

ウリドウン、ウリヅン(小野) 夏の初頃——夏作を初める頃の季節。古くはその頃乃呂の盛大な祭儀が行はれたといふ。

ウリドウンデー 麥の取入を終つて、親を招き御馳走する行事。現在は行はれない。

ウリユイ 下りる。

ウルシユイ 下す。

ウル 喉笛——急所としての。ヌドウ参照。

ウル わかめに似た海藻の名。食用にする。

ウルハツサ 生毛——襟首などに生えるにこ毛。

ウレーマサイ 羨しい。

ウレーマチュイ、ウレーマサ シユイ 羨む。

ウワ 胎衣——えな。シラに同じ。

ウワイ 死人のある家へ諸事の手傳に行くことをウワイに行くこと云ふ。

ウワイムン(小野) 死人があつた場合、部落民が義務的に持つてゆく見舞物。單にウワイともいふ。

ウワイ 終り——最後。又限りなしといふ意にも用ひる。

ウワイ・ファテイ 一番最後。例「ウワイファテイの金持、或は貧乏」。

ヂェー ヤ ウワイ 面白いこと限りもない——此上もない。

ウワキ・サワキ 昔のヌル(祝女)のハンフティー(儀式)の時、左右に侍したウッカミ(侍女)の事を斯く云つたといふ。

ウワユイ、ウワウイ(阿) 終る。

ウワン 親船、本船。——はしけから言ふ。

ウワントー(兒) 小兒の遊戯の一種。波打際に礫や砂を積んで小さい砦を築いたもの。波が打寄せるを興がりながら、子供は「ウワントー ヤリガミー サカダル ムッチュー ムッチュー」と歌ふ。

ウン、ウヌ(老)、ウンネー(阿) 指示代名詞。その。

ウンサ それ丈。

ウンサクレー、ウンサツケー たつたそれ丈。

ウンダミー 鶉。

ウンチャイ 意地強く我を通す事。例「集會の時ウンチャイする者は誰々に決つてゐる」。

ウンチャラ その後、それ以來。例「ウンチャラお前達は何處へ行つたか」「ウンチャラ彼は消息を絶つた」。

ウンヂュ(老) あなた様。ナーミ参照。

ウンヂョー 老齡の馬。鹿兒島で老人をオンヂョといふ。

ウンバユイ、ウンバウイ(阿) 奪ひ取る。

ウンバイック 奪ひ合ひ。

ウンミ、ゲンミ(阿) 年中の諸行事や祭禮。折目の義といふ。

ウンミー 叔伯父を呼んでいふ語。ウヂー参照。

ウンミユイ(小野)、ウンムイ(嘉)、ウンニユイ(阿) 埋む。

ウナムトゥー、ウナムトゥ(小野) 臺所の土間。

[エ]

エー 藍——染色としての。

エー ふん——人の話をさうかと云つて軽く肯く語。

エーシレー(小野) 人の呼ぶに對する答へ。イレーに同じ。

エーダー、エーチュー(小野) 蜻蛉。あけづの轉訛か。

ヤマトウ・エーダー やんま。大和蜻蛉の義。

エーチャー 疊の合せ目。あひだの訛か。

エーティー 自分より年下の者又は劣れる者を相手にする事。例へば、大人が子供と口論などする場合

「子供とエーティーして見苦しい」など云ふ。

エームン(小野) 借り物。イレームンに同じ。イラユイの條参照。

エーユイ 自動詞。木の實などから汁が出る。古語あゆ。

ウミ エーユイ 膿(が)、出る。

アミンカー ヌ エーユイ 小雨がちよぼく降る——小雨が微かに降る。

エーシユイ 他動詞。木の實などから汁を絞り出す、膿を出す。

エーユイ(小野) 食物などをまぜ合はす。あへものあへと同系の語か。ハチャーシユイに同じ。

[オ]

オー はい——承知しましたの意。インの敬語。

オーホー はい、何ですかの二語を重ねた語であるが、「敬ひ言葉」といふ意に用ひる。インの條イーヒ

参照。例「長上に向つてはオーホーしなければ(敬語を使はなければ)いけないよ」。

オー 青、緑。オーサイ参照。

オーガー 馬鹿——間抜け。

オーガオーガ まごく——うろく。

オーギム、オーゲン 決して——どんな事があつても。イッシトゥに同じ。

ニャーラー オーギム アッサ クト[△] シエーラン これからは、決して、そんな、事は、致しませ
ん。

オーギユイ(小野) 飯を盛る、汁を注ぐの敬語。

オーク 枋^{あぶ} 擔ひ棒。サスに同じ。

オーサイ 青い、緑である。

オームイ(早)、オーミユイ(小野)、オーニユイ(阿) 青む——青づく。蒼ざめる——顔色などの。又は恐
れて蒼くなる。

オーサイ 危い。アブナサイともいふ。

オーシカ 危険な——危き。アブネーともいふ。

オーダー 春。

オーチヨ^ー 非常に困る事——往生。

オーチラン 身分に相應しくない。又力に餘る。例「オーチラン身なり」、「オーチラン仕事」。

オーナンチャー 青大将。又は鱒の一種——、美味ならざるより轉じて怠け者、役に立たない者を罵る語
となる。

オーニ、オーイ[△](阿) 扇。阿傳語のイは鼻音。

オーニユイ、オーウイ[△](阿) あぶぐ。ウは鼻音。

オーニ[△]、ウーイ[△](阿) 泳ぎ。阿傳語のイは鼻音。

オーファ 野菜類の總稱。青葉の義。

オーレー 支度——世話等の意がある。

ドウ・オーレー 自分の一身の持ち方。ドウセーベ^ーに同じ。セーベ^ーの條参照。

ムン・オーレー 食事の支度。

オーレー・サー 祝祭時の料理人。サネーシャ^ーに同じ。

オエ[△](老) 豚を呼ぶ時にいふ語。

オエンカー(老) 小豚。カーは指小辭。

[カ]

カ^ーイムン 祟り物、ものけ。——人畜に祟る死靈惡神など。カ^ーユイ参照。

カ^ードゥ 口を卑しめていふ語。はしたない言葉である。

ユム・カ^ードゥ 物を云ふ機關としての口を罵言していふ語。憎々しい嫌な口と言ふやうな語感。

ネイバイ・カ^ードゥ 物を食ふ機關としての口を罵言していふ語。食ひ意地の悪い嫌な口といふ語感。
ネイバイ参照。

カ^ードゥ シンナ 喋るな、——ぬかすなといった程に相手をひどく罵りいふ語。

カ^ーブイ(兒) 頭を振ふこと。

カーム 腰巻。シチマーサーに同じ。

カーユイ、カーウイ(阿) 掛る。又は憑く——ものゝけなどが。

カーリュイ、ハリユイ 乾く。

ターヤ ミドウ カーリトウイ 田、は、水(が)、乾いてる。

カイ 粥。

カイ 代り、又は代理。例「こはれてゐる物でも、カイが出来る迄は辛抱して使へ」。

カイロー(阿) 奇妙——風變り。

カキ 柿。

カキ 賭。又はゆびきり——小兒などが約束のしるしに互に指を曲げて引掛け合ふこと。

カギ、カギ、カイ(阿) 接尾語。お蔭、阿傳語のイは鼻音。

ナンニユ・カギ、チ ほんの少しの處で——きはどい處で。ナンニユはナイヌ即ち少しの。

ダーカイ、チ(阿) お前のお蔭、で。

カギ、ハイ(阿) 阿傳語のイは鼻音。蔭——日光のあたらない所、及び人目にふれない所。又は蔭法師。

ハンボー及びハター参照。

カギ 容姿。阿傳ではこのカギを蔭のハイと音變化に依つて區別してゐる。

カギ・ヂュラカ みめ美はしき——。女の美しさの形容。

カキ・ウタン、カキ・オーワン 間に合はない。ビの條参照。

カキツシ 駈足して、大急ぎで。

カキツシ クー 大急ぎで、來い。

カグミー 鷗。鹿兒島でカゴメ。

カクリデー、カクリチ(歌言) 暗礁——隠れ石の義。

カサ 疥癬。又果物や薯などの蟲ばまれた部分にもいふ。カサーとすれば疥癬の出來てゐる者、又は蟲ばまれてゐる果物や薯など。

カシー 加勢——手傳。

カシーシユイ、カシーユイ 加勢する。

カシーサー 下男。加勢する者の義。

ウナグ・カシーサー 下女。

カチ 何々するが増ましの増。

ミローツカ カニエー カチ 見るより、食ふは、増。

カチキ・ヌ・ヌヌ(老) 荒い木綿の布。

カチユイ 搔く。又は綱と綱とを繕合はせる。

カチャニユイ(阿) 引搔く。

カチユイ 勝つ。

カッサイ 振舞が軽々しい——重みがない。ガッサイは重量の輕いを云ひ、兩者子音の變化によつて意を

異にする。例「あの人は仲々出来る人だが、カッサ(軽々しくて)いけない」。

カッチ ことら——脛の後の肉の膨れた部分。

カツパー 痘痕。ポーソンカタールに同じ。

カドゥ かど——角。

カドゥ、カシドゥ 接尾語。毎に——度に。

ヤーン・カドゥ 家毎に。

イチュン・カドゥ 行く度毎に。

カドゥ、カヅ(小野) 數。

カトウー 鯉。

カトウー・ブシ、カトウンブシ 鯉節。

カトウー・シン 鯉船。

カドゥシチ、ハディシチ 風邪。風引の義。

カナー、カナシー 愛人。——男が女に、又女が男に何れにも用ひる。愛しき者の義。

ムトウン・カナー 昔馴染。もとの愛人の義。

ワカナ(歌言) 我愛人——戀人。

カナー 女性の名の下に附する一種の美稱。例へば鶴といふ名に附してツル・カナーとする。但し昔は役人即ちシューターの娘に言ひ、平百姓の娘には用ひなかつたといふ。

カナサル(歌言)、カナシャル(歌言) 愛する——連體形。普通の言葉ではハナサンとなる。

カニ(歌言) 斯くも。アン参照。

ウヂユグヤ ヌ ウヅキ カニ キュラサ ティユリ(歌の句) お十五夜、の、お月、かくも、美しく、

照つてゐる。

カネイファー 野葡萄。

カブチャー かぼちや——南瓜。トゥッピョーに同じ。

カベー 應援——喧嘩などの。庇ひの義。カワイともいふ。

カベー シュイ、カワイ シュイ 荷擔する。

カマイ 装束。身構へ。

ヤマトウ・カマイ 内地装束——和装。

ニギユン カマイシ ヲイ 逃げる、身構へ(を)して、ゐる。——逃げようとしてゐる。

カマイユイ 美装する。又はめかす。

カマス、カマヂー かます——吠。カマヂーは蒲笥の義。

カミ、カミサマ 神——神様。

カミサマン・ヤー 神社。神様の家の義。

カミナイ、ハンナイ 雷。カミナイ・サマともいふ。

カム 鴨。

カムイ(煮)、カミュイ(小野)、カニユイ(阿) 食ふ。噛むの義であらうが、噛むことにはハニユイといつて、
兩者を區別してゐる。その敬語はミシヨウユイ。

カヤイ 貝。

カラ 人を冷笑して呼ぶ語。單獨にも、他語に冠しても用ひる。

カラッチュ つまらない人——仕方のない人。例「あのカラッチュに何が出来るものか」。

カラ・インガ つまらない男——仕方のない男。

カラ 空虚。又は空虚の意を表はす接頭語。——ムナに似てゐるが、慣用上多少の差別がある。ムナの條
参照。

カラ・フアク 空箱。ムナフアクともいふ。

カラ・フネイ 空船——荷を積んでゐない船。

カララ 酒を入れる陶器。鹿兒島カラカラ。

カラス(歌言) 烏。ガラサーに同じ。

カリトウイ 熟達してゐる。例「仲々カリタ字ぢや」。内地方言に、かいてゐる。

カリ・ヌ・ネーン 運、が、悪い。——廻り合はせが悪い。「ブーヌネーン」ともいふ。ブーの條参照。

カル 赤茅。トゥマに同じ。

カワユイ 變る。

カン 重さ又は量。はかりの權がかりの義か。

カンヌネーラン 物の重さ又は量が普通並にない。

カンチリュイ 物の一定の重さ又は量が減る。チリュイは切れる。

カンガネイ 顎の關節。パーネイに同じ。

カンク 仕末——物を納ふこと。例「晴着は櫃の中にカンクして置け」。

カンク・ダナ 臺所にある食器や食物を入れる棚。

カンゲー 考へ。

カンゲーワーサイ 思慮が浅い。考へ若しの義。

カンゲーユイ 考へる。

カンチョーユイ、カンチョーウイ(阿) 數へる。ユムイ参照。

カンビョー、カンチョー(老) 看病。

[キ]

キー 感動詞。まあ——あゝ。讚美感嘆等のときに發する。

キタ 桁。

キダムン けだもの——獸。

キヤギリ 三味線の囃子。音を勢よく響かせよの意。

キュー(小野)、シュー(早)、スー(阿) 今日。

キラー 剝舟、——糸満の漁夫の用ひる舟。

キン 鶏の蹴爪。劔の義。

キンディー、キンヂー(小野) けんすい。——病人があつたり、普請などをする家に、力付け又は經費の

補助として薪や穀物などを贈るその見舞物。

キンブツ(小野)、キンブトゥ(阿) 見物、又は見事。

スラサー キンブトゥ(阿) 實に美しい——美しさは見事の義。

〔ク〕

ク、クー 粉末。

クー 来い。ウモユイ参照。

クーバ、クリバ 来いよ——クーに比べて親情を含んでゐる。

クーティナカ 形容詞。窮屈な、退屈な、憂鬱な。例へば狭い室に大勢入つた時、又一日中一人で家にゐる時等。

アマバツカイ フテイ クーティナカ ムンヂャ 雨、ばかり、降つて、鬱陶しい、事ぢや。

クイ 聲。

クイ ケーユイ 言葉(を)、掛ける。

クイ シュイ 誘ふ。聲するの義。例へば寄合に行くのに、通り掛りの家の者に、イカンナ(行かんか)

など、聲をかける事。その様にしてくれと頼む時は聲してくれといふ。

クイ カニユイ(阿) 歌の音が高く或は長い時など、聲が、いるといふ意に用ひる。聲を食ふの義。例「齡

取ると聲カニユン(食ふ)歌はとても歌へん」。

クイタレー 咳拂ひ——聲づくり。

クガリユイ、クガリユリ(歌言) 深く戀ひ慕ふ——思ひ焦れる。古歌に「思ひばこがれゆり言ひばよそ知

りる、吾が胸内にくたすしぬき」。クタス参照。

クカル いたち茅。ガンガヤーに同じ。

クギ 陰毛。

クグシ 串刺にして炙り、或は乾した魚肉。

クグチ 心持。

クグチ 疊の縁。

ククトウ 癩癩。

ククムン 穀物。トウワに同じ。

クダ、フチャ(阿老) 小座。家の後方(北向)にある室で、中流以上の家には大抵これが東西二室ある。

クチョー 胡弓。胴は漂着した椰子の殻で作る。

クツカ 三味線の奏法の一つ、音をヒリ／＼させて飾る手法。又仕事をするに、その動作に調子を附して面白く運行することにもいふ。

クツカ ヌ ネーン 三味線、歌、踊りなどに飾りけなく、ぶつきらぼうで妙趣のないの言ふ。

クナシユイ 叱る。プティユイに同じ。

クナシッキユイ 叱り付ける。

クヌミユイ、クヌニユイ(阿) 好む。又は家屋墓等を建設する。

シンヤ クヌミユイ 新家(を)、建築する。

クヌユ 現世。此の世の義。

クブー、クブガシー 蜘蛛。マヌシチャーに同じ。

クンヂョー 根性——性根。

クンヂユワー(阿) 短氣者。

[ケ]

ケー 罫。

ケー ワーリユイ 蜜柑などの中の袋が罫のついた所から分れる。その一ふさをチュケーといふ。

ケーギ 材料——もと。普通木質のものにいふ。

フナケーギ 船を造る材料たる木や板。

ケーク 稽古。

ケーチャー 針金を曲げ或は曲り木を利用して物を掛けるに用ひるもの。轉じて人のよくつむじを曲げるものにも云ふ。

ケーユイ 掛ける。

ケーイン ソーリ お掛けなさい。

イユ ケーユイ 魚を、(網で)掛ける。

ミドゥ ケーユイ 水を振りかける。

ケーユイ 缺ける——器物などの缺壊するにいふ。

ケーマーイー 缺け碗。

ケーユシ 舊曆三月頃の波荒れ。貝寄せの義。

ケーラー かけら——物の断片。

[コ]

コー 死者に對する追善のいとなみ。但しこれは日常のいとなみ、又はその心持をいふもので、法事の事にはマトウイといふ。例「泣いた處で死んだ人のコーにはならぬ。諦めてせい／＼働いてこそコー

になる」。

コー 布片。

コーファイ[▽](阿) イは鼻音。處々に布片を縫ひ足した着物。コーをはいだ物の義。
ヤリコー 檻樓片。

コー、コーイ 甲斐。

コー ネーン 甲斐がない、又は役に立たない。

コーキユイ、カーキユイ 食るやうに慾求する——食物や其他總てのものを。乾くの義か。

コーキ・カミー 食り食ふ事。

コーゲー 筭。昔上流の婦人が挿したもので、ギーファーより大なる物にいふ。

デン・ヌ・コーゲー 銀の筭。

コーサー 癩病。又その患者。

コーデー 自慢——高慢。デイクー参照。

コームイ、コープイ 蝙蝠。

ミヤマン・コームイ 深山蝙蝠の義。昔話などに用ひる語である。

コミユイ 葬る——死者を埋むの敬語。

コイヤクンサー おほばこ(植物)。膏藥草の義か。

コイル[▽] 紙縫——こより。



コーラー、コーチャー 馬の赤毛色。

コーラー・マー 右の色をした馬、赤色馬。^{あかけうま}

コーレー 俗にいふ胸のやける事。

コーレー シュイ 胸がやける。

コネ 目上の人に物を差出すときいふ語。ウラ、ウレの敬語。

[カ[△] 無氣音]

カ[△]、クウ[△](小野) 子。又植物の根から派生する葉^{ひたえ}にもいふ。

カ[△]・マグ 子孫。マグクともいふ。

カムチ 子持——子を持つ母。

カ[△] 疑問の助詞。か。であらうかと問ふ語で、自問的にも用ひられる。汝はするか、汝はであるか及び汝

はしないか、汝はでないかの形で問ふ場合には用ひないのが普通であり、又動詞過去形の「チ」「ヂ」

「テイ」「ディ」形語尾にはナを用ひカは用ひない。しかしてカは疑辭、不定稱が上に來る場合に用

ひる時は、ヨより問ひかける意が弱くなる。ガ、ナ及びヨ参照。

ウレー イシ カ[△] それは、石、だらうか。「ウレー イシ カ[△] ヤー」とすれば、自問の形となる。

アレー イチャ カ[△] 彼は、行つた、だらうか。

アレータル アタ カ[△] 彼は、誰、だつたらうか。

カ[△] 接尾語。程度の並に過ぎた事を表はす。

イチツカ・サ 行き過ぎた。——行過ぎ、したの意。

カニツカ シルナ(阿) 食過ぎ、するな。

アーミツカ・サ 赤み過ぎた——果物などが熟し過ぎた等。

カ[△] 接尾語。程。動詞にのみ附く。

シヌツカ ウムユイ 死ぬ程、思ふ。

アクツカ ミリ 厭く程、見よ。

カ[△] 父母の妹を呼んでいふ語。パーの條参照。

カ[△]、クワ[△](小野)、カマ[△](阿) 小さい物の意を表はす接尾語。カマ[△]は小石即ちイッスッカマ[△]の場合

にのみ着いてゐる例を見る。イナ参照。

ヤーン・カー 小屋。附屬建物にいふ事が多い。

ヤマン・カー 小山。

マン・カー 小馬。

カ[△]キー(小野) 鼠。ネイドウミ及びユミヂョーに同じ。

カ[△]キーバナ[△](小野) 鳳仙花。鼠花の意。トツサグに同じ。

カ[△]イ、カチ(阿) 方處等につく時はの方へとなり、人につく時はに對しとなる。但し人に對しては普通

「ニ」を用ひる。古語がりの轉形か。ナイ参照。

ニシ・カイ、ニシエー・チ 北の方へ。

チュ カチ ハタルナ ヨー(阿) 人、に、語るな、よ。

カウ[△]ス 子宮、動物の場合にいふ。

カサ[△]イ 深い。

カシユ[△]イ 物と物との間に挟む。戸に手を挟む、ノートに鉛筆を挟む等の場合。

カタ 深田。アサダに對す。

カツチ[△] 御馳走。——味覺の上から云ひ、御馳走そのものには云はない。

カッチ[△] せータ 御馳走様でした。せータはしました。

カナサ[△] 石女。子無しの義。

カナユ[△]イ、カナウ[△]イ(阿) 家畜などを飼ふ。又貰ひ子や寄るべない子供を養ふ。

カナイムン 飼畜——牛馬、山羊、鶏等。

カフ[△]ア 手指の第二關節を揃へて曲げ、その角で頭などを撲る事、又はその手の形をいふ。

カフ[△]カフ 板などを堅い物で叩いた時の音の形容。

カミ[△] 子思ひの轉訛したものか。乳呑兒に離別した親が、その子を思つて寝れる事。動物にもいふ。例
「何某はカミ[△]してすつかり瘦せてしまつた」。

カムイ(蓋)、カミユイ(早)、カニユイ(阿) 掴む。捕へる——禽獸又は罪人などを。又女を犯す。ツカムの

ツの脱落したものであらう。

カミツキユイ しっかりと掴む。

カントウミユイ 捉へ制へる——馬などを。

カンチョーロー ネーン 取柄がない——つかまへ所はないの義。

トウイ カムイ 鳥(を)、捕へる。

ウシバン ニ カマッテイ 野番に、捕へられた。

カムヤー、カムワー(阿) 子守。

カユイ、カウイ(阿) 使ふ。人を使ふ、金を使ふ等。ツカフのツの脱落したもの。

ケートーシユイ とき使ふ——人畜を。使ひ倒すの意か。

カユイ、カウイ(阿) 附着する。又は鳥などが木に止る。

ヂン ニ ドウル ヌ カテイ ウイ 着物、に、泥が、附いて、ゐる。

ヒー ニ トウイ ヌ カウンチ・シユイ 木、に、鳥が、止らうと、してゐる。

カラ、ラ から。

チャー カラ(チャラ) ドウ ウモーエータル 何處、より、ぞ、參られたる。——何處からお越し

ですかの挨拶言葉。

ワン カラ ファジミロ 私、から、始めよう。

カンティユイ、カミツティユイ 落ちる。つかみ落ちるの義か。ウティユイに同じ。

カントウシユイ、カミットウシユイ その他動詞。落す。

カンマ、カマ 朝。

カマ・ヨーネー 朝夕。

カモチー 朝食より晝食迄の間即ち午前八時頃より午後一時頃迄の間をいふ。朝らちの義。

チヌッカモチー 右の時間中——一朝うちの義。

〔キ 無氣音〕

キー 杓。

キー(阿兒) 兄さん。——幼い弟がヤッキー即ち兄さんを斯く呼んでゐる例が多い。

キガイ(老) 機械。バリカン。

キヌイ・ネイ 舊曆四月の甲子の日に行ふ害蟲除けの行事。小野津部落では、此の日田畠の四隅に薄を

立て廻し、後酒食を携へて部落民一同豊年を祝ふ酒宴を行ふ。

キブイ 家——戸数を數へる語。

ミ・キブイ 三戸

キユイ 漬ける、又は浸す。例「魚を鹽につける」、「洗濯物を水につける」等。ツキユイのツの脱落。

キユイ 附ける、着ける。——泥をつける、火をつける、船をつける等。
キン、キンタマ 擧丸。タグに同じ。

〔ク 無氣音〕

クー 骨——呼吸——要領。

クー ウビーユイ 骨を覚える。

クークー 蕾。——花などの。

ククンニユイ(阿) 蕾む。

クークー 後悔。アトウ・クークーともいふ。

クーヤ、クーワ(阿) ころや——染物屋。

クーユイ、クーウイ(阿) 喰はへる。

クーユイ、クーウイ(阿) 閉ぢる。

ブタ クーユイ 蓋(を)、閉ぢる。

クイブネー 刳舟、丸木をそのまま刳り抜いて作つた舟。奄美大島から輸入する。

クイユイ、クンディユイ 崩れる。萬葉に岩くえ。

クヤシュイ、クワシュイ、クンダシュイ その他動詞。崩す。

クギ、クニ(早)、クイ(阿) 釘。阿傳語のイは鼻音。

クシ 癖——習癖。シに同じ。

クシ ワッサ ドーシナラン マ チャ 癖、悪くて、仕様のない、馬、ぢや。

チュ ス・サン シグトウ ニ クシ キルナ 人の、した、仕事に、難癖、つけるな。

クシ 梳櫛。普通の櫛にはサバチといふ。

クダ 管。鶏などの食道にもいふ。

クダー 小豆——あづき。

クタス(歌言) 思ひ朽たす、煩悶する。

クタス シヌキ(歌言) 心の中に煮える様な心痛。シヌキは心配事、思ひ事等の意に用ひられる歌言葉である。

クタクタ 胸がくたくする——心配して。又物が煮え立つ音の形容。

クタ ナユイ 煮え過ぎてくたくになる。

クチ 口。言葉。口車。呪禁の唱へ言。

クチン・ナサキ 同情の言葉。又は實を伴はない同情らしき言葉。

クチ シユイ 餘計な事をしゃべる。文句をいふ。口するの義。

クチツチユサイ 口が強い。

クチ・ガチ 理非を問はず辯舌で我意を通すこと。

ク△チ・ヤサイ 言葉穢い——物云ひの卑しい又は悪辣なるにいふ。

ク△チ・マサイ 口がうまい——言葉巧みなのにいふ。

ク△チ・ムツチャイ 言葉が鈍い——のろい。

ク△チ・ヌ・アンバー お世辭。口の油の義。

ク△チ イリユイ まちなひをする——呪詛する。口を入れるの義。

ク△チ ムドウシユイ 呪詛されたのを解く。口を戻すの義。呪禁を解く唱へ言をムドウシグチといふ。

ク△チクユイ 口論する。出雲でクヂクル。

ク△チヂル・マユイ 食欲をそくられた時口中に唾液の滲むにいふ。マユイは廻るの意であるが、他語

に着いて催すの意に用ひられる事がある。

ク△チツチ 乳兒の口中のたゞれる病氣。

ク△チトウ 文句——口舌。例「仕事は出来ない者がクヂトウばかり言つてゐる」。クヂョーに同じ。

ク△チ・ヌチャーサー 女などが言つたの言はないのと口争ひをする事。例「男が女とクチ・ヌチャーサー

して、みつともない事である」。

ク△チ・ムスビー(小野) 許婚。クンバーサーに同じ。

ク△チヤ 堅い白土。

ク△チヤナシー くちなし——山梔。

ク△チラ、ク△イヤ(老) 鯨。

ク△ツサバー 田蟲——皮膚病の一種。

ク△ツサミ 嚏。

ク△ヂョー 文句。クヂトウに同じ。

ク△ヂョー 手慣れる事、手を覚え——のみ込む事。

マミーヤ ク△ヂョー・シユン インガ チャ 馬(を)、見る事(鑑定)、は、慣れた、男だ。

チカグル ヌ ネイドウメー ク△ヂョーッシ ヤマ ニ イラン 近頃の鼠は、のみこんで、わな、に、

入らん。

ク△ツトウ(阿) 二十日鼠。口の尖れるものゝ義。

ク△トウーサイ、ク△ツツーサイ(小野) 息苦しい——窮屈である。——頭から蒲團を被つた時の様な、又狭い

室にぎつしり人が詰め込んだ時の様な。

ク△トウクトウ 窮屈さうに狭い室に人がぎつしり詰つた様な場合の形容。

ク△トウクトウ ク△トウーカ ムンチャ くつくつと、窮屈な、事だ(ものだ)。

ク△トウンニユイ(阿) 擦る。擦られた時の感覚をパゴーサイといふ。

ク△ム 雲。

ク△ムイ、ク△ニユイ(阿) 踏む。又は下駄などを穿く。

ク△ンピツシユイ 踏み潰す。

ク△ミシシダシユイ 踏みにぢる——蹂躪する。又は人をさんく馬鹿にする。

ク△ンチエーユイ 下駄などを穿き違へる。

ク△ムイ(嘉)、ク△ミユイ(小野)、ク△ニユイ(阿) 汲む。

ク△ムイ(嘉)、ク△ミユイ(小野)、ク△ニユイ(阿) 組む。編む——アムイに同じ。縫れる。

ク△ミ 組(を)、組む。

アミ 網(を)、組んで、ゐる。

イチユー 網(を)、縫らせた。

ク△ムユイ、ク△ムウイ(阿) 曇る。

ク△ムイ・ティンキ 曇天。

ク△ラ 倉——専ら高倉にいふ。四本乃至六本の大圓柱の上に床を作り屋根を置く。木材は全部巧みに組合

はせる様になつてゐる。穀物や黒砂糖、味噌等を入れる。古くは四本柱をウトウマタ、六本柱を

ムトウマタと云つた。

ク△ラ 鞍。

マン・クラ 馬の鞍。

スイ・グラ 乗鞍。

ニグラ 荷鞍。

ウツスクラー、ウツスッカー 牛の鞍。鋤を掛けるときは馬にも着ける。

ク△ラムイ、ク△ラニユイ(阿) イチユイ(行く)の罵詈雑言。

ク△ラミ、イチ・クラミ 行け。——失せろといったやうな語感。

ク△ラユイ、ク△ラウイ(阿) 食らふ。——カムイ(食ふ)の鄙語。

ク△リ 呉れ。見せてくれ、——貸してくれ等。タボーリ参照。

ク△リファー、ク△ネイファー 蜜柑。九年母の義。

トーネイファー、トーカー(小野) 九年母。唐九年母の義。

ク△リユイ、ク△ンヂユイ(阜) 呉れる——興へる。

ク△リ 烏賊の墨。

ク△ルウントーネイ 豚の異名。クルは黒。ウントーネイはよくある女の名前。黒い姐さんといふに似

た呼び方である。

ク△ルベ 梅雨の上りかける頃に吹く南風。今にも降るかと思はれる黒雲が起つて、それでも降らずに吹

き續ける。

ク△ルマ、ク△ンマ 車。ク△ンマは砂糖壓搾車にのみいふ。

ク△ルマー 黒毛馬。

ク△ルミチャラ(老) 豚。上品な言葉であつたといふ。

ク△ルンドウイ 黒い鳥。

ク△ワサイ、ク△ワシサイ 詳しい。律義である。又几帳面であるといふ意にも用ひる。

ク△ワシー トウクイ 律義な(或は几帳面な)、人(性質)、だ。トウクイはつくり。

ク[△]ク[△]ク[△]ミ 玄關。踏み込みの義。

ク[△]ン[△]チ[△]ャ[△]、ミ[△]ミ[△]・ク[△]ン[△]チ[△]ャ[△] 髻。

ミ[△]ミ[△] ク[△]ン[△]ヂ[△]ユ[△]イ 髻になる。

ク[△]ン[△]ヂ[△]ユ[△]イ くじる——扶る。

ク[△]ン[△]ヂ[△]リ[△]ケ[△]ー(阿) 鳥獸を捕へる網。

ク[△]ン[△]バ[△]ー[△]サ[△]ー 許婚、括り合はせの義。ク[△]チ[△]ム[△]ス[△]ビ[△]ーに同じ。

ク[△]ン[△]ビ[△]ー 疣——一種の皮膚病。

ク[△]ン[△]ブ[△]イ、ク[△]ン[△]ヂ[△]ユ[△]イ(阿) 括る。

ク[△]ン[△]ヂ[△]ツ[△]キ[△]ユ[△]イ(阿) 括りつける。

ク[△]ン[△]マ[△]ー ひざら貝。

ク[△]ン[△]マ[△]ー[△]ボ[△]ー 三つ合はせの繩を綱ふ際、縫を入れるに用ひる具。長さ一尺五寸程の棒の一端に穴を穿け、

それに五寸程の小さい棒をさし、その棒の一方には取柄があり、他端に繩を付けて棒を振り廻す。

小野津ではこれをツナカキーと云ひ、ク[△]ン[△]マ[△]ー[△]ボ[△]ーは同様の仕掛の豆打棒にいふ。

ク[△]ン[△]ム[△]イ、ク[△]ン[△]ニ[△]ユ[△]イ(阿) 口に物を含む。

ム[△]ネ[△]イ ク[△]ン[△]ニ[△]ユ[△]イ(阿) 食物が胸の邊に支へる。又言葉が支へる。

[ケ[△] 無氣音]

ケ[△]ー 招聘。招待。つかひのツの脱落せしもの。

ケ[△]ー シュ[△]イ 招待する。——醫者を迎へる、客を招ぶ。

ケ[△]ー、ク[△]エ[△]ー(小野) 歟。

ケ[△]ー 食事を數へる語。

チュ[△]・ケ[△]ー 一食。

サ[△]ン[△]ド[△]ウ[△]・ミ[△]ケ[△]ー 三度の食事。

ケ[△]ー[△]ユ[△]イ 肥える。動植物共にいふ。

ケ[△]ー[△]ブ[△]タ[△]ー 肥滿者。ブ[△]タ[△]ーはブ[△]ッ[△]テ[△]ー(肥滿者)の變化であらう。

[コ[△] 無氣音]

コ[△]ー 物が著しく窪んでゐる状態に言ふ。

ク[△]ダ[△]シ カ[△]ー[△]テ[△]イ ワ[△]タ[△]ー コ[△]ー ナ[△]タ 下痢(に)、かゝつて、腹は、コ[△]ー(に)、なつた。ひどく引込

んだと言ふ程の意。

ミッコ

ひどく窪んでゐる眼、又その様な人。

コー

水や汗などをガブ／＼と呑む形容。標準語のガブ／＼に似てゐる。

[ガ]

ガ 我——意地。根氣。

ガー ファユイ 我(を)、張る。——意地を張る。

ガー チリユイ 根氣(が)、切れる——なくなる。

ガーター ばつた——蝨。轉じて瘦せこけた人。

ヒンムン・ガーター きり／＼す。化物ばつたの義。

ガス 馬鹿。人を叱りつける時などにいふ語。粕の義であらう。

ガスター 海膽の白色にして針短く大なるもの。食用とする。

ガチ 駄々兒——むづかりや。餓鬼の義であらうが罵る意はない。

ガチ シユイ むづかる。

ガチガチ・シユイ 感情が激した時などに齒を噛む様をいふ。又寒さに慄へる様にもいふ。

ガチミチユイ 武者慄ひする——相手に立向ふ様。又非常に好きな物や事に對して貪りつく様にもいふ。

ガチマル、ガチマロー、ガンマラー 榕樹。

ガチャミ、ガチャマー(嘉) 蚊。

ヤマ・ガチャミ 藪蚊。

ガツシユク 月蝕。

ガツチー 禿——傷痕。鹿兒島ガツチ。ピンターに同じ。

ガツツイ(小野)、ガツトウイ きち／＼——かつきり。阿傳では全くといふ後續副詞としても用ひる。鹿兒

島ガツツイ。

ガツトウイ イチヂカン カータ かつきり、一時間、かゝつた。

サーシローカ ガツトウイ(阿・女) どうしよう、ほんとに。

ガトウ 接尾語。だけ——分。鹿兒島ガト。

ヂッセン・ガトウ(若)、ヂッシン・ガトウ 十錢だけ——十錢分。

ガトウン 鯨。喜界島では獲れない。

ガナシ 接尾語。神佛又は高貴の人を敬つて其名の下に附する語。

トウヌ・ガナシ(老) 殿様。

ガニー、ガイ(阿) 阿傳語のイは鼻音。蟹。又は女陰の隠語。

マー・ガイ(阿) 食用にする蟹の名。

パンマーガイ(阿) 濱の砂の中に穴を掘つて棲む蟹の名。食用とせず。

パンガヤー(阿) 最も大なる蟹、甲に赤色の圓い紋がある。食用にする。

ガバ 澤山。

ニャー ガバ デー もう、澤山、です。——もう結構です。すゝめられた食物を辭退する語。
クリフアー ヌ ガバ ナテイ ウイ 密柑、が、澤山、なつて、ゐる。

ガブー 凸形のあらゆるものいふ。甘蔗の切り後の根には特に斯くいふ。
ハマチ・ガブー 頭の大なる者。

ガブユイ、ガブウイ(阿) がぶる——船などが動揺する。

ガマ 穴。珊瑚礁の穴、石の穴等の自然の穴に言ふのが普通である。左の様な用例もある。アナ参照。
ミー・ガマー 憔悴して目が窪んでゐる事。

ガマク 脇腹。

ガムシヨ、ガムソ 手荒——物の取扱ひの。例「道具をガムシヨしてはいかん」。

ガムシヨ・ナ 手荒な——亂暴な。又は頑丈な。例「ガムシヨな畑打」、「ガムシヨな馬」。

ガヤ 茅。

ガヤー 茅に似た草の名。

ガラサー 烏。

ガラランガー 烏の雛。

ガラス ヌ クムアテイ(談) 烏は雲を目標(あて)にして遠方へ往來するといふ。恰もその様な不安
定な目標を置いて行動する事を戒めていふ。

ガラシユ 舊曆五月の最も干度の甚しい潮。

ガラト ひとで——海盤車類に屬する棘皮動物。

ガラトミ 肩車——首を挟んで両肩に馬乗りになること。

ガラヨ、ガナヨ(花)、ガロー(阿) 河童。傳承に小兒程の大きさをして頭に皿を戴き、全身赤く髪
長く、水のある所に住んでゐて、よく人に相撲を挑むといふ。ネイブイ・ガロー(居睡河童)と
いふのは、海邊の岩でよく居眠りをしてゐて、漁者に發見されるといはれる。

ガワ 胡麻化し、又は横着。ガワ・シユイとすれば胡麻化す。

ガワー、ガワー・ムン 横着者。よく人を胡麻化す者。又剽輕者の意に用ひる事もある。

ガンガヤー いたち茅。クカルに同じ。

ガンシユイ 物が損耗して役に立たなくなる。又人が病氣などでひどく衰弱する。

ガンタリ つまらない物——貧弱であまり役に立ちさうにない物。鹿兒島グアンタレ。例「ガンタリ
自轉車に乗つて行つたら、途中でパンクして困つた」。

ガンチュー 頑丈、多く健康といふ意に用ひる。

ガンチューサ エーン ニャ お丈夫で、いらつしやいますか。ドウクサイの條参照。

ガントウチ 海邊の岩礁のとげ／＼した處。例「島の人はガントウチから素足で歩いても平氣だ」。

ガンドー 玩弄——物をいぢくる事。又はたはぶれ。阿傳ではまゝごとの意にも用ひる。

ガンドー・ユミター 冗談。

ガンバユイ、ガンバウイ(阿) 頑張る。トウツバユイ参照。
ガン・ブドウチ 願解き—願を解くこと。神に願を立てると、後に必ず願解きをする。ウガンの條参照。

[ガ ga]

ガ 助詞。が。代名詞にのみ付き名詞にはつかない。ヌ参照。

ワガ 私が。阿傳ではワンと言ひ、ンのアクセントを上げて發音する。

フンガ これが—此の物が。

ガ 疑問の助詞。か。ヨに同じく何、如何等の疑辭及び人、場所、方角等の不定稱が上に來る場合にのみ

用ひられるが、ヨが動詞過去形中「チ」「ヂ」「テイ」「デイ」形語尾に附くに對し、これは「チャ」「ヂ

ヤ」「タ」「ダ」語尾に附く。ヨ、カ及びナ参照。

フレイ スーガ これは、何、だ。

アレー タル アタガ 彼は、誰、だつた、か。

[ギ gi]

ギータロー、ゲーチャールー(小野) 子供の遊戯の一種。片足舞—片足で跳ねて歩く遊び。

ギチー、ゲーチー 吃逆—しゃくり。

ギファー、ギーファー 簪—かんざし。銀花の音といふ。

キラ ごかい—沙蠶。海邊の砂中に棲む。百足に似た蟲で、魚の餌に最もよい。

キラシー 小蛸の一種。

ギン、チン(老) 銀。ナンチャに同じ。

ギンキ 元氣。健康といふ意もある。クツシャ及びドウクサイの條参照。

ギンキ デンナ 御達者ですか。その最敬語は「ギンキ アイソソエーン ニヤ」。

ギンキ シ ウモリーヨ 元氣、して、おいでなさいよ。—どうぞお達者で。

ギンダー 豌豆。エンドーの轉形。

ギンミ、ヂンミ 協議。吟味の義。ユレー参照。

バルギンミ 野原の農作物見縮りに關する協議。

[グ gu]

ゲー 連れ—相手。

グーッ シ クー 連れて來い—一緒に來い。

グイシク(阿) 節日—年中行事。ウンミ(折目)を總括していふ語。

グイブネイ(阿) 肋骨。

グイレーユイ(小野) 敬ひ尊ぶ——敬意を表する。

グガトウゲンチ 舊暦五月五日に行ふ男の節句。各家々では菖蒲を軒に挿し柏餅(ハヤムツチ)を作り、男兒が始めてこの日を迎へる家では親族集つて祝をする。古くはシクと云つて、青年少年が酒食を携へて集り、遊宴する慣ひがあつた。

グサネイ 杖。

グシー 木片、又は竹片。——大體小指位の大きさをした、長さ一尺内外のにいふ。

グシュ 後生——死後の世界。七チョー(七つの門)を通つて七日の間歩く遠い所にあるといふ話などあり。アヌユ(あの世)に同じ。

グスミチャイ 動物の軟骨。

グチ 莖——植物の。

グチスー 御馳走。

グチスーサマ データ 御馳走様、でした。

グチツチエー 食ひ過ぎた後悪臭のげつぷの出る甚だ嫌な感覺。例「久し振りの御馳走で、グチツチエーする程食べた」。

グチユーニチ 五十日忌。葬式の日より五十日目に行ふ祭。

グチユーネインチ 五十年忌。最後の年忌祭で、古い親族なども招いて盛大に行はれる。

グチユイ おびく、魚や蟹等を餌でおびくにいふ。
グチユグチ 愚圖々々——動作の。ぶつ——不平を言ふ様。ひそ——話をする様。
グチル ご汁、——大豆を搾り込んで煮た汁。
グトウ ——やうに。如の義であらう。ナツン参照。
ムン カマル・グトウ シリ ヨー 朝食、食べられる様に、せよ。此の場合は朝食の仕度をせよの意である。

グトウニ(歌言) 如くに。普通には用ひない。例「荒波の上に浮ちゆる舟のグトウニ」。

グドウツバネイ(阿) 飛んだり跳ねたり。普通に馬の跳ね暴れるにいふ。躍り跳ねの義。

グデー 腕。ウデイに同じ。鹿兒島ゴテ。

グヌ(阿)、ウヌ 斧——大なるもの。ドゥミヤ参照。

グヌクー(阿)、ウヌクー 頸窩——ぼんのくぼ。

グヌチ 時分——時節——頃。

イ^マカン・グヌチ 夕飯時。夕食を食ふ頃の義。

クリ[△]ファーヌ パナ サチュン グヌチ 密柑、の、花(が)、咲く、時分。此の場合はシトウ、又は

ヂシトウともいふ。

グバリユイ 雨が小止みになる——こばれる。

グマ 胡麻。

グマ・マシユ 胡麻鹽。

グマサイ、グニヤサイ 細かい——粒物などの。

グミ 塵。アッタに同じ。

グミ・シッタ 塵芥。アッタシッタに同じ。

グミー 鶏の羽の斑紋などにいふ。

グムル 灌木の名。和名コウルウメ。幹細く弾力に富むので馬の鞭などに用ひる。

グユ 御用。主として公けの用。又用便の隠語。

グリ、グリー 残り汁——底の方に僅かに残つてゐる汁。おりの訛。

クリー 御禮。又は御辭儀。ディーの條参照。

グリー イユイ 御禮(を)、云ふ。

グリー シユイ 御辭儀(を)、する。

グルー 猫。マヤーに同じ。

グルイ 周囲——ぐるり。

グルサイ すばしこい——物の動く速度にいふ。

グルサイ 接尾語。——にくい。

アッチ・グルサイ 歩きにくい。

グン 恩。

グン ハッシユイ 恩に着せる。——恩(を)、被せるの義。

グン 機智——頓智。頓智にはトウンチともいふ。

グンシャ 機智に富む人。

グンチン、ケツギン 機嫌。御機嫌の義。

グンナイ 跛。

グンナイグンナイ 跛者の歩行の様を形容していふ。

グンナイ シユイ がつかりする——ぐんなりする。

グンバ 麻に似た小なる植物。その葉は山羊が好んで食ふ。

[ゴ]

ゴ 輪——圓。普通マル、ワ等といふ。

ゴ 部落内の區劃、その區劃内をゴドチュといふ。

ゴ 一合榊。

イチゴ・ゴ 一合榊。

ゴスキ 昔の地割制度下の高配當。

ゴダ、ゴドチャー たはけたこと。

ゴード シンナ たはけた真似をするな。
タンマン・ゴードチャー いらぬお世話。タンマンは頼まぬの義。ゴードチャーはゴードの變化。
ゴード(阿) 罾——鳥などを捕へるもの、馬の尾の毛で作る。
ゴードアミー 蝦を捕へる網。竹輪に網を張り蝦の通る岩蔭などに設へて置く。
ゴード(兒) 豚。擬聲語。

[サ]

サ 接頭語。實に嫌だといふ感情を表はす語。

サ・ヂェー ネーン さつぱり面白くない——嫌だといふ感情が強く含まれてゐる。ヂェー参照。

サ・フアゴカ 嫌悪の情を表はした語で、「サフアゴカ ワロー チャ」と云へば、實に嫌らしい野郎だといふ意になる。

サ(阿)、ピヤ(小野)、バ(嘉) 足。スネイ参照。

サ・タブネイ(阿) 足の鄙語。手の鄙語をテイ・タブネイ。

サン・パナー(阿) 足の指。足の突端の義。

サン・ワタ(阿) 足の裏。足の腹の義。

サ 旅金。足の義。アシとも云ふ。

サ 草。又は馬草——マンメーに同じ。

サ(阿)、シャ 下——天に對し地の方。又山の手の方に對し海邊の方。シムとも言ふ。

サ 臺所、表をウイー即ち上といふに對し、臺所を斯く下と言ふ。シムとも言ふ。トログラに同じ。

サーサー、ササンサー、ササグサ(歌言) 海邊の岩の上又は砂地に生える葉の長い芝。葉の短いものにも云ふ事があるが、それには特にシバといふ。葉の長いものは燃料になる。

サーシー 傾斜。

サーシー・ドールー 傾斜した處。

サーシマ、サカシマ さかさま。

ティン トウ[△]ヂダー サーシマ チャ あまり突飛な事を聞いた時に例へて云ふ語。天、と、地は、

さかさま、ぢや。

サーユイ、サーウイ(阿) 塞がる。語頭のフの脱落せるもの。

サニユイ(早) その他動詞。塞ぐ。

ミーツサーリ 目(を)、つむれ。

サインケー 坂迎へ。例へば遠方へ嫁に行つてゐる者が正月などに里へ歸つて來ると、親戚がそれをお迎への意味で見舞ふ事等にいふ。又六月の氏神の祭禮の前日の夕方、社前に集つて神をお迎へするにも斯くいふ部落がある。

サカ 坂。ピラともいふ。

サカ(老) 廣い世の中——世界。

サカイユイ、サーダチユイ 榮える。子孫繁榮する、木の枝が榮え繁茂する等にも用ひる。

サーダカン 榮えない。子孫が繁榮しない、木が大きくなならない等。

サガマー 飛の魚と同型にして長さ五寸程の矮少な魚。

サカヤチ 顔を剃る事。月代の義。

サガユイ、サガウイ(阿) 下がる。

サギユイ 下げる。提げる。

サク 農作。

サク・シャ 農人。作する人の義。バルチャーともいふ。

トウクイ・サク 作物。

サクチ ぼら魚の成魚。ブラともいふ。トウクラ参照。

サク・トウユイ 鶏が時を告げる。尺を取るの義。

サクラナガシ 舊曆二月に降る一種の長雨。この雨は蜜柑の花を流すといふ。

サクロー、キヤクロー 座敷の天井の中央に渡す大きな横木で、好んで良材が用ひられる。普通八疊以上の座敷に付け、その木と天井板の間には組子クミコと稱する飾戸を立てる。鹿兒島でキヤクロー。

ササミンナ 七五三繩。オーバリといふ部落もある。

サシギタ 足駄。鹿兒島でサシゲタ。

サシヌツカ 錠前。サシ即ち錠の子の義。

サス 擔棒。オークに同じ。

サスガ、サスナ(老) 流石。

サスガ インガ チドウ イユル 流石、男、とぞ、いふ。——男ともあらう者が、の意。

サスク 素振——様子、又は動作に伴ふ調子。例「踊る様なサスクで歩いてゐる」、「あんなサスクで馬に

は乗れるものでない」等と使ふ。

サタ 沙汰。サンデーに同じ。

サター 砂糖。黒砂糖にいひ、白砂糖にはパクトーといふ。小兒はター又はターターといふ。

サター・シー 製糖。例「今日はサターシーで忙しい」等。

サダイ、シャダイ(小野) 下方。例「木のサダイ(下枝)の方の蜜柑は、日に當らないので熟するの

が遅い」。

サダネイ 畑に生える性の悪い雑草。轉じて性質の非常に悪い人間にもいふ。

サチ 先——前。棒などの先端。刀の切先。

サーチン さつき——先程。又は疾うに。

サチダチ 先の者は先に順次に。先々の意。

サチ ナエーラ お先に失禮といふ場合にいふ語。

サチ 手拭。テイヌギー参照。

ダンサチ 西洋手拭。

サチャユイ、サンチャウイ、サンチエユイ 先立つ——先になつて歩む。

サチャイン^ワ ショーリ お先にお歩きなさい、どうぞお先に。

サチユイ 咲く。又枝が出ること。「ユダ サチユイ」といふ。

サテイ いざ——さあ。動作を始める時に云ふ語。

サテイ・サテイ さてく——標準語に同じ。

サティム(老) さても。深く感動した時にいふ語。

サデイ さで網。

サディッケー さで網にて魚を獲る事。さで使ひの義。

サッカチ いばら——茨。轉じて茨の如く人にひつ掛つて來る意地の悪い人間。子供が、盛んにむづかる

にも「サッカチ・ナユイ」といふ。

サツカビ 慟哭した後起るしやつくりの如き息づかひ。

サツトウ ふだん——常の日。スツトウに對する語で、何でもない時といふの意に用ひる。サマに似てるが同意ではない。

サトウイビ 屁の隠語。里蝦の義といふ。

サナーツシ 黙つて——沈黙して。

サナーツシ ウイ 黙つて、をる。

サナーツシュリ 黙つて居れ。語勢を強くすれば黙れと叱る語になる。

サナギ(小野) 越中ふんどし。トウサギーに同じ。

サニシ 舊曆六月の中旬に三日間程吹く強い北風。

サニ・トウランバ(小野) 食べ度くもないが、箸でもつけてみようといふ時などに用ひる語。トウランバは

取らう。

サネイ 核——果實の。又人骨の別稱。

サネイ・トウユイ 改葬する。假埋葬したものを洗骨して先祖代々の墓に移すにいふ。「シユラクナシユ

イ」に同じ。

サヌチー 忍び足——拔足さし足して歩くこと。

サネーシ(老) 天と海との合して見える處。例「サネーシから雨が黒んで來た、聽て降るに違ひない」。

サネーシャー 祝祭時の料理人、又は接待人。オーレーサーに同じ。

サバ 鱭。さべの變化か。

サバ 草履。

サバクイ、サバクリ(上嘉) 事件——事。

ヌー サバクイ ヨ 何事、だ。

ヤツケーナ サバクイ チャ 困つた、事、だ。

チュン・サバクイ シルナ 他人事——人事にかまらな。

サバクユイ 裁く、又は面倒を見る。

サバクララン 事が混み入つて手が付けられない。

サバチ 櫛。クシ参照。

サバチユイ 梳る。

サバネイ 伊タスキー即ち板附船の別名。

サビ 錆。

アーッサビ 鐵類の錆。赤錆の義。

オーッサビ 銅などの錆。青錆の義。

サビ・ネーラン 落着きがない——人の性質の。

サビナサー 粗忽者。

サベ 作物に群りつく白い害虫。

サベ・チト 舊曆四月に行ふ害虫拂ひの行事。現今では全く廢れてゐるが、二十年程前は各戸から一

人づゝ集つて、種々の鳴物を鳴らし乍ら、田畠の間を巡り、これで害虫を追ふとなし、後に最も害虫の多く着いてゐる甘蔗の葉を數葉取つて海に流した。午後よりは豊年を祝ふ意味の酒宴が催された。チトは祈禱の義。

サマ ふだん——常の日。この語はウンミに對していふ語で、琉球語では醒めてゐる時、即ち酒を呑まな

サマ・ドウラ しらふ、——酔つた機嫌に對して酔つてゐない時の顔、又その氣持。例「サマドウラで

歌を歌へといふのは無理だ」。

サマユイ 冷える——熱いものが冷たくなるに言ふ。湯がさめる等。

サマシユイ 冷やす。

サミユイ さめる。

ミー サミユイ 目(が)、さめる。

イー サミユイ 酔(が)、さめる。

サムイー よばひ。

サ・ヤミ 瘡。サアンベともいふ。又よく瘡を病む人をサヤミヤといふ。

サイ(阿) 分業的に仕事をする場合、一方が他方に追はれること、つまり仕事の溜ること。

チバテイ サイ シラルナ ヨー 精出して、他に追はれるな、よ。

サユイ、サウイ(阿) 茹でこぼす——茹汁を去る。

サラ 裏——普通着物の裏などにいふ。ワラ即ち表に對する語で、別に廣い意味のウラといふ語がある。

ワラ参照。

ハディッサラ 風下。ハディ・ワラ即ち風上に對す。

サラ 皿

ナーダラ 中皿の義。直径四寸程の陶器の皿。

クダラ 小皿。右の小なるもの。

サラ・ニ 副詞。更々——更に。

アツサ クトー サラニ ネーン そんな、事は、更々、ない。

サリムン 味噌——漁夫が海上で用ひる忌言葉。腐れ物の義。

サワイ モスリン。鹿兒島宮崎でもサワイ。

サワイ・ムン 人畜に崇る死靈惡神。又はその祟り。障り物の義。カーイムンに同じ。

サワユイ 障る——邪魔する。又は死靈惡神などが人畜に祟る。

サンカ、サンカン 神又は死の國の者が人界を呼ぶ語といふ。

サンカヌ・ムン 神や亡者が人間の事をかく言ふと。サンカの者の義。

サンガーター 爪先立——足の爪先で立つこと。

サンガンサンチ 舊曆三月三日の女の節供。家毎に田芋餅、或はフツ(蓬)餅を作り、生後始めてこの日

を迎へる女兒のある家では、近親集つて祝をなす。此の日海の物を鍋に入れなければ髻になるとい

ふので、人々好んで汐干狩をする。

サンキ、サーンキ 木竹の繊維のけば立つてよく手に刺さるもの。例、「松板は古くなるとサンキが出て

困る」。

サンギ、サンギシ 竹馬。鹿兒島サンギシ。

サンクルメー 昔鹿兒島へ航する船が、灣口の開開嶽が見えると、喜びの餘り船人集つて初めて上鹿する

客を繩で縛し、帆柱の上迄吊り上げて騒いだその行事にいふと。鹿兒島ではサンコマイと言ふ。

サンゲン、サンゲン・ユエー 祝ひ又は被ひの意味で行ふ儀式で、三組の料理の膳を拵へ盃を交はすこ

とになつてゐる。このいはひは出産、新築、船祝等の外、病人が續いたり其他不吉の豫兆などがあ

つた場合、占者巫女等の言に従つて行ふ事もある。

サンティン 地の底にあるといふ世界。その世界の人間は身體が矮少で、茄子を挽ぐにも梯子を掛けると

いふ説話がある。

サントウク 金槌。釘拔、叩き、蓋明けの三つを備へたものにいふ。三徳の義であらう。

サントウチャー(老) 鳥目。申時から目の見えぬ者の義か。トウイミとも言ふ。

サンデーユイ 沙汰する。心探りする。消息を訊く。

サンデー シュイ 右に同じ。

ワン サンデーシシ ウタン チ ウモーチ タボーリ ヨー 私が、沙汰、して、ゐたと、お傳へ、

下さい、よ。

ザンナムン(小野)、チャンナムン(小野) 他人の嘲笑や怒りに無關心に、どんな事でもしやべる輕口な者。

不作法の事をチャンナカ・フーといふ事もある。

サンニユイ 探る。手探るといふ意で、穴の中を探る、暗闇の中を手探りして歩く等に用ひる。

サンニヤー シュイ あちらこちらを手探り廻す。

サンニョー 計算——算用。サンミンに同じ。

サンネインチ 三年忌。

サンバラ 箕——直径二尺程の浅いもの。

サンパンチリ ちり／＼ばら／＼。

サンペートウキ 正月の料理の一。大根を色々の花の形に切り、酢に漬けたもの。三盃酢漬の意か。

サンミン 計算。サンニョーに同じ。

[シ]

シ(老) 助詞。で。チ及びセンに同じ。

ティー シ カミ 手、で、掴め。

シ 助詞。して。仕事をしてゐる等のして。

ハナーサシ アスビ 仲良く、して、遊ぶ。

シ(老) 癖。クシに同じ。

シ(阿)、ピ 破傷風。それに罹ることを「シ イユイ」といふ。シが入るの意である。

シ 大なる岩石。

シ(兒)、シーシー(兒) 小便。シバイ参照。

シ 眞珠貝に似た珠を結ばない小さい貝の名。食用にする。

シーチャー 米や豆などの發育不完全で、實の入らないもの。轉じて體驅の矮小なる者。又小さい子供な

どを貶して斯くいふ事がある。

シーネインササイ 生臭い——生魚や蒜等の臭ひにいふ。

シユイ 噎える。

シユイ 物と物とを一緒にする。添へるの義か。例へば、「古い米と新米とシユイ(一緒にして)はいけない」。

シラー 動物の胎衣。シラ参照。

シラ・イユイ 病癖がつく。例へば老人がよく老病を患ふ癖のつくなどの場合で、それにはウイディーラともいふ。古いシラの義である。イユイは入る。

シガラ(阿)、ピガラ 斜視——やぶにらみ。

シカラサイ(阿) 八釜しい、うるさい。

シカラシカ カンチャー チャ(阿) 八釜しい、子供達、だ。

シガラサイ 八釜しい(小野)。忙しい(阿)。

シキ 時化——しけ。

シキユイ 時化する——しける。

シク 三月三日、五月五日の節句。又正月中に若い男女や少年達が費用を出し合つて飲食するにもいふ。

シク、ク 一種の接尾語。形容詞及び動詞について、一が他より優れてゐる意を表はす。但しシクは形容

詞に、クは動詞に付く

ヤッキー トウ イナンマー トー タンガ ハナシク ヨ。イナンマー ヤ ハナシク 兄さん、と、
姉さん、とは、誰が、より可愛い、か。姉さん、は、より可愛い。

インガー トウ ウマー デイン ガ パシユンク カ。インガ ヤ パシユンク チャロ 犬、と、
馬は、何れが、より走る、だらうか。犬、は、より走る、だらう。

シク 接尾語。丈。

ムチューシン・シク ムッチ ミ 持てる丈、持つて、行け。

シケー 人が死ぬ前に、恰も葬禮の如き行列が見られる事があるといふ。これは既に死んだ者が迎へに来たもので、迎へられた者は近日中に死ぬといふ。その行列をいふ。

シコーユイ、シコーウイ(阿) 仕掛をする——拵へをする。例へば馬の鞍を組立てる、釣道具の拵へをする等。又費用を調へるの意にも用ひる事がある。

シシ 肉。ミーに同じ。

シシ、ヤマンシシ 猪。又は猪の如く物事に動じない人。但し此の島には猪は棲息しない。多くの人はその實物を見た事もない。

シシカユイ、シシカウイ(阿) 急ぐ——焦せる。

シシカテイ バッカチャ あわて、しくじつた。然し「シシカリ ヨー」とすれば急いでやれの意となる。

シシビチ 身慄ひ。

シシビチ ム シラン びくともしない。

シシヤク 幅の広い筵、穀物を扱ふに用ひるもの。幅が四尺あるのでさういふ。

シソー 紫蘇。

シタ(老) 蓋。タに同じ。

シダ 年長者——年上。例「太郎と次郎は誰がシダか」。

シダカタ 年長者——先輩。

シダ・トウヂー 夫より年上の妻。

シタウビ 禪。マーシに同じ。

シタダカ どつさり。例「蜜柑がシタダカなつてゐる」。

シタヂ 物を煮る爲に調味した汁。

シタネー 嫌な——始末の悪い——困つた。

シタネー インカ チャ 始末の悪い、男、だ。——困つた男だ。

シダマ 仕事。シグトウともいふ。

シダマッチー 怠け者、仕事を嫌がつてなまける者。

シタムン 腰巻、上品に云つた語。シチマーサー参照。

シチ 桶や箱などの底板。又は敷居。

シチ 難産して死んだ女の幽霊といふ。夜間に黒煙の圓柱のやうなものゝ地と天をつないで見えるといはれる。

シチウシ、シチケンシ(阿) 年中行事の一。舊曆八月の最初の丁の日、即ちシチャミを行ふ日のことを云ふ。シチャミ参照。

シチネインチ 七年忌。

シチマーサー 腰巻。カームに同じ。

シチャ、ピチャ 皺。——額の皺、着物の皺等。

シチャミ 舊曆八月の初の丁の日、即ちシチウシに子供のある家では、山の泉又は家の井戸の前で、子供に飯つづをのせて、薄の葉等で清水を子供の頭にふりかける。その行事をいふ。シチャミを行ふ年齢、及びその方法は部落に依り相違がある。

シッカーユイ、ピッカーユイ 引掛かる。

シッケーユイ(阿) 引掛ける。又つむじを曲げる——不服を言つて。

シツカイトウ しつかりと。

シツカンミユイ とつ摺へる。

シツキユイ、シツチユイ 喧嘩する。

シツチカラケー すつたもんだ——悶着の様。

シツキユイ 躡ける。手馴らす。壁土を捏ねる。又田を耕して稻を植ゑる拵へをする。

シツタユイ、シツタウイ(阿) 滴る。又滴る程に濡れる——しほたる。

シツタイ・チヌー びしょ濡れの着物。

シツタイ・ムン 船上の忌言葉で焼酎の事。滴り物の義。

シツチャー 背負籠の緒、又は馬の腹帯に用ひる、小さい紐を合せて幅廣に編んだもの。

シツチュイ 沈む。

シツチヨ 坊さん。説教の義。

シツパネー 水のとばかり。

シトウ、ピトウ 櫃。

シトウ 季節、又は時分。ヂシトウともいふ。

シトウ・ナサー 季節外れ、又は時間外。ナサーは無し。

シドウ 八月踊の行列の先頭に立つて踊る音頭取で、老練な女がこれを勤める。

シドウ 馬に退けと命ずる語。

シドウチュイ 退く——後方へ身を引く。

マイ・シドウチャー 後ずさり。

シトウフ、ピトウフ 煙突。

シデー 物を取片付ける事、置場々々へ一々直す事。

シデーユイ 片付ける。

シナ、シナムン 品物。

シナイ、ピヤギ(小野) 背負籠。テイルに同じ。

シナイ、シナイ(阿・老) 白髪。イは鼻音化する。

シニユイ、シユイ(阿) 死ぬ。マリーの條参照。

シヌガン、シヌガラン しのげない——追付かない——やり切れない。例「いくら稼いでも子供が多くて

幕しはシヌガン」。

シバ 芝。サーサー参照。

シバイ 小便。

シバイ チャンビユイ 寝小便する。

シバイー 小便たれ小僧。——子供などを貶していふ。

シバイチャンチャー(阿) とかけ。

シバサシー シチウンミより五日目に行ふ折目の一つ。薄の葉を切り、満潮の時を計つて家の軒の四隅四
平に挿し、餅を作つて近所近親に配り合ふ。夜に入ると子供等が家々を廻り、歌舞して餅を貰ふ風
習がある。尙部落に依つては此の日ウヤンコーを行ふ。

シバナ 海岸の岩礁の上。干端の意か。

シバヤ 芝居。

シビ 御幣。

シブ 澁。柿の澁又は山芭蕉の根から出る濃い液汁にいふ。後者は三味線を紙張りするに用ひる。

シプイ 冬瓜。トীগに同じ。

シプク 修繕——修復の義。シプーともいふ。

シプサイ 澁い。例へば、廻轉の圓滑でないこと、又土などがねばり強い事等にいふ。

シプツサー 力芝。

シマ 島。國。村。郷里。

シマディー 村内——部落内。

シマチマ 島々、村々、部落々々。

シマユミタ 喜界島語。ユミタは言語。

チヌヌシマ 他部落。人のシマの義。

シマツチュ 喜界人、又は自分の部落の人。

チヌヌシマツチュ 他部落の人。

シマ 相撲。

シマーシユイ いぢめる——懲らす。

シマーブー 妖怪の一種。夜間人の行手に突然現れて通行を妨げる、枝を擡げた木のやうな怪物といふ。

シマナグリ 他部落で遊んで(歌舞して)、その部落に執着を持つ事を、「シマナグリ ウトウシユイ」と言

ふ。ウトウシユイは落す。

シマドゥ 仕末。

シマドゥ イカン 仕末に困る——それ程澤山ある場合のみに用ひる。

シミ 目印、自分の所有物等に付ける目印。例へば海の寄木、寄石等を拾つた場合運搬するまでの間藁繩などを結んで、所有主のある表示とする。

シミヂ しめじ茸。

シミリチュイ 濕る。

シム(花) 下。サ参照。

シムダチ 冬期に降る寒雨。

シムバラ 消渴。

シヤ、サ(阿)、キャ(小野) 接頭語。如何——。イカが、イキャになりキャ、シヤに變つたものであらう。ハ

ンの條参照。

シャーデー 如何程の高さ。

シャートウー 如何程の遠さ。

キャナガ(小野)、シャッチャ 如何程の長さ。

シャヒダ 如何程の大きさ。

シャンサ 幾許——いくら。

シャッシ シュス ヨ どう、するの、か。

シャッサン ムン カ どんな、物、だらう。

シャー ヨ どうだ——どんなものだ。

シャー シロー カ どうしよう——困つた。

シャーム ネン どうもない——差支へない。

シャーナラ バン どうならうと。

シャー、サー(阿) 接尾語。體言に付いて「する人」といふ意を表はす。ヤー参照。

ウタ・シャー 歌ふ人。又は歌の名人。

イス・シャー 漁する人、又は漁の上手な人。

シャク 癩——病名。

シャク・ワター 差込み——胃痛。

シン・シャク 疝癪、慢性胃腸病などにもいふ事がある。

シャク・ヌ・ネーン(小野) 足らない——うす馬鹿にいふ。尺が無いの義。

シャヌマ、サルマ(阿) 茶の間。座敷の次にある室で、玄關は普通こゝに付ける。サンヂャクマーともいふ。

シャファ(歌言) 此の世。娑婆の義。「死ぎば戻らりにや土ぬ身になとて、二度とこのシャファ見りぬなゆんにや」といふ歌がある。

シャムイ、サムイ(阿) 神官。社守の義。阿傳では神樂のことを斯く云ひ、神官にはサムイサー即ち神樂をする人と云つてゐる。

シュー、スー(阿) 海水——潮。潮流。

シュー・ミチ 満ち潮。その動詞は「シュー ミチユイ」。

シュー・フィー 潮干——退潮。その動詞は「シュー ビユイ」。

シュー ファナシュイ 海水浴などの後水を浴びて身體の鹽氣を去る。

シュー ヌ ペーサイ 潮流が早い。

シューイ、スーイ(阿) 潮煙。大時化の際は濃霧の様に島を包む事がある。

シューイ 来る。自分が行くにもいふ。ウモユイ参照。

シューガーイ 船舶が風波を避け或は順風を待つて寄泊する事。又轉じて道草を食ふ事。潮がりの義。

シューキ、スーキ(阿) 料理。

サヂューキ ちやうけ——茶請。

セーシシューキ 酒の肴。

シューダ、シューダナ(早)、スーダ(阿) 變な——妙な。鹿兒島スダ。

シューダ クトウ ム アエー シュル 妙な事、もありは、する。——妙な事もあるものだ。

シューター、スーター(阿) 長者を敬つて云ふ語。旦那様といふに近い。先生役人醫者等にいふ。

シュー 長者を敬つてその名の下に附する語。例へば福良といふ人をブクシ・シューとする。

シュートウ、スートウ(阿) 舅又は姑。

シュートウ・ビレー 姑舅にへり下り仕へる事。この語には嫁の姑舅に對する氣苦勞の情が含まれてゐ

る。例「若い嫁だが中々よくシュートウビレーしてゐる」。ピラユイ参照。

シュートウチ 潮と月の關係に依つて、漁の時期と時間は定つてをり、例へばシュートウチを知らずに釣

は出来ない等と用ひる。

シューファマ、スーファマ(阿) 揚濱式の沼井取法に依る鹽濱。海水は桶にて運搬し、沼井中の砂に注ぎか

け、その砂を濱に撒いて乾し、それを數度繰返す。但し製鹽は現在は行はれない。

シューミー、スーミー(阿) 折檻。

シューミー シュイ 折檻する、又はいぢめる。

シューミチユイ、スーミチユイ(阿) 傷などが鹽で刺戟する様に痛むに言ふ。

シューミチ・ヤミー 右の様な痛み。

シューイ、スーイ(阿) する——爲る。尙左の如き特殊な使ひ方もある。

ヤー シュイ 屋根(を)、葺く。家をするの義。

セー シュイ 酒を醸造する。

・サ シュイ 田畑の草を取る——除草する。

パル シュイ 耕作する。

・シューイ、スーイ(阿) しつゝある——してゐる。「・シウイ」の約つたもの。

ウタツシュイ 歌つてゐる——歌をしてゐる。

シューイチ、スーイチ(阿) 潮流。潮行の義か。

シユクシヨ、スクソー(阿) 懲りて二度とすまじと思ふ氣持をあらはす語。食傷の義か。

アンクミ トウ セー ヌニエー スクソー チャ あ、連中、と、酒を飲む事は、懲々、ぢや。

——もう懲りた。

シユクデー、スクデー(阿) 机。

シユシナ、シユシラ、ソシナ 愛人、——歌にのみ用ひられてゐる。

シユタラ・ベ、スタラ・ベ(阿) 梅雨に入る前に吹く濕氣の多い南風。

シユタルサイ、スタルサイ(阿) しめつばい。例「梅雨時は家の中までシユタルサ(濕つぼくて)、氣持が

悪ス」。

シユデー、ステ(阿) 世帯。

シユネー、スネ(阿) 潮鳴。

シユバラ・ガミ 潮原神の義か。ネイヤンカミ即ち龍宮の神だと言ひ、又海の悪神ともいふ。

シユバレー、スバレー(阿) 葬式に参加した者が海水、又は鹽を溶かした水で手や口を滌ぐこと。潮被ひ。

シユラ、スラ(阿)、キュラ(小野) 接頭語。美——。

シユラ・ムン 美人。

シユラ・ヤ 立派な家居。

シユラク・ナシユイ 改葬する。美しくするの義。サネイ・トゥユイと同じ。

シユラサイ、スラサイ(阿)、キュラサイ(小野) 美しい。専ら美麗なるに言ふ。

シユラサ・ムチ かざり——裝飾。

シユル、スル(阿) 棕櫚。

シヨ、ソー(阿) 經文。呪文。

シヨ、ソー(阿) 眞實。

シヨシララン 本當とは思はれない。

シヨガトウ、シヨグワツ(小野)、ソーガトウ(阿) 一月の月。シヨガン・ドゥチともいふ。

シヨガトウ、シヨグワツ(小野)、ソーワチ(阿) お正月。

シヨガン・デー、ソーワン・デー(阿) 分家した者又は嫁に行つた者が、正月元日に親の家へ酒食を

携へて禮に行く儀。正月禮の義。

シヨ・クユイ 子供が成長して、物心がつくやうになる。「ムヌ ウムユイ」ともいふ。

シヨ・クワン 世事に疎い者や、年の割合に物事を知らない者などにいふ。幼稚だといふやうな意。

シヨデー、ソーデー(阿)、キョデー(小野) きやうだい——兄弟姉妹。

シヨデン・チャー 兄弟達。又は極近い親族達。

シヨニチ 死者の葬式のあつた日を毎月斯く言ひ、花香を供する。祥月のシヨニチには立つた日即ち

「タッチャンピ」といふ。

シヨゲイ、ソーゲイ(阿) 肥料としての人糞尿。

シヨ・ヌギタ、ソー・ヌイタ(阿) ひどい目にあつた——難澁した。性が抜けたの義。

ショーパー、ソーパー(阿) 御馳走の相伴。

ショーパー スミテイ タボーリ 相伴、させて、下さい。御馳走の主客でない客が、言ふ言葉。

ショーパー、ソーパー(阿) 表座敷の東南側の入口で、床の正面に當る處。普通の客の出入する處である。

ショーパーヌー、ソーパーヌー(阿) 一升榊——京判。

ショーマンギ、ソーマンニ(阿) 狼狽。例「麥打の最中俄雨に降られてショーマンギした」。

ショーンニヤチ 門から家の中が見えない様にする目かくしの垣。障子垣の義。

ショーンニヤラシー 臺所の一隅に祀る火の神。舊曆九月以降の庚午の日即ちフェウンミに、密柑の葉、

野葡萄、ちから芝の供物を上げてこれを祀る。ヒョーミガナシといふ部落もある。

シラ 人から質問されて知らない時にいふ。さあどんなものだらうに相當する語。

シラ 胎衣。ウワに同じ。

シラス ぢやれ合ひ。例「家の中でシラスすると疊がたまらんぞ」。

シラ・テイバ(老) さうだとも、人の話を強く肯定する語。アニョに同じ。

シラフェー 梅雨後に吹く南風的一种。シラバイと言ふ事もある。白南風の義。

シラフヂョー 産の不淨。産事に關係した者は皆この不淨を持つ。死の不淨と共に最も忌まれ、特にシラ

フヂョーは海へ出る事を忌む。尙産婦とその夫は、ヤシチムンニエー即ち座敷直しの祝ひまでは此の不淨を持つとされる。

シラミ、シナミ 虱。

シラリユイ 申し上げる。イユイの敬語。

ユルシユー シラリテイ タボーリ 宜敷く、申し上げて、下さい。

シリデー 連続して起る波の最後の最も大きなうねり。波は通常七勢ナナセと云つて、七回續けて押寄せ、次に

起る迄暫く休止するといふ。尻勢の義。

シル 代——代價。デーに同じ。

シル 汁、——液汁又はお露。ウシムン参照。

シルクチャーマー 薄あかけ馬。白いコーチャー即ち白みが、つた赤毛馬の義。コーラー参照。

シルフ 稲の白穂。

シルフ、アカフ 傳説に太陽の糞と謂はれるもの、初めはやはらかくところ／＼してゐるが、太陽の上る頃

になると堅くなり地下三尺の深さに沈む。和かい間に金属を入れるとその金属が黄金になると言ひ、又斬られた首をも接ぐといふ。その白いものをシルフ、赤いものをアカフと言ひ、シルフ、アカフを鯨が食つた糞をクイヤンフーと言ふと。

シルマー 白毛馬。

シルンドウイ 白い鳥の意であるが、白い海鳥のみ云ふ。

シレイ 平然として知らぬ顔してゐる様にいふ。鹿兒島シレイ。例「何と言はれてもシレイして(そしら

ぬ顔して)ゐる」——此の場合は太々しくといふ意がある。

シワ 心配。シンバイともいふ。

シワドリー 非常に心配し続ける事。

シワナシ 安心——安全。心配なしの義。例「葺替が済んで、大風が来てもシワナシぢや」。

シワキ、シーウエー 田畑を貸して耕作せしめ收穫は地主と耕作人が平等に分配する制。

シンケー 氣狂ひ。プリムンともいふ。

シンス・ダナ 佛壇。ウヤフヂ・ダナとも云ふ。

シンチク 春菊。

シンチュ 死人。

シンチン、シンチャ 便所——雪隠。ユーデン参照。

シンデー 親類。パローヂに同じ。

シンドウ 船頭。

ルク・シンドウ 船頭多くして船山に上るの意に用ひる。ルクニン・シンドウとも言ふ。六船頭の

義。

シンドー 面倒。

シンドー シンソールナ 御面倒しなさるな——どうぞお構ひなく。

シンビユイ 萎む。又は縮む。

シンビユイ、シンチュイ 絞る。又は乳などを吸ふ——しゃぶる。

シンブヂョー 死不浄。死事に關係した者は皆この不浄を持つ。この不浄を持つ者は海に出て果報がある

といふ。クルブヂョーともいふ。

シンムトウ 葱。鹿兒島センモト。

[ス]

ス(小野) 接尾語。人又は人稱代名詞に付いてその所有なる意を表はす語。

フレー タース ヨ これは、誰の物か。タースはタームンともする。

ウレー タロース チャ それは、太郎の物だ。

ス 動詞形容詞について、それを名詞化する。行くのだ、大きいのは等のものに相當する。

フデイ デ ヌー シュス ヨ 筆で、何(を)、するの、だ。

デー カチユス チャ 字(を)、書くの、だ。

ナガサソー ワームン ドー 長いのは、私の物、だ。ナガサソーは、ナガサスに、はに相當する助詞

ヤが融合して出來たもの。

ス 蕪。語頭のクの脱落したもの。クスともいふ。イチュー参照。

スファイヤー 下痢。

ス クライ 糞食らへ、罵詈する語。

スーニー 小麦を搗かずに、炊いたもの。昔祝女が儀式の時神に供したといふ。

スーブチ、スプキ(小野) 口笛。

スイ、クスイ 薬、又は滋養。

スイ ヌミユイ 薬(を)、飲む。——服薬する。

スイ シュイ 滋養、する。——滋養食物を食ふ事。

スイカ、シートカ(老) 西瓜。

スイダン 戸障子の走る敷居。

スギ 杉。

タチ・スギ 真直に生長する種の杉。

ボーイ・スギ 匍ひ杉。

スキー 貼用の糊。着物の糊にはヌイと云ふ。そつくいの義か。

スキン(阿) 世間。 世間に出て人と交際しない事にいふ。世間しないの義。

スク 底。 スクミュイ、スクニユイ(阿) 潜む——小さくなつてうづくまる。例へば「寒いので蒲團の中にもぐり込

む」、「鶏が床下に潜んで出て来ない」等の場合に用ひる。

スグリユイ、スンギユイ 物が尻の方へ急に小さくなつてゐるに云ふ。

マイ・スンガー 尻の小さい人、男にも女にもいふ。

スス 着物の裾。

スス 足——身體の裾の意か。例「ススが利かないので相撲が弱い」。

ススイ(阿) 曲つたものが真直に伸びる。又長くなる——身體を伸ばして楽になる。古語をす。

スシ・ファターユイ 不寐に寝そべつて長くなる。

スサシュイ 他動詞。曲つたものを真直に伸ばす。

ススビ 裾邊——海岸寄りの場所。又山の手の部落に對して海邊の部落。

スソー 粗末。例「物をスソーしてはいけない」、「親をスソーする人は決して良い事はない」。

スタイ 簾。

スタサイ 涼しい。

スタミユイ、スタニユイ(阿) 涼む。

スタユイ、スタウイ(阿) 垂れる——ぶら下る。例へば「前髪が眼の上へ垂れる」、「庭木の枝が軒下へ垂

れて来て家の中が暗くなる」等と用ひる。 ナーエー・スタエー 瓜などが無數にぶら下つてゐる様。なりつ下りつと云ふ様な云ひ廻し。

スチ 鋤。 スチユイ 鋤く。又梳く事にもいふ。

スチ 挿木の苗。普通甘蔗の苗にいふ。

スチ 筋—筋肉。血管。線。血統などにいふ。

スチ 形式名詞。こと。

イチユン スヂ シロ 行く、こと(に)、しろう。「イチユン ナツシ シロ」ともいふ。

スチナラン、スチララン くだらない。又は色々な。例「スチナラン遊びするより庭でも掃け(子供等に

言ふ語)」、「旅からスチナラン道具を買つて歸つた」。

スチャ(老) 人類—廣く人間を指す。

スデイ 袖。

ティップー・スデイー 筒袖。鹿兒島テッポソデ。

ナガ・スデイ 長袖—振袖。

ステイター、トゥテイダー(阿) 蘇鐵。

スデイユイ 脱皮する—蟬や蟹など。又は孵化する。

スデイ・ガニー 脱皮したばかりの蟹。

スツチユイ、スンチユイ(花) 退く—傍又は後へ身を退ける。ウツスツチユイ参照。

スツカシユイ 右の他動詞。退ける。

スツトウ(阿) 不意。サツトウに對する語。

スツトウ ヌ ドウチ いざといふ時—非常時。

スツトウ ヌ ユーヂュ 不意の用件。

スツバイ 皆—全部。スフアツトウに同じ。

ストウ 外—内に對し。又は屋外。

ストウリブタ、ステイブタ 祝宴の折、口取肴などを盛るに用ひる長方形の盆。又はそれに盛つた料理。

國語すどりぶた。

スナ 砂。

スナウー 砂原又は砂地。砂生の義か。

スネイ 足の鄙語。脛。

スネイ 海底の瀬。

スネイサイ 島の土が濕つてしぶい。

スネイサ ケー トウーラン しぶくて、鉄(が)、通らない。

スネイン(阿) 住み處、—定つた住所でなく一時的の場合。例「隣の鶏は毎日うちへ来てスネインしてゐ

る」。

スバ 舌。鹿兒島スバ。

スバツチャー 舌の廻らぬ者にいふ語。舌切れの義。さうした人の言葉を、スバツチャー・ユミターと

スバ。

マーシン・スバー 禪の前方に垂れてゐる部分。禪の舌の義。

スバ、スバー 側。

スバセー 三つ口——鬼唇。ハナサカーともいふ。

スファットウ 全部。ヒンニャに同じ。

スビー 子安貝。

スピチュイ 引きずる。鹿兒島ソビク。

スプミ 鶏が卵を生むべく巢を作ること。

スプミユイ、スプニユイ(阿) 窄む。

ミイ・スプー 目のすぼめる者。

スミ 墨。

スミ ナラユイ(老) 學問する。

スミツチエー すみちがひ、——四角形の對角線。例「この箱は、スミツチエーに板を打付けなければくらくする」。

スミユイ 染める。

スミムン 染物。

スミユイ、スニユイ(阿) 潛る——もぐる。又相撲のとき相手の胸の中に首を突込む。

ムイ スミユイ 水中にもぐる。

スマシ・バイ くける事。潛らせ針の義。

スラ 血統。

セー・ヌミヤール・スラー 酒飲みの血筋。

スラ・フアラ 血統。

スラ 草木の先端、又は事の結末。

ネイスラ 草木の根と先、又は事の始終。例「ネイスラ語つてみなければ分らんが——」。

スラフ 手指の先が腫れて膿を持つ悪性の病。

スルクニ、スルクイ(阿) 搗粉木。阿傳ではイは鼻音化する。

スルバチ 搗鉢。

スロー 嘘——誤魔化し。

スロー・ムン 嘘つき、又剽輕者をいふ事もある。

スン 損。マイの條参照。

スンニユイ 鞭や繩のやうなもので撲る。又は薬をすぐる。

[セ]

セー 焼酎。神前に供へる酒には、ウミキといふ。

セー・ヌミヤール 酒飲み——よく飲む人。

セー 咳。又は咳拂ひ。

セー、セーター(花)、セーター(阿)、セーブ(早) 蝦蛄、海水に棲むものと淡水に棲むものとある。

食用にするが、多く魚の餌にする。タナヤ参照。

セー 助詞。さへ。

ハデイ セーフカンバ イーティンキ チャ 風、さへ、吹かなければ、良い、天気、だ。

セー 勢——力。波のうねり——波の山。又、波を数へる語。

セーチリユイ 勢力(が)、盡きる。「セーヂリ シュイ」とも言ふ。

セーウリユイ 波が折れる——巻き返す。

ナナ・セー 七勢。波は通常續け様に七つ折れ、その後は暫く起らないといふ。

セーク 細工、又は大工。

セーク・シャ 細工人、又は大工。

セーフ 年末の贈答品。旅からの土産の贈物などにもいふ事あり。歳暮の義。

セー・フデイ、サイ・フデイ 雷鳴を伴はない稲光。これがあると雨が近いといふ。

セーベ 世話。例へば「子供のセーベで朝の間は野良へ出られん」など云ふ場合に用ひる語。

ドウ・セーベ 自分の身の廻りのしまり。例「ドウセーベも出来ない者が、人の事をいふな」。

セーラ 御免下さい。訪問の時のいふ語。参りませうの意。

セーラ、シェーラ 知りません——どんなものでせうか。シラの敬語。

セン(上蓋) 助詞。で。デに同じ。

[ソ]

ソ 動物を追拂ふ語。シュー又はシーともいふ。萬葉集に追馬と書いてソと讀ませてある。

ソー(小野)、ショー 恰も——そつくり。ガツツイ参照。

ソーニチ ウイ(小野) 全く、似て、ゐる。

ソー(小野) 助詞。軽い命令を表はす。

イヂクン ソー 行つて来たらどうだ。

ソー 竿。

ソー・デー 竿竹。

ソーイ、ソーリ(蓋) さおり。年中行事の一で、舊曆四月八日に麥飯を炊いて食ふ。現在では殆んど廢れて行はれない。

ソース 礪臼。

ソーヂン・ヂュイ(阿) 精進料理。盆の十三、十四の兩日は先祖に精進料理を供する。十五日即ち送る日になると、ソーヂン・ウトウシ(精進落し)とて、生魚肉を供へてもよいとされる。

ソープ 竹を細かく割つて編んだ一種の筧。

イットウ・ドービー 右の一斗入のもので、穀物を扱ふに用ひる。

ソーピンカー 右の小なるもので甘薯を入れて食するに用ひる。

ソユイ、ソウウイ(阿) 連れる、引取る等の意がある。

・カ[△] ソユイ 子供を守る。

トウヂ ソユイ 妻を迎へる。トウヂの條参照。

ソリー 葬式。

ソワ(鬼) 美衣。

[タ]

ター 田。

タネイ・ダー 種田。

ネー・ダー 苗代田。ナリッシュダーとも言ふ。

ターゲトウ、タームトウ 寢言。たは言の義か。

ターグトウ ユミユイ 寢言をいふ。ユミユイはしやべゐる。

ターサイ、タカサイ 高い。タカサイは新しい語。

ターサ・フィチャサー、ターサ・シラサー(阿) たかひく——高いものと低いものと不均合なのにいふ。

ターサ 連用形。高く。

タカサ(歌言) 歌ではこの形を高くといふ連體形に用ひるのが通則である。普通はターサンといふ。

タカミ 高い場所——平地などに比して。

タカフアナ 高い尖端。

タートウブシ 立膝をして坐る事。トウブシ参照。

ターナチ 犬が夜間高聲に泣く事。凶兆とされる。

タイヂ 垂れ乳——乳房の垂れたもの。タイヂ・メラビとすれば、乳房の垂れた乙女の事で、歌では醜女の代名詞に用ひられてゐる。タマヂ参照。

タカ 地所。高の義。

タカ・ファイト 舊藩時代の地割制度下に於ける土地配當。

タカ 鷹。

タカタロー 節折目シチウミの曉方東の空に現れる雲で、七つの笄を差し木履下駄振袖姿の美しい乙女の形になるといふ(阿)。或る部落では入道雲の意に用ひてゐる。

タカミ、タユ(早) 目高——丁斑魚。

タカラ、タカラ・ムン 寶物。

タク 凧。

タク トウバシユイ 凧をあげる。飛ばせるの義。

タグ(小野) 擧丸。キン△に同じ。

タクムイ(嘉)、タクミユイ(小野)、タクニユイ(阿) 結束して一人の者に争ひかける。

タシユイ 大根などを平たく切る。又反物などを截つ。

タダ たゞ。又はひたすらに。

タダヂムラタ 只、で、貰つた。

タダウンサナ たつた、それだけ、か。

ユミタ シランネー タダ アッキ 話(を)、しないで、さつさと(ひたすら)、歩け。

タタミ 疊。

タチヤチ 刀豆。

タチユイ 炊く、飯や粥などに云ふ。

タチユイ 立つ。

ターチ シリ(兒) たつたく、せよ。

タチユイ 利つ——双物などのよく切れる事。

タタン・ハマー 切れない鎌。

タチ・ワラビ 植物の名。たましだ。

タティ 縦。縦糸。着物のあげ——アギに同じ。又味噌醬油等を造る場合、^{ホチ}糍の事にもタティといふ。又

チ参照。

タツサウイ(阿) 大事にする——重寶にする。

タツサヂ チュエー ミシーム シラン 大事にして、人には、見せも、しない。

タツシャ、タツサ(阿) 達者。ドゥクサイ参照。

タツチュー 墓標、石塔。テイラの條参照。

タツチュイ、タンブイ(嘉) 疊む。

タツトウチ 翌月。立つ月の義。

タツター 重寶——大事。

ウヤー タツター ニ シリョー 親は、大事、に、せよ。

タトウ、タツ(小野) 種類。

タトウ・ワロー 種類違ひ。

タトウイ、タトウイ・グトウ 譬言。ムンヌタトウイ(物の譬)ともいふ。

タトウイ たとへ……どんな事があらうとも、たとへ。

タトウイユイ 譬へる。

タナバタ、タネイバタ 舊曆七月七日の七夕祭。此の日蟲干をする。子供は青竹に色紙や短冊を付けたタ

ナバタを掲げ、海で机などを洗ふ慣はしがある。當日晝頃に降る雨をタナバタ・ナガシアミといふ。

タナヤ、タナガー 蝦蛄の大なる物。食用及び魚の餌に用ひる。手長の義。

タネイ 種。核。

タナッカシ 甘薯の種の改良。——普通のやうに莖を切つて植えず、甘薯をそのまま埋め、それから出

る新芽を更に植ゑる。

タナ・ゴイー 變種、作物の悪化の場合に言ふ。人間にもいふが生れそこなひといふに似てゐる。

タネイ・トウイー 年中行事の一。舊曆十月ママ木の實の赤く熟する頃、麥の種子を庭に蒔き、其の發芽の状態を見る。この日海の小石を拾ひ皿に入れ、海水を注ぎ、家長がその石を嘗める儀がある。夕食には米麥粟等の飯を炊いて食ふ(以上志戸桶部落の例)。他では廢れてあまり行はれない。

タバイ 東。マルチの小なるもの。

タバクン・ブネイ 後頸の下方にある一番突起した骨。

タバシラー 竈の火を掻く棒。

タバユイ 束ねて縛る。

タファンネイブー 瓢箪。

タポーリ 給へ——下さい。クリの敬語。

ハラチ タポーリ 貸して、下さい。

タマガユイ、タマーウイ(阿) 恐れる。たまげる。鹿兒島タマガツ。

タマータ 驚いた——呆れた。

ムンタマーイ 何かに恐れてびく／＼する事。物怖れの義。

タマゲ 卵。フガーニ同じ。

タマクガネイ 愛兒——大事な愛する子。

タマシ 智恵。

タマツキキ(小野)、タマシチチ 利口者。

タマシ 人魂。人の死ぬ前にその魂が怪火となつて出るといはれる。

タマス 分け前——取り前。又は配當。

ワー タマス 私の分——私の分け前。甌島にてワダマスといふ。

タマス ウチユイ 配當する。

タマヂ 圓みのある垂れてゐない乳。玉乳の義。歌ではタマヂ・メラビと云つて、美女の意に用ひてゐる。タイヂ参照。

タマヤ 埋葬した棺の上に据ゑる神殿に擬した板屋、改葬まで一二年の間そのまゝにして置く。靈屋の義。

タミシ ためし——試み。

タミシユイ、タミスイ 試みる。又は狙ひを定める。

タミチ 溜池——用水池。

タミユイ 溜める。

タムユイ 溜まる。又物の保ちのよい事にも云ふ。

タヤ、タリヤ(上嘉) なまこ。

タイ だに。

アー・ダイ 糠の如く小さきだに。

タユイ、タウイ(阿) 滴る。又はだらりとなる。

シル ス タテイ ウイ 汁が滴つて、ゐる。

タルッカ ユータ 非常に酔つた、ぐつたりなる程酔つた。

タユイ、タウイ(阿) たより、便宜。

タユイ ヌ ネーラン たよりが無い——便宜が悪い。作業をするのに其場所がその作業に不適當であ

つたり、物の位置と作業者の關係が悪かつたりする場合。

タウエー ウヤ カイ(阿) たよりは親を使へ。仕事をしてゐる時は、親であつてもたより——便宜の

事はして貰つて良いの意。立つてゐる者は親でも使への意に似てゐる。

タユイ マーシユー たよりを求める、氣をくばる。例「猫が鼠を捕らうとて、頻りにタユイ・マーチ

(便宜の位置を求め姿勢を整へて)ゐる」、「卵買が來たらタユイ・マーチ(通り過ぎさせぬ様注意

して)賣るやうにせよ」。

タリマー、タネイマー(阿) 酒のもろみ。ムルミに同じ。

タリユイ 液體を混ぜる。

タル 誰。この語に敬語はない。

タンガ 誰が。

ター 誰の。

タル アイソエー ヲ ヲ あなたは何方でいらつしやいますか、といふ時に用ひる。

ダンヌムン ヲ 何者だ——何奴だ。

タルチ たる木。

タレー 鹽。パンヂリ参照。

タレーユイ 補ふ——付け加へる。タシユイともいふ。例「三合タレーリバ一升になる」。

タンカ ふざけた事。

タンカ シンナ ふざけるな。

タンキユイ 茶碗などを伏せる。ウトウッキユイに同じ。

タンゲ 桶。

タンゲーユイ 當てにする——頼る。例「田植時の忙しさに人手はタンゲララン」。

タンコー 正面、向ひ——對照的に見て。越後にてタムカイ。

マタンコー 眞正面——眞向ひ。

タンチ 短氣。

タンチエー スンチ(阿) 短氣は、損氣。

タンニヤ 田螺。

タンニユイ(阿) 頼む。

タンニユイ 草などを薙ぐ。

タンミー 植物の名。つゆくさ。

テイダ アーユイ 太陽(が)、上る。

テイダ イユイ 太陽(が)、没する。

テイダ ヤンモーユイ 「テイダ イユイ」の敬語。ヤンモーユイ参照。

テイダ・ティンヂョー 日なた——日の當る所。

テイダ・アミー 照り雨。

テイダ・ガサ

月の周囲を被ふ圓い虹様のもので、其の小なるを雨笠と云ひ、大なるを斯く云ふ。これが現れると天気は良くなる。アミガサ参照。尙太陽の周囲に現れる虹にも斯く云ふが、これは月の場合よりも的確な好天の徴とされる。

テイダ・メーブイ 日なたぼっこ。

テイヂュク、テイヂユウ 手際。例「一日に籠を三つも作るとは立派なテイヂュクだ」。

テイツコー 拳。又は癩病の隠語。

テイドウ・フタ、テイドウ・ワー 種豚。

テナレー 手習。

テイヌギー、テイヌイー(阿) 手拭。イは鼻音化する。サヂに同じ。

テイヌギー マチュイ 鉢巻する。

セイヨー・テイヌギー 西洋手拭。ダンサヂともいふ。

テイマ 手間。

テイマ カミュイ 手間取る。手間を食ふの義。ビマの條参照。

テイマ・ドーリ 手間倒れ——手間が掛るばかりで實の上らないこと。

タイムチ 手持のみやげ物。手持ちの義。

ティ・ムツチャ 手のろい。——手仕事の鈍いといふ。

タイムトウ 箸。パシに同じ。

ティ・ヨーヂョー 民間療法。手養生の義。

ティヨーマヨ 話などする時、手振身振する様にいふ。

テイラ 墓、石塔の立ててある墓にいふ。假埋葬のものを改葬して納める墓である。パカ参照。

テイラ・イシ 墓石。タッチューに同じ。

テイラ・パス 墓場、石塔のある墓場。

テイラシ のろし——烽火。テー参照。

テイル シナイに同じ。

テイルハンニ 麥を蒔く季節の名。野原から籠を負うて歸る時刻に、ブリーといふ星(すばる)が額越し

に山の端に見られると、麥を蒔くに良い季節といふ。テイルは背負籠、ハンニは背負ふの名詞形。ティン、ティントー 天——空。敬つてティントーサマ又はウティントーといふ場合がある。

ティン ヌ トウラ アカン 曇つて空が見えない。天の面が明かないの義。

ティンカン 癩癩。ククトウ参照。

ティンゴ— 手遊び——物を手でいちくること。

ティンゴ— ティー チム(謠) 手遊び、手(を)、切れ。又物などをいちくることを誠めで云つたもの。
ティンチ、ティンキ 天気。晴天の事にもいふ。

ユカ・ティンキ ナエータ 良のお天気になりましたの挨拶。

アチャカチヨ— ティンキ ナユラ 明日へは、晴天(に)、ならう。——明日あたりからはよい天気になるだらう。

ティンチ— 虹。

ティンチャムンカタレ— 巫女と神との會話といひ、又巫女が神の事を語ることともいふ。巫女は人の需めに應じ、その災厄を祓ふ爲に凡ゆる神と會話して、その教へを受けると謂はれる。

ティンチャンカー— 十五歳乃至十七歳になつた女の施す手甲の入墨。七歳乃至九歳の頃に彫つたアディバヌーの上へ、一杯に墨を塗り前の文様を消す爲に彫つたもので、トゥミ・ハドゥチ(止めはづき)又はヘーシ(返し)ともいふ。富裕な者は十三になると右手丈ティンチャンカーを彫り、十五になつて更にムル・ティンチャとて双手にこれを彫つたといふ。但し年齢には例外もあつた由。

ティントー・ムシー— てんとう蟲。鞘翅類に屬する小蟲。

ティントーン・ネッキ— 水平線——天と海との境目。天の際の義。

ティンビヤ、ティンヂャ(阿)— 掌。手のひらの轉形。

ティンチャン・ビダ— 手のひらの大きさ——物の大きさを形容していふ語。

ティンボー、ティンボーガネ— 轉倒する事。多く人がひつくり返るにいふ。

ティンボー— ヘーシユイ— ひつくり返す。

ティンマ— 傳馬船。

[トウ]

トウ— 數詞。十。古くは十一以上を數へるのにトウ—・テイトウ、トウ—・タートウ即ちとう・ひとつ、

とう・ふたつと云ふ様に數へた。

トウ— 戸。ヤドウに同じ。

トウブクル— 戸袋。

トウサイ— 遠い。アン、シャの各條参照。

トウトウ— 鶏を呼ぶ語。

トウトウ(兒)— 鶏。ニューニューに同じ。

トウミヨ—、トウニヨ— 神佛の前に供する燈明。

トウユイ、トウウイ(阿)— 通る。又は試験などに通る。

トウール— 古くは行燈にも云つたが、今では吊燈籠にいふ。

トウイ— 鳥又は鶏。歌言葉では鶏のことをニワトウともいふ。

トゥンガー 鶏の雛。

イチバン・ドワイ 一番鶏。

ニバン・ドワイ 二番鶏。

サンバン・ドワイ 三番鶏。

トワイ・ウタユイ 鶏が関をつくる。

トワイ・ウクラシユイ 鶏鳴時まで夜更しする。鶏を歌はすの義。

トワイ 醤油の表面に浮かぶ白いかび。そのかびの現れる事を「トワイ イユイ(入る)」といふ。

トワイシ、トゥン 砥石。

アラ・トゥ 粗砥。

トウイスキユイ 詰問する。責めつける。例「いくらトウイスキタイム本當の事を云はない」。

トワイ・フォー 取り前。金銭の貸借關係に於ける場合。その反對の拂ひ前をパレー・フォー。

トワイ・ミー 鳥目。とりめ。サントウチャーに同じ。

トゥガ、トゥワ(阿) 科。とが。

トゥワ・ナシ(阿) 爲政者や子供等が悪いことをしても罪に問はれない事。

トゥガ ケーユイ とがめ立てする。科かけるの義。

トゥワン・パドゥシ(阿) 罪のがれ。一時的のつくらひ。パドゥシは外し。

トゥガミユイ、トゥワミユイ 咎める。

トウキ 硯。昔の一種の占者。ムヌシリ(物識り)とも云つた。

トウキ 伽。

トウク 床。とこ。

トウクン・メー 床の前。上座としての。

トウク・バナ 床に活ける花。床に飾る餅。

トウク・ムッチー 鏡餅。床に飾る餅。

トウクー 南京蟲。

トウケー 時計。

トゥシ 年。年度。年齢。

トゥシ・ヌ・バン、トゥッス・ユル(阿) 除夜。

トゥシビ・ユエー 年日祝。年の初、その年が子の年なら、子年生れの者が、最初の子の日にお祝ひする事。年齢は四十九、六十一、七十三、八十五等。

トゥシ・ペー 年輩。年の頃合。

トゥシ・ワッシ 忘年の宴。トゥシワスリともいふ。

トゥヂ 妻。刀自の轉。

アトゥン・トゥヂー 後妻。

サチン・トゥヂー 先妻。

ヤン・トゥヂ 本妻——家の妻の義。

トゥヂ・ソーイ 結婚式のこと云ふものであるが、嫁貰ひといふ程の意で、特に式のことにはグヂンケーといふ。ソーイの條参照。

トゥヂ・ムライ 婚約のしるしに聲の家から嫁の家に酒を持ってゆく儀で、その酒は結納に相當する。

持つて行つた酒は結婚式迄保存して置くので、この儀を行ふことを「トゥヂ ムラユイ」ともいふが「セーアッキユイ」即ち酒を預けるともいふ。ディーの條参照。

トウヂユトウ 夫婦。トウヂウトウ即ち妻夫の義。

トウツスクー 若く見えてゐて實は年食つてゐる者。

トウツチャトウイ 兩膝を曲げて立て、尻を浮かして坐る坐り方。イイはイユイの名詞形。

トウツチエーユイ 振り返る。

トウツチエータイム ミラン 見向きもしない。

トウツビー 馬の跳ね上ることいふ。

トウツビー・マー よく跳ね上る癖の馬。

トウツビー、トウツソー 南瓜。カブチャーに同じ。

トウドウキユイ 届ける。又は尻を持ち込む——子供が朋輩に苛められた時、相手の子供の家にその由を届け出ることなど。

トウドウコーユイ 滞る。

トウドウマユイ、トウドウムユイ、トウドウニユイ(阿) とどまる。

トウドウミユイ とどめる。

トウナイ 例「五月五日に軒に菖蒲を挿すのは何のトウナイだらう」、「それは悪いものを家へ入れないトウナイだ」。

トウニヤ、トウワ(阿) 魚を突くやす。一本トウニヤ、二本トウニヤ等がある。即ち前者は先が一本で後者は二本合はせたもの、三本四本などもある。研矢の義といふ。イチユイ参照。

トウネイ 昔の祝女の祭場、或は祭りを行ふ家。祭場は部落の中央に位し、一隅に掘立小屋を設けて、その中で荘嚴な儀式を行つたといふ。今でもトウネイ・ヤシチ(屋敷)と稱して各部落に跡を残してゐる。

トウネイバイ 何も考へないで、ぼんやり一ヶ所を見るときもなく見てゐる事。

トウネイバイ シランネー ヌヌ ウリ ぼんやり、せず、機(を)、織れ。

トウビ 疾走——例へば舟が飛ぶ様に走る事などいふ。

ヂンブー ニブー ケーテイ ブネー トウビ チャ 順風、に、帆(を)、掛けて、舟、は、疾走、だ。

トウビバネイ 傳説の語る羽衣。又は女の晴衣。

トウビムン 天才——秀才。飛者の義。

トウビユ、トウハンユ 飛の魚。マギーに同じ。

トゥーピンナサイ、トゥヂンナサイ 寂しい——退屈であるといふ程の意。鹿兒島トゼンネ。

トゥベーサ 疾うに。例「自分はトゥベーサから来て待つてゐる」。又先日^ノ意にも用ひる。

トゥマ 赤茅。アーガヤーに同じ。

トゥマイ 港。近時ミナトウともいふ。

トゥマユイ、トゥマウイ(阿) 宿る。又は止る。

トゥミ 紐釦。止めの義。

トゥム 供又は従者。

イシャン・トゥム 醫者を迎へること。これにサーを附してイシャントウム・サーとすれば醫者の供をする人となる。

ウトウム セーラ お供致しませう。人と同道する時相手に謙遜していふ語。

トゥム 鱸——とも。

トゥムレー 法事。——諸忌日に死者を弔ふこと。

トゥメーユイ 探す——サガシユイに同じ。又は拾ふ。古語とめる。

トゥメーヤーシユイ 隅なく探す。諸處方々を探し廻る。

トゥメーイ・ムン 拾ひ物。

トゥヤーシユイ、トゥワースイ(阿) かき集める——寄せ集める。

トゥワーサー 寄せ集め——諸處から集めて一つにしたもの。

トゥユイ、トゥウイ(阿) 取る。

トゥユイ(老)、トゥウイ(阿、老) 目的地に到着する。現今ではトゥチュイといふ。

トゥユブスキ 白雲、——頭に出来る皮膚病の一種。

トゥユム(歌言) 名高い。歌に「いちだ川(泉の名)ぬ水や大和迄トゥユム云々」。連體形はトゥユダ。歌に

「花の灣泊トゥユダ(有名な)中西目云々」。灣、中西目はいづれも地名。

トゥラ・ハミ 大なる甕——口の大きいものにいふ。

トゥラマヤー(老) 虎。普通トゥラといふ。虎猫の義。

トゥラユイ(老) 喧嘩する、シッキユイに同じ。又戯れる。例「子供とトゥラテイ(無駄な戯れをして)半日を浪費した」。

トゥラン 盡きない。

アッチ ム トウラン 歩いても歩いても、盡きない——道が盡きない。

トゥリ 穏かな天氣。

トゥリヌミ 風いだ海。

トゥリユイ 取れる——トゥユイの自動詞形。又は風が風ぐ。

トゥワーサー 一斗入の甕。ワシンの條参照。

トゥンニヤー 年中行事の一。ナンカビーの日に、子供等集つて海邊の一定の場所に行き、海中に飛び込

み、傍の溝に上つて其の禪を絞る。これを競ひ繰返し、其の絞り水が溜つて海中に流れ入る時は豊

年の兆とした。現在は廢れて行はれない。(中里部落)

トウンニユイ 飛び上る——跳ねる。

トウンニャー・ファナイヤー 飛んだり跳ねたり。

トウンニユ・カガミー 鶏冠——とさか。又は鶏頭——花の名。

トウンニユッサー 植物の名。をひしば。鶏の足の義。

[テ]

テ 丈——せい。シャ及びインの各條参照。

テ 又 タラン 丈(が)、低い。

テ、タヤ 力量。

テ 又 ネーン 力、がない。轉じて、柄にもない者がといふ時にもいふ。

テ、テウマトウ 炬火。普通甘蔗の絞つた殻を束ねて作る。

テゲー 大概——大體。

テコー、タイコー 太鼓。

テーチ 大島紬の染料とする木の名。その幹を長時間煮ると茶褐色の汁が出る。

テーチ(阿) 俚諺。譬喩。

テーチ・バナシ 阿傳ではテーチと同意に用ひてゐるが、ある部落では昔話の意に用ひてゐる。

テーフー、タイフー 大風。

ウー・テーフー 大大風。

テミ 分際。

ダー テミ 又 汝如き分際が。

テッキユイ 焚き付ける。

ウマトウ テッキリ 火(を)、焚き付けよ。

[ト]

ト 接頭語。左の如き普通より大きい種類の植物に冠した例が多い。唐の義であらう。

ト・アワ 唐粟。粟の穂の大なる種類のもの。

ト・ウニ 甘蔗の幹が大きく紫色をしてゐる種類のもの——竹蔗。唐蔗の義。

ト いざ——さあ。ディーに同じ。

ト アシカラ(老) いざ、さらば。——別れる時に云ふ語。

ト 蛸。

ト・アダネイ 龍舌蘭。唐阿旦の義。

トーガ 冬瓜。シブイに同じ。

トーグラ、トンガ 臺所——此處で炊事や食事をする。臺所はウムテイ(母家)に接続する別棟の家で、サともいふ。

トートウ 祈る言葉。恐ろしい時、又は敬虔なものに心を打たれた時などに「トートウトートウ」と繰返し唱へる。又トートウガナシともいふ。貴しの義といふ。

トー・チビ 玉蜀黍。

トードウイ 八月踊りの踊子を指揮する者。青年の主立つた者が當る。頭取の義。

トーネイ 木を刳つて作つた家畜の食器。

トーヌ・チミ 黍。

トー・マミ 蠶豆。

トッカシー 水母。又二三歳の女兒の髪を水母の形に結つたもの。

トッサゲ 鳳仙花。パマッカに同じ。

トリー 鳥居。

〔タ[△] 無氣音〕

・タ[△](老) 蓋。ブタのブの脱落したもの。ブタに同じ。

タ[△]ー 等。人名にのみ附する。人代名詞には附けない。チャ参照。

タロー・ター 太郎たち。

ターガー、ターワー(阿) 双生兒。

ターツ、タートウ(阿) 二つ。語頭のフの脱落。

タイ、タリ(上蓋) 接尾語。人——たり。チュイ(一人)、クイ(二人)、ミチャイ(三人)は前の語根に溶化してゐるが、四人以上の數へ方は語根にタイを附する。敬語トール参照。

タナー 物と物との間。例「棚と壁のタナー」。

タネイ だらけ。

スナツタネイ 砂だらけ。

〔チ[△] 無氣音〕

チ[△] 助詞。と。テンに同じ。

タロー チ[△] イユン チュ 太郎、と、いふ、人。

ク[△]ー チ[△] イチ 来い、と、云つた。チイチはチチともなる。

ヌ[△]ー チ[△]チム チカン 何と云つても、聞かない。チチムはチイチムともなる。

チ[△]ー 血——動物の血。又は植物の液汁。血統。

ア[△]チー 血、動物の血にいふ。赤血の義。

チ[△] トウラン 血統に關係がない——血縁がない。

チ[△] ブッキ 打撲傷の一種で皮膚が腫れて紫斑を呈するもの。血ぶくれの義。

チ[△] ムルシ 血の塊り。

チ[△] ヤブイ 食傷の結果血液や皮膚に異状を生ずると考へられる事にいふ。血破りの義。

チ[△] 乳。チ[△]チー参照。

チ[△] エーシユイ 乳を絞り出す。

チ[△] スニヤ 乳呑子。

チ[△] 一重。

チ[△] チチュビー 一重帯——一廻りの短い帯。

チ[△] アンマー 乳母。

チ[△] チー(兒) 乳。

チ[△] ニシ 舊曆二月頃に吹く強烈な北風。ニシは北又は北風。

ニガトウ ヌ チ[△]ニシエー エ[△]ウシ[△] ヌ ワタ イツブガシユイ(謠)

二月の、チ[△]ニシは、瘦せ

牛、の、腹(を)、射穿^サがす。

チ[△]ユイ、チ[△]ヤ[△]ユイ 消える。チ[△]ヤ[△]シユイ参照。

チ[△]テイ マリユイ 消えて生れる——死産のこと。

チ[△]カイユイ 近付く。

チ[△]カサイ 近^ツ。

チ[△]カラ 力。チ[△]参照。

チ[△]ゲ 不揃——揃物の椀などの数が缺けてゐること。

チ[△]クイラン(老) けしからん。聞えないの義。

チ[△]クン 氣根——精力——元氣。

チ[△]シ[△]、チ[△]シリ(上蓋) 煙管。

チ[△]シンハブ[△] 煙管の雁首。

チ[△]シヌ[△]ス[△] 煙管の脂。煙管の糞の義。

チ[△]シバラ 山の頂上の斷崖になつた所。キシ又はチ[△]シともいふ。

チ[△]ダリ 氣疲れ——氣抜け。

チ[△]チ 細く長い木材、茅屋根の下部に縦に並べて敷くに用ひる。

チ[△]チャイ 刻んだ形——ぎざ[△]。

チ[△]チュビ、キ[△]チュビ(小野) 帯——男女のしごき帯にいふ。ウビ参照。

チ[△]ツチャー・マ[△]ツチャー 鶯の雛。冬に現れ、チチと鳴きつゝ、よく地上を跳ね歩くもので、春になつて鶯

になるといふ。マ[△]ツチャーは目白。

チ[△]ットウム 是非とも——押し切つて。例「チ[△]ットウム來いといふ」。チ[△]ヤムに同じ。

チドウ 出來物。傷の義。

チナガミ 氣慰め。例「故人の寫眞を見てチナガミする」。

チバイ、キバイ(小野) 働き——稼ぎ。チバユイ参照。

チバイ ナ 自己と同等の者が働いてゐるに對し言ふ挨拶。精が出るね、に相當す。

ヌー チバイ デー 何、働き、ですか。強ひて聞く程でなく、道で會つた人に訊ねる挨拶言葉。

チバユイ、チバウイ(阿) 働く——稼ぐ。

チバリ ヨー 精出して働けよ。

チム 助詞。とも。

ヌー チム イヤンテイ 何、とも、言はなかつた。

チム、キム(小野) 肝臟、心、精神。

チム・イヂユイ 腹を立てる。

チム イヂブッキユイ 非常に腹を立てる。フッキユイは膨れる。

チム・イナサイ 氣が小さい。

チム・ウビサイ 氣が大きい。

チム・グルサイ 心痛い——死別の時などの心の苦しさ。

チム・シチュイ 苛立つ——あせる。

チム・ターサイ 氣位が高い。歌に「きむ高さわぬ(吾)はよそに憎まれて」。

チムチエーカ、キムチャギカ(小野) 可哀想な、氣の毒な。ムイナに似てゐる。

チムツチー 短氣者。

チム・ナガサイ 氣が長い——呑氣である。

チムナガサ アリトー シグトウナラン 氣長で、彼とは、仕事はならぬ。——一緒の仕事は出来ぬ。

チム・フッキラシユイ 驚愕する。肝を膨らすの義。

ウマトウ カチ ウムテイ チム・フッキラチ ミチャッサ 火事、か、と、思つて、驚愕(して)、

みたよ。——びつくりした事だつたよ。

チム・フデーシユイ 氣を大きくしてやる——慰めてやる。

チムヤサイ 根性が悪い、性根が悪い。

チム・ヤミユイ、チム・ヤニユイ(阿) 後悔される——惜しい。例「そんな事をして、後でチム・ヤムナよ」。

チヤ、キヤ(小野) 人代名詞等に附して複数をあらはす。ター、ナー参照。

ワーチヤ、ワーキヤ(小野) 吾等、この語は眼前にゐる多數の者を含めて我々といふ場合に用ひる。ナ

ーの條ワンナー参照。

ダーチヤ、ウラーチヤ(嘉) 汝等。ダンナーともいふ。

ナーチヤ あなた方。

ウヤンチャー 親たち。

チヤ 接頭語。直ちに、忽ち、即時にといふ意を表はす。

カムトウ チャナギ シリ 掴まへると、即投、せよ。——掴まへるや否や直ちに投げよ。

チャ 接頭語。ひたの訛か。

チャマツスグ 一直線——まっすぐ。

チャマトー 何一つ障害物のない廣場。マトー参照。

チャサー、キャサー、チャシ(阿) 虱の卵。古語きさゝ。

チャシユイ、チャスイ(阿) 消す。字を消す、火を消す等。チーユイ参照。

ウチツチャシユイ 人の話を云ひ消す。打ち消すの義。

チャツキ、チャツキナ 直ぐに——直ちに。

アピラバ、チャツキ クー 呼んだら、直ぐに、来い。

チャファール 始終——いつまでも。例「チャファール待つても来ない」。

チャミー ちつぽけな者——ちび助といふやうな感じ。

チャム 是非とも。チットウムに同じ。

チャム ミシリ チチ チカン 是非とも、見せろ、と云つて、承知しない。

チャユイ、キャユイ(小野) 光る。語頭ヒの脱落。

チャラツチャラ チャテイ ウイ ビカく、光つて、ゐる。

チュ 人。又は他人。歌ではピトウ又はピチュ。

チュンチャー 人々——人達。又は他人達。

チュヌシマ 他村。

チュドウチ 人時。——人の出歩く時間、即ち夜の十二時頃迄。其の後鶏鳴時迄は魔物などが横行する時と云ふ。

チュ 接頭語。ひと——。

チュ・イチニ、チュネイツキニ 一息に——一氣に。

チュツカミ 一掴み。

チュ・フイ 一度——一回。

チュフオール 一ヶ所——又は同じ場所。

チュ(小野)、ガチュ(小野) 助詞。つゝ。ヌーに同じ。

アツチャーチュ(小野) パナシ 歩きながら、話せ。

チュスイ、キヨシユイ(小野) 家を壊す、家を倒す。

チュテ 寸時——少しの間。

ニヤー、チュテ マッチ ミロ 今、暫く、待つて、見よう。

チュナンカ ひと七日の忌。

チュフェー 一列又は一かさね。フェーは列に相當する接尾語。

チュフェーチュフェー 一列々々——轉じて片つばしからといふ意にも用ひる。ウツチョーウツチョーに同じ。

チ[△]エーカ、チ[△]ギカ(小野)

助動詞。らしき。

ブイチエーカ テインキ

降りさらな、天氣。

ブイチエーク ナテイ・チャ

降りさうに、なつて、來た。

チ[△]ョータ いつその事。

エーダー・マー ニ ヌロツカ チ[△]ョータ アツチエー カチ

痩せ馬に、乗るよりは、いつそ、歩

くが、増し。

チ[△]ョータミ どつさり——澤山。ガバよりは意が強い。あまり品の良い言葉ではない。

クリフアー チョータミ ムラタ 密柑、たんまり、貰つた。

チ[△]ヨム、チ[△]ヨン さへ。

ユミチヨム デイキラン ムン ヌ カチ デイキユン ニヤ 讀みさへ、出來ない、者、が、書き、

出來る、か。

チ[△]リベー 霞——もや、霧。

チ[△]リムン 庖丁、漁夫が海上で用ひる忌言葉。切り物の義。スピントもいふ。

チ[△]ロー、キ[△]ロー(小野) 膽力——度胸。器量の義。

チ[△]ロー・ナサー(阿) 臆病者。

チ[△]ン、チ[△]ヌ、キ[△]ン(小野) 着物。

シユラ・ニヌー 晴着——美衣の義。

サマ・ギン(小野) ふだん着。サマは日常。ユチャーに同じ。

チ[△]ンチファダ 衣類。肌に着けるもの、總稱。

チ[△]ンダ、チ[△]ンチャ 麻で細く縫つた絲、釣に用ひる。

チ[△]ンター ちつぽけな者。チ[△]ミーに同じ。

チ[△]ンダイ(老) 軍人。鎮臺の義。

チ[△]ンチャン 大根を細く刻んで煮た料理。

チ[△]ンチン 追々——だん／＼。例「風が西北へ廻つたから、チ[△]ンチン海も風ぎるだらう」。

チ[△]ンメー 報酬、——金錢物品等總ての。賃米の義か。

〔テ[△]イ 無氣音〕

テ[△]イータチ 朔、月の第一日。十五日と同じく、床花を活け先祖棚に花香を上げ、又家に依つては氏神へ詣る。

テ[△]イデー 序で。

テ[△]イサ とぞ——とさ、と言ふ事である。多く昔話の結語として用ひられる。

テ[△]イツ、テ[△]イトウ(阿) 數詞。一。これは單獨にいふ場合で、一二三のやうに數へる時、即ち順序數の場合

は、語尾のツ、又はトウを省略してテ[△]イとする。

テイトウシ 同一年——同年生。
テイツ、テイトウ(阿) 全く——殆んど——能く。
テイツ ニチュイ 全く、似てる。

〔トウ 無氣音〕

トウドワ、ツーツ(小野) 言葉の意味——内容。通じの義か。
トウドロー ワーラン 言葉の意が通じない——幼児の言葉や他國語などを語られて、何を云つてゐるか分らないと言ふ様な場合にいふ。
トウブ、ツープ(小野) 句の前又は後に置いてまゝ、呆れたといふ様な意を表はす。例「トウブそんな大きい人が馬を恐れて何とする」。
トウミ 鵜——つぐみ。
トウイ、ツイ(小野) 釣瓶、又は釣錢。
トウカイ 缺乏——支へるといふ意を表す接尾語。トウカイユイ参照。
ハネイ・トウカイ 金に困ること。
ピントー・トウカイ 返答に困ること。
トウカイユイ 支へる——缺乏する。

ハネイ トウカイユイ 金が缺乏する。
トウキヂ 燐寸。ダンツキに同じ。
トウキヂン・タネイ 燐寸の軸。マッチの種子の義。
トウキヂ、ウンダヤシュイ 燐寸を摺る。打出すの義。
トウクイ 人柄——性格。又は物の構造。作りの義。
シュウダ トウクイ チヤ 變な、人、だ。——變な性格の人だ。
トウクミ 牛馬の綱に附して、その縫りを防ぐ8字型に彫つた板。
トウクユイ、トウツユイ(阿)、ツッキユイ(小野) 造る。この連用形はトウクテイが普通であるが、阿傳ではトウツチ、小野津ではツツテイともなる。
トウクラ、トウツカ(阿)、ツクラ(小野) ぼら魚の幼魚。約五寸位までのもの。サクチ参照。
トウケイ 使ひ。
トウケイ・ファンダー 使ひに行つて目的を果さずうやむやで歸ること。ファンダーはパンダシュイ即ち外すの名詞化せるもの。
トウケイ・チン 小使錢。
トウチ、ツキ(小野) 月——十二月の月。
ヌビユン・トウチ 太陰曆に於ける一ヶ月の日数は二十九日を標準として、三十日ある場合はヌビユイ即ち延びるといひ、その月をヌビユン・トウチといふ。然して三十日目の日をアトウヌ・ニチュークン

チ即ち後の二十九日といふ。

トウチ、ツキ(小野) 月——太陰。ト——ト——参照。

トウチヌイ 月——太陰。

ウドウチサマ お月様。歌ではウヅキサマ。

トウチ・ヌ・ユル 月夜。

ミカ・ドウチ 三日月。ハタケー・トウチヌイ即ち片缺月ともいふ。

デューグンチ・ヌ・トウチ 十五日の月。満月。

トウチ 槌。

ヤンドウチ 槌の最も大なるもの。

トウチヨッカー 小槌——釘などを打つもの。

トウチ・ヌ・ムン 月経。ゲッケイとも云ふ。

トウチン・タラン・カー 月に満たないで生れた子。

トウココーユイ、ツッコーユイ(小野) 着物の破れを繕ふ。

トウツサギー、ツツサギー(小野) 越中ふんどし。イターシーに同じ。古語にたふさぎ。

トウツバユイ 突張る。又は頑張る。

トウツバリ 頑張れと聲援する語。

トウツバタ 困つた——ひどい目に會つた。

トウトウシ 鳥類の喙囊、えぶくろ。

トウドウチュイ 續く。

トウドウカン 續かない。又はやり切れない。後者の場合はトウドウカランともいふ。例「こんなに暑く

てはトウドウカラン」。

トウドウムン 甘薯の事を漁夫が海上で云ふ忌言葉。粒物の義。

トウドウユミ 歌などを節を付けずに誦すること。

トウドリーユイ 災難が連続する。例「祖父が死んで以來、トウドリーティ(災難が続いて)、病人が出る

やら家畜が死ぬやら大變だ」。

トウナ 綱——繩。なほといふ語は單獨にはない。

ワランナー 藁繩。

ニーシンナ 馬の鞍に備へてある荷締繩。

トウナ ノーユイ 繩を縛ふ。

トウナ カチュイ 三つ縫りの繩を縛ふ、但し三人でするか、クンマーポーを用ひる場合に言ふ。カチ

ユイはかくの意であらう。

トウニユイ、トウウイ(阿) 飯を盛る、汁を注ぐの盛、注ぐ。オーギユイ参照。

トウヌ、ツヌ(小野) 角。又は突起したもの。

ウシン・トウヌー 牛の角。

ミツチエン・トゥヌー 額の瘤。

トウヌ・ホーイ 仔牛が生後三四ヶ月頃になると、乳を飲む事も忘れて人目のない處で眠り続けるに云ふ。此の時期に角が生え出すので角買ひといふと。尙轉じて、人が仕事を休んで方々遊び歩いて、何處へ行つてゐるか分らないといふ時、何處かで角買ひだらうと言ふ。

トウヌマター 一つのまた。海藻の一種。

トウブシ 膝頭。

トウブラー、トウブル、ツブル(小野) 髑髏。又頭の鄙稱。

トウマイ 非常に——甚だ。

トウマイ シュラサン イドウ 非常に、美しい、繪。

トウマラン 單獨に用ひる時は、大變だ——困つた事になつたの意になり、副詞とすれば飛んでもない、又は大變な、となる。

トウマラン クトツ・シ クリタ 飛んでもない、こと(を)、して、くれた。大變なことをしてくれた。

トウミ、ツミ(小野) 爪、又は馬の蹄。

トウミツチユイ、ツミッキユイ(小野) 抓る。ムヂツチユイとすれば更に強く抓るの意となる。

トウミユイ、トウニユイ(阿)、ツミユイ(小野) 撮む——つまむ。

トウム、トウムイ きつちり——かつきり。

トウム イッシュー かつきり、一升。

トウム イッシュー かつきり、一升。

トウマイ、ツムイ(小野) 積り——豫定。

アチャ ウッタチュン トウマイ デャ 明日、出發する、積り、だ。

トウマイ、ツムイ(小野) 命數。

トウマイ デーソー シカタヌ アエーンニヤ 命數ですから、仕方、が、ありますか。——人の死

んだ時にいふあきらめの言葉。

トウムユイ、トウムウイ、(阿)、ツムユイ(小野) 積る——見積る。

トウユ 露。ユトウユとも言ふ。

トウユ 目白。マツチューに同じ。

トウラ、ツラ(小野) 面——顔。

ユム・ドウラ 人の顔を卑しめていふ語。恥も知らぬユムドウラ等といふ。

トウラ ムッチ アッカラン 顔(を)、持つて、歩けない。——世間に顔出しが出来ないの意。

トウラウチ 皮肉、意地悪く面と向つて皮肉を言ふ事。面打の義。

トウラドウラー トウ 副詞。どの面下げてやつて来たかといふ場合に、「トウラドウラー トウよくもやつて来た

ものだ」と言ひ、又面と向つて罵倒する事を「トウラドウラー トウ言ひこなす」といふ。

トウラフイ 馬が顔を左右に振つて、何か不満げな様子をする事に言ふ。

トウリ 類——連れ。

イン・トウリ 同類——似た様な物、人にも物にもいふ。